第13回　2021年度

子どもノンフィクション文学賞

受賞作品集

見て、聞いて、調べて、
自分の言葉で書いてみよう。

主催：北九州市　共催：北九州市教育委員会　協賛：日本児童図書出版協会
後援：朝日学生新聞社　公益社団法人全国学校図書館協議会　公益社団法人海外子女教育振興財団

印刷物登録番号：2110107A

第13回　子どもノンフィクション文学賞　受賞作品集

2021（令和3年度）

国内外の小中学生の皆さんより、数多くの応募をいただきました。こころよりお礼申し上げます。

子どもノンフィクション文学賞

もくじ

ごあいさつ　北九州市長　北橋健治　2
選考講評　あさのあつこ／最相葉月／リリー・フランキー　4

小学生の部

大賞

かずはずっといきる　川名蒔子　10

佳作

おばあちゃんの本当のお母さんを探す旅　本多祐実香　12
ひいおばあちゃんの戦争体けん　齋藤宣人　21

選考委員特別賞

あさのあつこ賞　ぬっちまった　青木龍之介　25
最相葉月賞　DER WÜRFEL　チャケレオン　28
リリー・フランキー賞　「食べることは生きること」給食から学んだ食の大切さ　田村萌梨　37

中学生の部

大賞

命の襷を繋ぐ時　座間耀永　47

佳作

「平和のバトン」は「命のバトン」　井口穂香　70
ウズラと暮らせば　石川照葉　88

選考委員特別賞

あさのあつこ賞　あたりまえとは　國丸祐司　109
最相葉月賞　転校を経験して　（ペンネーム）小山公也　114
リリー・フランキー賞　かか　林翠恋　121

資料　小学生の部　受賞作品・学校団体賞・最終候補作品　136
資料　中学生の部　受賞作品・学校団体賞・最終候補作品　137
資料　応募結果　138

第13回子どもノンフィクション文学賞

北九州市長　北橋　健治

第13回子どもノンフィクション文学賞を受賞された皆様、そして、ご家族、学校関係者の皆様に心からお祝いを申し上げます。

この文学賞は、子どもたちがノンフィクションを書くことを通して、人間や社会への関心を持ち、自ら考える力を高めていくきっかけとなることや、先人たちが築いてきた豊かな文芸土壌が受け継がれることを願い、２００９年度に創設されました。

今回は、国内外から、小学生の部３４２編、中学生の部４２８編の合計７７０編の作品が寄せられました。

応募された作品の中から、厳正な選考を経て、小学生の部は川名蒔子さんの「かずはずっといきる」、中学生の部は座間耀永さんの「命の襷を繋ぐ時」が大賞に決定しました。また、10名の方の作品が佳作、選考委員特別賞に選ばれました。入賞された作品はもちろん、いずれの作品も素晴らしく、選考委員の皆様も大変なご苦労をされたことと思います。

さらに、この文学賞に特に熱心に取り組んでいただいた小・中学校に贈られる学校団体賞は、北九州市立浅川小学校、東京学芸大学附属大泉小学校、横浜市立長津田小学校、飯塚市立筑穂中学校、大阪府立富田林中学校、シンガポール日本人学校中等部に決定しました。

受賞者の皆様に改めてお祝い申し上げますとともに、今後とも、作品の創作を続けていかれることを期待しています。

また、これまで当文学賞にご尽力いただいた那須正幹先生の後任として、今回から児童文学作家のあさのあつこ先生に最終選考委員としてご就任いただき、大変心強く感じています。

本市では、今後も、「創造都市・北九州」として、豊富な文化土壌を活かし、更なる文化芸術の振興に取り組んでまいります。あわせて「あなたにあいたくて生まれてきた詩」コンクールや「林芙美子文学賞」等の取組を通して「文学の街・北九州」の魅力を全国に発信し、豊かな感性を持つ子どもたちを育んでまいりますので、皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

結びに、多忙な中ご尽力を賜りました選考委員の皆様、応募をとりまとめていただいた学校関係者の皆様を始め、コンクール実施に当たりご協力いただいた関係の皆様に厚くお礼を申し上げます。

一つ一つのきらめき

児童文学作家 あさの あつこ

1954年岡山県美作市生まれ。青山学院大学卒業。
岡山市にて小学校の臨時教諭を勤めたのち、作家デビュー。
「バッテリー」で第35回野間児童文芸賞受賞。
「バッテリー」全6巻で第54回小学館児童出版文化賞受賞。
「たまゆら」で島清恋愛文学賞受賞
著書に「No6」シリーズ、「THE MANZAI」シリーズ、「グリーン・グリーン」「烈風ただなか」「白光」シリーズなど多数。

今回、初めて、子どもノンフィクション文学賞の選考委員に加わらせていただきました。わたしは物語の書き手なので、ノンフィクションで、しかも小学生、中学生のみなさんが書いた作品がどういうものなのか、よくわかっていなかったと、ここで正直に告白します。むろん、以前の受賞作は読んでいて、その完成度に驚きもしたのですが、今回、手許にどさりと届いた最終候補作品には、さらに圧倒されたと、これも正直に告げたいと思います。

原稿枚数に関わりなく、どの作品もきらめいていました。個性という名のきらめきを確かに放っていたのです。

七色に輝くもの、深い緑色を秘めたもの、読者によってさまざまに色合いを変えるもの、名付けようのない不思議な光に包まれたもの、光沢のある美しい黒をまとったもの……同じものは一つもなく、似たような感じのものさえ、ありませんでした。一作品、一作品がこの作者でなければ生み出せなかったと、つまり作者の個性から芽吹き、育っている世界だと実感させてくれたのです。

全作品が手練れの作とは言いません。読みにくかったり、文法がちょっと変だったり、表現がちぐはぐだったり、そんな作品もいっぱいありました。でもそんなことは、どうでもいい、小さな瑕にすぎないと思わせてくれるだけの個性の力がほとばしっていて、わたしは読み進めながら、その力に振り回されている自分をずっと感じ続けました。

すごいぞ、みんな。

自分の身の回りの出来事を、経験を、想いを、こんなに豊かな言葉で書き表せる。ときに情熱的に、ときに冷静に言葉を駆使して世界を創り上げている。みんなの力に嬉しくなったり、興奮したり、楽しいけれどとても疲れた仕事でした。そういう作品群に優劣をつけるのは、ちょっと苦しかったのは事実ですが。

小学生の部の大賞『かずはずっといきる』は、読み終えてしばらく動けなかった作品でした。百二歳で亡くなったひいおばあちゃんを通し、生と死を見つめた云々と書けば、とてもありきたりの印象を与えてしまうでしょう。でも、ありきたりなんてとんでもない。ここまで死を自分だけのものとしてとらえ、自分の感覚を通して書いた作品をわたしは他にほとんど知りません。ただ一つ浮かぶのはガルシア・マルケスの『百年の孤独』でしょうか。あさのあつこ賞に選ばせてもらった『ぬっちまった』は、もう本当に心底から笑って、笑って、笑わせていただきました。一度読んだだけで、大好きになりました。カッターナイフで手を切って、それを病院で縫ったとそれだけの話ではあるのですが、何だろう、このユーモア感覚と何もかも蹴っ飛ばしてずんずん進んでいく文章のかっこよさは。〝しんげきの巨人みたいな物が見えた〟という一文に吹き出し、連続する「なにを切っていたの?」にまた吹き出し、これはぜひ、あさのあつこ賞にと望んだ、その思いが叶って嬉しいです。

中学生の部は、本当に力作ぞろいでした。大賞の『命の襷を繋ぐ時』は、真摯で一途な熱を持つ本物のノンフィクション作品だったと思います。自分と父親の病を通して、作者が得たもの、そして、失ったものが淡々と、でも、印象的な文章で書かれている……というより刻み込まれているような作品でした。価値観を押し付けてくるのではなく、作者が手の中で大切に育んだそれをわたしたちにそっと見せてくれるのです。あさのあつこ賞は、『あたりまえとは』に決めました。衝撃的な作品です。母親の死を経験した作者は、読み手であるわたしたちに「あたりまえとはなんだ」という問いをつきつけてきました。あたりまえの日常があたりまえに続くと信じているわたしたちに、それでいいのかと覚悟を迫ってきたのです。何とも怖く、力に満ちた一作でした。

生きるために書く

ノンフィクションライター 最相 葉月

©新潮社

1963年生まれ。1997年「絶対音感」で小学館ノンフィクション大賞、2007年「星新一 一〇〇話をつくった人」で大佛次郎賞、講談社ノンフィクション賞など五つの賞を受賞。他の著作に「青いバラ」「ビヨンド・エジソン」「セラピスト」「れるられる」「ナグネ 中国朝鮮族の友と日本」「理系という生き方」「胎児のはなし」（共著、当賞受賞者への取材を含む）「調べてみよう、書いてみよう」（講談社）など。主なテーマは科学技術と人間の関係性、精神医学、教育、音楽ほか。

今年は応募件数が回復しただけでなく、小中学生とも粒ぞろいの作品が集まったことを嬉しく思っています。パンデミック二年目となって少し落ち着いて行動できるようになったためでしょうか、病や死、戦争といった重いテーマに向き合うものが多く、この時間が誰にとってもかけがえのないものであったことがうかがえました。

小学生の部「かずはずっといきる」は、満場一致で大賞となりました。曾祖母の死をきっかけに、なぜ人は生まれ、なぜ死ぬのかを考えた作品です。自分や親の死を恐れるのではなく、死そのものを問うている。生と死の境目もあいまいな未分化の状態からたぐり寄せた一つの答えに目を瞠りました。この感受性を守りたいと思いました。

佳作「おばあちゃんの本当のお母さんを探す旅」は、養女だった祖母の実母探しに伴走した旅の記録です。冒頭、仏壇の写真の曾祖母が誰にも似ていないと気づくところからぐんぐん引き込まれました。戸籍の追跡や墓参り、干芋のエピソードも「本当」にたどりつくまでの重要な伏線となっており、著者の物語る力にうなりました。

佳作「ひいおばあちゃんの戦争体験」は、八幡空襲を経験した曾祖母を取材した作品です。コロナで面会が叶わない中、リモートでのインタビューとなりましたが、曾祖母は若い人たちに伝えたかったと快く引き受けてくれました。曾祖母がいたのは八幡製鉄所の製図室。逃げる途中で手をつないでいた先輩が亡くなり、自分は生き残ったという曾祖母の、戦争を美化してはいけないというメッセージは確かに次の世代へと引き継がれました。

最相賞の「DER WÜRFEL」はドイツに暮らし、「ホーホベガープト（ギフテッド）」に認定された著者の、自身の才能をめぐる考察です。学校の勉強で何に不自由を感じてきたか、テストとは何か、読み書きと話す力のギャップはどうして起こるのか、切実な問いを重ねます。一律の教育への問題提起でもあり、多くを教えられました。

中学生の部大賞「命の襷を繋ぐ時」は、五十枚の原稿用紙の隅々にまで祈りが込められた作品です。父親のがん宣告をきっかけに、突発性側湾症の手術を受けることになった自身の経験を振り返ります。心ない医師の発言や病院でのクラスター発生、父親の「最後の」食事のこと。コロナ下で起きていたもう一つの命をめぐる家族の壮絶な闘いを、感情を抑えて冷静に綴る筆力に圧倒されました。

佳作「『平和のバトン』」は『命のバトン』」は、祖母の父の兄・正栄さんの遺影と葉書をきっかけに、戦争について調べ、考え、正栄さんの心情に近づこうとした作品です。なぜ普通の人々が戦争に突き進んだのか、本を読み、史跡を訪ね、玩具やポスターから丁寧に読み取ろうとしています。正栄さん自身のことも調べられたらなおよかったでしょう。

佳作「ウズラと暮らせば」には、ウズラの誕生から死まで、飼育を通して生き物の実際を知ることができる作品です。病気やつがいとしての行動、ミラー・テストなど専門的な話も軽快な語り口であるためかすいすい読める。科学的な考察力にユーモア感覚も加わって、非常におもしろく読みました。

最相賞「転校を経験して」はこわい作品です。田舎の小さな学校から都会の学校に転校したことで、著者の日常が少しずつ歪んでいく様子が淡々と綴られています。読んでいるうちに、学校に大変なことが起きていること、著者自身もそこに巻き込まれていることがわかるのですが、告発文ではなく、あまりに冷静で客観的に書き進められているため、じわじわと恐ろしさが増すのです。受賞にあたりやむなく匿名を選ばれましたが、それでも活字にする意味があると考えました。

今回は全体的にレベルが非常に高く、受賞作以外にも優れた作品がありました。みなさん、これからも書き続けてください。

技巧だけでは届かない文学の世界

イラストレーター・作家・俳優 リリー・フランキー

1963年、北九州市小倉生まれ。武蔵野美術大学卒業。イラストやデザインのほか、文筆、写真、作詞・作曲、俳優など、多種多様な分野で活動する。自身初の長編小説「東京タワー　オカンとボクと、時々、オトン」は06年本屋大賞を受賞、220万部を超すベストセラーとなった。オリジナル絵本「おでんくん」はアニメ化され、オリジナルグッズも性別世代を超え幅広い人気を集めている。

小学生の部

大賞「かずはずっといきる」は、小学生の部を選考中、候補作の最後に読み、何かすごいものがでて来たなと感じた作品でした。小学一年生で、おとなでも持っている曖昧な感覚を、一生懸命、手描きの文字で言語化しようとしている。おとなが忘れてしまっている感性を、普通に感じ、それをみずみずしい文章で書いていることに感動しました。それがどんなに素晴らしいことかを本人や家族にも知って頂きたいと思いました。3枚の原稿量でも読ませる力が強く、何か文学的な作品です。

佳作「おばあちゃんの本当のお母さんを探す旅」は、身近なことをよく調べて書いた作品で、読み物として引き込まれていく文章の強さを感じました。読ませる力と調べる感受性に迫力があり、それでいて目線がフラットで、読んでいて絵が浮かんできました。大賞でも遜色のない作品だと思いました。

佳作「ひいおばあちゃんの戦争体けん」は、ひいおばあちゃんにリモートインタビューをして神奈川で書いているのですが、この世代が戦争体験者の生身の人間から聞ける最後の世代だと思いながら読みました。いいところまできたのに何となくもったいないというか、もう少し突っ込んで書いてほしいと思いましたが、小学三年生ということを考えると、すごく頑張っていると思いました。

リリー・フランキー賞「『食べることはいきること』給食から学んだ食の大切さ」は、他の子どもたちがエッセイ的な作品や社会情勢を書いている作品が比較的多い中、テーマの探し方が面白いと感じた作品です。学校で学び、いろいろと経験をしていることを安定した文章で書いています。

中学生の部

大賞「命の襷を繋ぐ時」は、本人や家族のことを書いている一つ一つの描写がすごく正確というか生々しくて高く評価しました。本人がギプスをしながら生活をする描写とか、そこでお父さんの病に立ち向かっていく感じとか、非常に息が詰まる思いを感じながら読みました。子が親の立場に、親を守る立場に近づいていく、お互いが病をもつことで娘が強くなっていく様子が見えてきて、闘病日記だけではない読み物としての力強さを感じました。

佳作「『平和のバトン』は『命のバトン』」は、大人が、ドラマや映画などで戦地から送られてくる葉書を、疑いもなくいいものとして扱うことが多い中で、この作品は、それに疑問を持ち、額面通りに受けとっていないところとか、戦争がもたらす恐さ以外の痛みにも辿りついているのが、素晴らしい視点だなと思いました。

佳作「ウズラと暮らせば」は、すごく頑張って書いている飼育日誌で、よくこの枚数が書けたと思いました。この内容だとこの長さにしなくてもよかったのではというのと、それくらい長く書けるという頑張りを感じました。この作品を読んで、飼育日誌の作品が好きだった那須先生を思い出しました。

リリー・フランキー賞「かか」は、子どもが対面する一番苦しい出来事の中で、感情をむき出しに書いてしまいそうなのに、努めて平板に物事をみていく丁寧さ、あったことを淡々と書きつつ、物事が進んでいくやるせなさとかを、自分の感情を抑えながら一つ一つのディテールをすごく丁寧に描いていました。最後の部分は、ここで終わるのは気持ちよくないと思いましたが、こういうことに人間がどうして傾倒していくのかとか、子どもたちもこのように影響を受けて、少なくともそれで少し気が楽になるのであれば、役に立っているのかもしれないということも含めて、よく感情を抑えながらここまで書けたなということで選びました。

自分のいる環境でみんなそれぞれ頑張ってほしいと思います。普通に感じることで何かを書くことができる人がいる。恵まれた環境にいる子どもたちも、今回の大賞作品を読んで、技巧だけでは届かない文学の世界を学習してもらいたいと思います。（談）

小学生の部
大賞

かずはずっといきる

さいたま市立尾間木小学校　一年
川名　蒔子

四さいのときひいおばあちゃんがしんでしまいました。ひいおばあちゃんは、百二さいでした。

ひいおばあちゃんは、百さいまでげんきでした。げんきなときは、こうえんにあるいてきてくれました。百一さいになるまえに、あしのほねがおれてあるけなくなってしまいました。

ひいおばあちゃんがねているときに、なんどもおみまいにいきました。あいにいったけどめをあんまりあけなくなりました。あとおかあさんがスープをもってきてひいおばあちゃんがたべたらスープは、しょっぱいのにあますぎるって一くちしかスープをたべなかったです。そのあとなにもたべなくなりました。しゃしんをみせたらみてくれたこともありました。ひいおばあちゃんは、わたしがくるとあくしゅをしてくれました。

ひいおばあちゃんがしんだつぎの日からしぬのがこわくなりました。そしてだいどころのまえで二、三かいなきました。

じぶんがなぜうまれたのか、しぬのかがふしぎです。しんだらじごくは、あるのか、てんごくは、あるのかがふしぎです。

みんなしんでしまうのです。ちいさいのにしぬ人もいるのです。

おばあさんでもずっといきている人は、やまんばになっているのです。やまんばは、にんげんをたべてしまうので、人にころされてしまいます。

ひいおばあちゃんがしんでみにいったとき、ひいおばあちゃんがつめたすぎて、きゃーといいました。だんだんひいおばあちゃんのかおがしろくなっていきました。つめたいおへやにいれられていたのがこわかったです。あとしろいおばけみたいなふくもこわかったです。

もやされていたときが、こわすぎて、なみだをながしてしまいそうでした。ほねになってるのも、こわかったです。おはかにほねがいれられたのもこわかったです。

しぬのがこわいからどうしたらしなないか、かんがえました。

ドラえもんのせかいにはいったらいっしょうしなないのでのびたくんのせかいにいきたいです。のびたくんは、ぺらぺらのかみでとしとらないのでのびたくんのせかいにいきたいです。てれびをはつめいしたひとにきいて、てれびにはいりたいです。でもおかあさんは、ドラえもんのばんぐみがおわるとのびたくんは、てれびからでられなくなるんじゃないかといっていました。

六さいになるときにおもいつきました。

かずは、にんげんがしんでもちきゅうがおわってものこっています。百よりも千よりも大きいかずもあってむげんにあるのでかずになりたいです。かずは、ほしで、できているんじゃないかとおもいます。せかいがおわってもかずは、いきているのでわたしもかずになりたいです。

小学生の部

佳作

おばあちゃんの本当のお母さんを探す旅

安平町立追分小学校　三年
本多　祐実香

1、おばあちゃんのおうちの仏だん

母のおばあちゃんの家の仏だんには、2つの写真があります。おばあちゃんのお母さんとお父さんです。私にとってはひいおばあちゃんとひいおじいちゃんにあたります。写真は白黒です。「おばあちゃんになったら、私もこんな顔になるのかな。」って思いました。私と母は顔がとても似ています。母とおばあちゃんもよく似ています。母は双子なのですが、私はよく母とおばさんを間違えてしまいます。母とおばさんとおばあちゃんは3人ともよく似ています。仏だんの写真のひいおばあちゃんはあまり似ていません。ある日、その秘密を知ってしまいます。おばあちゃんとひいおばあちゃんは血がつながっていません。本当の親子ではないのです。

2、二十五年前に見つける

おばあちゃんは二歳八か月のとき養女としてもらわれてきました。八歳のときに近所の人から

「あんたはあの家の本当の子どもじゃない。」と言われ、ショックを受けたけれど、貧しいながらにとても幸せだったので、本当のお母さんを探そうとはしませんでした。育ての親の名前はシンさん。仏だんの写真の人です。シンさんが亡くなったのは、おばあちゃんが三十七歳のときです。

亡くなって数年後、おばあちゃんは、母からの勧めもあって、生みの母である本当のお母さんを探しました。とても変わった苗字だったので、まず電話帳で調べてみたそうです。すると、たった二本の電話で、本当のお母さんにたどり着きました。でも、おばあちゃんはとても苦しかったそうです。シンさんのことが大好きで、本当の母親だと思っていたからです。そしてやっぱり自分を養女に出したことをうらんでいました。近所の人から「お前は本当の子どもじゃない。」と言われてすごくいやで、苦しかったそうです。

今まで幸せだったけれど、本当のお母さんに育てられていたら、きっとそんな思いをしなくてもよかったと思ったそうです。

もし私が母に会えなくなるとしたらと考えてみました。私はお母さんが大好きなので、考えただけで胸がチクチク痛くなりました。母は出張の多い仕事をしていて毎日悲しいです。りこんをした母は私と弟のために働かなきゃいけないことはわかっています。でも毎日一緒にいたいです。母は私にとってかけがえのない人です。そんな母に会うことが出来なくなるなんて、考えられないです。お母さんと離れるなんて、絶対いや。

幼いころのおばあちゃんもきっと「どうして本当のお母さんは私を養女に出したのだろう。本当のお母さんに会いたい。」って泣いたかもしれません。「おかあさーん。」って叫んだかもしれません。そんな子どもを見て、シンさんはどんな気持ちだったのかな。子どもと一緒に暮らさなくても平気な人はいるのかな。私は一緒がいいな。

3、同じように電話帳から探す。

二十五年前、連絡がとれましたが、その後、理由があって居場所が分からなくなってしまったそうです。そして、今年もう一度母と母の双子の妹のおばさんの勧めで、おばあちゃんは、本当のお母さんを探すことにしました。とても大変でした。

本当のお母さんの苗字は北海道には二十件しかないようです。またすぐにつながると思っていました。でもつ

ながりませんでした。毎日三本と決めて、おばあちゃんは電話を毎日かけました。でも一週間で全部の家に電話をかけ終わってしまいました。見つかりませんでした。

4、出生を知る権利

母が「役場に行って、戸籍を調べてみよう。」と言いました。

戸籍って何だろう。調べてみました。

「戸籍は、人の出生から死亡に至るまでの親族関係を登録公証するもので、日本国民について編成され、日本国籍をも公証する唯一の制度です。」と法むしょうのホームページに書いてありました。「公証」は「公式な証拠」です。

簡単に言うと「自分が誰から生まれて、どこに住んで、どんな人と親戚なのかが分かるもの」だそうです。

でも誰でも戸籍を見ることができるわけではありません。私が「友達のお母さんの戸籍を調べたい。」と思っても調べられません。プライバシーの権利があるからです。プライバシーは「自分の生活の秘密」だそうです。戸籍はとても大切な自分の生活の秘密なのです。

おばあちゃんは本当のお母さんのことを調べる権利があるということがわかりました。おばあちゃんの戸籍には、本当のお母さんの名前があり、役場の人に「あなたには、○○さん（本当のお母さん）の戸籍を調べる権利があります。」と言われました。これを「知る権利」といいます。

「プライバシーの権利」と「知る権利」を私は初めて知りました。

ここから、おばあちゃんの本当のお母さんを探す旅が始まります。

5、シンさんのこと。

おばあちゃんは二歳八か月のときにシンさんの家にもらわれてきました。育ての父はもう目、目が見えませんでした。シンさんも片足が無い「義足」の身しょう者でした。

二人の間には子どもがいませんでした。昔話みたいだなと思いました。そこへ親せきからの紹介で、小さな女の子が養女にやってきました。それが私のおばあちゃんです。貧しいけれど、たくさん可愛がってもらったそうです。

おばあちゃんの本当のお母さんのことを調べているとたくさん、昔のことが聞けてとても嬉しくなりました。

母は、シンさんの「めんこちゃん」でした。自分が一番シンさんと似ていると思っていたのに、実は血がつながっていないと聞いて、びっくりしたそうです。

でも悲しくはなかったみたいです。母とおばあちゃんは違う性格なのだと思います。親子でもちょっと違います。私と母は顔がとても似ているけれど、きっと性格はちがうんだろうな。

6、北海道伊達市、夕張市

おばあちゃんはまず私たちの住む安平町で「戸籍証明等請求依頼書」と書いてある紙をもらってきました。本当のお母さんを探すために必要なのは、「戸籍の附票とう本」です。

それをもらうために封とうに

・750円の定額小がわせ

・戸籍証明等請求依頼書

・返信用の封とう

・免許証のコピー

を入れました。

750円の定額小がわせは郵便局で買いました。「かわせ」はお金の代わりです。そして94円の切手を二枚買って、一枚を返信用の封とうにはって、もう一枚を出す封とうに貼りました。伊達市役所に送りました。一週間くらいして本当のお母さんの戸籍の附票とう本が送られてきました。そこにはとても細かい字で、たくさんの住所がびっしり書かれてありました。

私も自分の戸籍とう本が見てみたくて、母にお願いして見せてもらいました。私の戸籍とう本はパソコンの字だけれど、おばあちゃんの戸籍とう本は手書きでした。

祖母の名前に×がついていました。×がつくということは、亡くなったか、その戸籍から抜けたことを意味します。おばあちゃんは本当のお母さんの戸籍から抜けて、育てのお父さんとシンさんの戸籍に入ったのです。

おばあちゃんは伊達市役所に電話をしました。戸籍の附票とう本の見方が分からないところがあるからです。でも市役所の人は、戸籍の附票とう本を送ってくれるけれど、どうやって見るかは教えられないと言いました。おばあちゃんは困りました。市役所の人が、「一番下に書いてある住所がありますね。そこに、今回と同じように問い合わせるといいですよ。」と教えてくれました。

次は夕張市です。私がいつもスキーに行くところです。

同じ手続きをして、取りよせた戸籍の附票とう本には、びっくりすることが書いてありました。おばあちゃんには三人の兄弟姉妹がいました。

一人っ子だと言っていたおばあちゃんは、なんと、四人兄弟の一番上のお姉さんだったのです。私には弟がいて、いつもけんかをするのだけれど、やっぱり離れるとさみしいです。弟とはなれて暮らすなんて絶対にいやです。

おばあちゃんの本当のお母さんは八十八歳。もしかしたら亡くなっているかもしれないとおばあちゃんは思っていました。でも、兄弟姉妹がいました。その人たちに会えたらいいな。

7、二十五年前の千歳空港で

一度見つかったのに、どうしてまた居なくなったのかを聞きました。実は本当のお母さんは、おばあちゃんに会いにこようとしたそうです。

本州に住んでいた本当のお母さんは飛行機で千歳空港まで来ました。おばあちゃんは会う前にシンさんのお墓参りをしてほしい、とお願いしました。でも本当のお母さんは

「私はシンさんに絶対に来るなと言われました。だからお墓参りには行けません。」

と電話で言いました。おばあちゃんは悲しくなりました。

自分が今幸せなのはシンさんのおかげだからです。

「シンさんに手を合わせてくれないのなら私はあなたに会うことが出来ません。」

そう言って会いませんでした。

私の住む町から千歳空港まではたったの三十分です。すぐそこにいるのに、会わないことになりました。

その後、本当のお母さんからは毎年干芋が送られてきました。

「干芋が届かなくなったら、私に何かがあったと思ってください。」

と言われたそうです。

そしてその干芋も十年くらいで届かなくなります。おばあちゃんも「どうして届かなくなったのか？」の理由を聞かなかったそうです。

私はおばあちゃんに「どうして会わなかったの？会いたくなかったの？」と聞いてみました。

「どうしてだろうね。何か会えなかったんだよ。」と言いました。

会いたい人に会いたいと言えない気持ちは私も少し分かります。私はお父さんが大好きです。でもりこんしたときは、やっぱり母の前で「お父さんと次はいつ会えるの？」とは聞きづらかったです。お父さんと会いたいと言うと、母が悲しいかなと思うからです。言っちゃいけないのかなと思いました。本当の気持ちが言えないのは誰かのことを大切にしたいからなのかもしれません。

8、札幌白石区、神奈川県川崎市、兵庫県加古川市、茨城県

おばあちゃんはその後、いろんなところに戸籍の附票とう本をもらうために手紙を出します。

札幌市白石区、神奈川県川崎市、兵庫県加古川市、そして茨城県のあるところで終わりになりました。

本当のお母さんの名前には「×」がついていませんでした。八十八才の本当のお母さんは生きていました。

本当のお母さんがいるかもしれない住所が分かりました。手紙を書くことにしました。「ゆみちゃんも手伝っ

て」と言うので、私も手紙を一緒に考えました。
「私は〇〇さんに大変お世話になったものです。〇〇さんと連絡を取りたいと思っています。」
その手紙を八月十日に出しました。私とおばあちゃんで「返事が来ますように。」とお願いをしながらポストの中に入れました。本当のお母さんを探すために出した七番目の手紙です。

8、お盆、約束、お墓参り

八月十五日、私たちはシンさんのお墓参りに行きました。お墓は歩いてもいける場所にあります。草をぬいて、お墓をきれいに洗って、そこでお菓子を食べます。おばあちゃんと母がシンさんに手を合わせてお経をあげました。
「〇〇さん（本当のお母さん）が見つかりました。どうぞ許してくださいね。」と言いました。おばあちゃんも母も泣いていました。

9、本当のお母さんの娘さんから電話

八月十六日、本当のお母さんの娘さんから電話がありました。そこで分かったことは、本当のお母さんは、ちほう症で子どもたちである自分たちのことも分からないということ、茨城県の老人ホームで暮らしていること、コロナで、なかなか会えない状況であることでした。おばあちゃんは、
「どうしても、一目会いたいのです。最後のチャンスだと思っています。」
と伝えました。娘さんは「分かりました。」と言って、すぐに老人ホームに連絡をして会えるかどうか聞いてくれました。コロナなのでガラス越しになるけれど、会えることになりました。母がすぐに飛行機を取りました。茨城空港行きは一日に一本でした。レンタカーを借りました。ホテルを取りました。神戸からおばさんも来ることになりました。
たった一日ですべて決まりました。おばあちゃんが、「シンさんが許してくれたのかな。」と言いました。

10、茨城県へ

九月十五日、茨城県に行きました。本当のお母さんの娘さんと待ち合わせをしました。本当のお母さんの娘さん二人が来ました。私と弟は車の中で待っていました。それから、老人ホームに行きました。「余計なことを言わないように。」と何度も言われてしまいました。
私と弟はおばさんと一緒に少し離れたところで待っていました。玄関からおばあさんがホームの人と手をつないで、出て来ました。本当は、ガラス越しにしか会えないはずでした。けれど、ホームの人が短い時間だけいいですよと会わせてくれました。おばあちゃんは本当のお母さんの手をにぎって泣きました。本当のお母さんは、「私は何をしたらいいですか？」と言いました。娘さんが「お母さんは、またあのお兄さんと一緒に部屋に入ってくださいね。」と言いました。最後におばあちゃんと本当のお母さんと娘さん二人の四人で写真をとりました。
その後、みんなでうどん屋さんに行きました。うどん屋さんでヤモリを見ました。母が、「ヤモリはとてもえんぎがいいんだよ。よかったね。」と言いました。初めて見ました。そのあと、おばあちゃんは、みんなに本当のことを話しました。娘さん二人はとてもおどろいて、もう一人の兄弟を呼びました。いろいろ話して、「また来年会いましょう。」と言って、うどん屋さんを出ました。
帰りの車の中で、おばあちゃんも母もおばさんも「いい人たちでよかったね。」と言いました。私もうれしくなりました。

11、私の血、母の血、おばあちゃんの血、本当のお母さんの血、そしてシンさんの血

今年私は、『魔女の宅急便』を読んで、読書感想文を書きました。おばあちゃんが小学生だった母にプレゼントした本と同じ本を私も読みました。
その中でこんなせりふがあります。
「あたしが飛べるのは、あたしが魔女だから。つまり、

ここを流れている血が違うんです。」

私の中には母の血が流れていて、母の中にはおばあちゃんの血が流れています。おばあちゃんの中には本当のお母さんの血が流れています。シンさんには自分の血を受けついだ子どもがいません。本当のお母さんじゃありません。でも、本当にそうなのかな？

12、本当はいっぱいある。

私がこの作文を書くときに、「本当のお母さん」って書くことをおばあちゃんはとてもいやがりました。

「本当のお母さんはシンさんなんだよ。」

と言いました。そのとき、母が、

「本当っていっぱいあるんじゃないかな。」

と言いました。血のつながっている本当のお母さん。血のつながっていない、育ての親のシンさんも、本当のお母さん。本当のお母さんとおばあちゃんは、本当の親子だけれど、シンさんとおばあちゃんも本当の親子なのです。

本当はいっぱいあるのです！

「来年もまた本当のお母さんに会いに行こうね。」と母が言いました。おばあちゃんもとても楽しみにしています。私もとても楽しみにしています。たくさんお土産を持っていこうと思います。

本当がいっぱいあってもいいことがとてもうれしいです。みんな幸せでとてもうれしいです。

小学生の部

佳作

ひいおばあちゃんの戦争体けん

暁星小学校　三年
齋藤　宣人

ぼくのひいおばあちゃんは今年で九十三才だ。今は、北九州市にあるろう人ホームに一人で住んでいる。ぼくは、かな川けんに住んでいる。だから、めったに会えない。さい後に会ったのは、ようち園のころだ。新がたコロナウイルスの流行でひいおばあちゃんは、ほとんどろう人ホームを出られなくなってしまった。春には、お花見にも行けなかったそうだ。そこで、ぼくのおばあちゃん（ひいおばあちゃんのむすめ）が、アイパッドを買って、ひいおばあちゃんに送った。それから、ぼくは、ひいおばあちゃんといつでもオンラインで会えるようになった。

今年の夏休み、せん時中の人々のくらしについて調べるという宿題が出た。ぼくは、せんそう体けん者のひいおばあちゃんに話を聞いてみたいと思った。そこでぼくは、ひいおばあちゃんに、ビデオ通話でインタビューをした。さいしょは、昔のつらい出来事を思い出させてしまうと思って、ひかえ目にたずねてみた。すると、ひいおばあちゃんも、わかい人たちに話をつたえておきたかった、と言って、よろこんでぼくのインタビューを受けてくれた。ぼくはほっとして、インタビューをはじめた。

せん時中、ひいおばあちゃんは女学校の生とだった。さいしょは、週に一回学校に通えていたけれど、せんそうがはげしくなるにつれて、学校に通えなくなった。そして、ひいおばあちゃんは、学と動員で、さまざまな場

所ではたらいたそうだ。同級生といっしょに、てっぽうを打つれん習や、上りくしてきたてきを竹やりでつくれん習をしたり、軍馬のエサにするために、山に草かりに行って、かった草を運動場にほしたりしたそうだ。それから、たて物そ開といって、火さいが広がらないようにするために、家に太いつなをまきつけて、みんなで家を引きたおしたりもした。小倉のぞうへいしょうというところで作られたてっぽうのたまを運ぶ手つだいをしたり、ひ行きをみがいたりした。女学生は、兵たいさんたちのズボンをぬったり、空しゅうけいほうが鳴ったらきゅうごのために、かならずぼう空ごうにかけつけなければならなかったそうだ。

インタビューのと中で、ひいおばあちゃんは、一まいの新聞記事をもってきてくれた。記事のタイトルは「女高生も兵力」と書かれていて、十里行軍でつかれた顔をして歩く女学生のすがたがあった。記事にはこう書かれていた。「太平洋戦争末期、本土決戦に備え、女高生も兵力に組み込まれ、軍事教練が日常化した。写真は昭和19年10月、モンペにゲートルを巻き、腰に剣、肩に銃、鉢巻き姿もりりしく、市中行進する八幡高等女学校生徒。」ひいおばあちゃんによると、十里行軍というのは、一里はやく四キロメートルなので、四十キロメートルの道のりを一日かけて歩くことだそうだ。ひいおばあちゃんはその時のことを今でもよくおぼえていて、歩いている間はやすむこともゆるされなかったので、帰ってきたらごはんを食べる元気もなく、たおれこんでしまったそうだ。

そして、せんそうはどんどんはげしくなっていった。ついに八幡大空しゅうの日がやってきた。昭和二十年八月八日、午前十一時ごろ、空しゅうけいほうが鳴り、四十五万発をこえるしょういだんが落とされた。当時ひいおばあちゃんは八幡せいてつ所のせい図室ではたらいていた。一年半はたらいていて、さいしょは十四、五人いたけれど、男の人は全員兵たいに行ってしまって、数人の女の人しかいなかった。アメリカ軍の「B29」から八幡せいてつ所めがけてしょういだんが落とされた。ひいおばあちゃんはぼうさい頭きんときゅうじょぶくろを取りに行って少しおくれてしまったが、二才年上のていしんたいの人が待っていてくれてその人と手をつないで走ってにげた。するとと中で急に手がはなれてしまった。ひいおばあちゃんはただ手がはなれて後ろから来ると思ったがその人は来なかった。しばらくして、またせい図室にもどってきたら、そこは血の海だった。そこで手をつないでいた人がいないことに気づきほかの人に聞いてみたら、その人はしょういだんがかたからおなかを通ってなくなっていたそうだ。その日の帰り道、電車は真っ黒にこげ、馬はたおれてしんでいたので、ひいおばあちゃんは三キロの道のりを歩いて帰った。家で待っていたひいおばあちゃんのお母さんとお父さんは、一言、

「ぶじでよかったね」

と、言ったそうだ。この空しゅうで、せいてつ所から少しはなれた小伊藤山にあったぼう空ごうには、二百人い上の人がかくれていたが、入り口が火事になり中がむしやきじょうたいになり全員なくなったそうだ。

八幡大空しゅうの次の日、八月九日には、長さきに原子ばくだんが落とされた。本当は北九州に落とされるはずだったが、八幡大空しゅうのけむりによってしかいが悪かったためひ行きは北九州を通かして長さきに向かったのだ。ひいおばあちゃんは、今でも八月九日には自分たちの事のように長さきの人々のためにいのっている。

ぼくは、ひいおばあちゃんのせん時中の話を聞いて、ぼくは毎日学校へ行って勉強したりスポーツをしたりあそんだりして楽しくくらせているのに、ひいおばあちゃんは学校にも行けず毎日はたらいてつらくいそがしい毎日を送っていたと思う。もし八幡大空しゅうの時に手をつないでいた人とひいおばあちゃんが反対がわで手をつないでいたらひいおばあちゃんがしんでいたかもしれないしぼくは生まれていないのでひいおばあちゃんが生きていてくれたことに感しゃしている。この空しゅうい外にも、ひいおばあちゃんが汽車にのっていた時、上からてい空ひ行でアメリカ軍のひ行きがきじゅうそうしゃで打ってきたのでひいおばあちゃんは汽車からとびおり、

草むらにかくれてたすかった事もあったそうだ。その時は、ひ行きからじゅうを打って来るアメリカ兵の顔まで見えるほど近くから打ってきたそうだ。こんなけいけんをたくさんして生きのこったひいおばあちゃんは、すごく幸運だと思うし、こんなざんこくなせんそうは二度とくり返してはいけないと思う。さい後にひいおばあちゃんは、さい近本やえい画で戦争をかっこよくえがいている物もあるが、戦争はけっしてかっこいいものではないぜったいにくり返してはいけないと言っていた。ぼくはひいおばあちゃんの思いをぼくの子どもやまごにもつたえていきたい。

小学生の部
選考委員特別賞
あさのあつこ賞

ぬっちまった

北九州市立小石小学校　五年
青木　龍之介

やっちまった・・・。切っちまった。

「りゅうのすけーーこれ切って。」と弟が持ってきたのはペットボトルとカッターだった。弟が切ってほしいと言った所はペットボトルの底の部分で固かった。じみちに切っていたけど、めんどくさくなった。

「やーーーーーー」いきおいよく切ったがペットボトルは切れなかった。だけどいっしゅんちゅうしゃをさされたみたいないたみがあった。そして手を見ると、おや指とひとさし指のあいだにしんげきの巨人みたいな物が見えた。すぐにそこをおさえて「ヤバイ、しんげきの巨人が見えた。」とみんなに言った。だれも信じてくれなかった。母ちゃんに見せると「これだめや、病院行かな。」と言ってぼくの手首をぎゅっとにぎった。ぼくはこう思った。「母ちゃんのテンションがおかしい。」でもそんなことを考えているひまはない。ぼくは、きゅうきゅう病院につれて行かれた。

病院に着くと「なにを切っていたの?。」と言われた。すると母ちゃんが「ペットボトルをたてに切っていたみたいです。」と言った。

もう10時だ。

かんごしさんがきた。きずを見て言った。「いたかったね。なにを切っていたの?。」母ちゃんが答えた。「ペットボトルをカッターで切ってたみたいです。」二人で笑った。

「青木さん4番しんさつ室へどうぞ。」とよばれたのでしんさつ室に入ると女の先生がいた。きずを見て言った。「なにを切っていたの?。」またか・・・。母ちゃんも笑っていた。「ペットボトルをカッターで切っていたみたいです。」先生はタブレットでしんげきの巨人の写真をとっていた。別の先生にそうだんするといっていなくなった。

11時・・・。

かんごしさんが「形成外科の先生をよんでいるからおまちください。」と言ってまたされると思ったらすぐに来た。別室につれていかれた。次は男の先生がいて、きず口を見て、「お母さん、ぬいましょう。お母さんは、外でまっていてください。」と言った。先生はぼくに「なにを切っていたの?。」ときいたので「弟にペットボトルをカッターで切ってとたのまれたから切っていると手を切った。」とくわしく答えた。

しゅじゅつが始まった。まずますいをかけてもらった。けっこういたかった。しゅじゅつは数分で終った。ぬわれちまった。

帰りはタクシー。運転が上手じゃなくて、よった。手を切ったことよりもきつかった。運転手さんに「病院に行ったんですか?。」と聞かれたので「手をぬいました。」とこたえた。運転手さんは「よくがんばったね。」となぞにコンビニのエビマヨののりまきをくれた。ぼくも母ちゃんも苦笑いだった。

12時半・・・。

ようやく家に着いてひと安心。やっとねれると思った。母ちゃんが「手を上げてねろ。」といったけどむししてねた。

次の日、ガーゼのつけかえに病院に行った。そこではじめてぬったところを見た。けっこうグロテスクだった。そして、みんなよりおくれて学校の教室にはいるとみんながしんぱいしてくれた。ちょっとうれしかった。

一週間たってばっしの日がきた。ドキドキしていた。でも、もうみんなにしんぱいされないと思うと少しさびしかった。

今もむりに手をひろげると少しいたい。それよりもぼくは、カッターきょうふしょうになった。

小学生の部
選考委員特別賞
最相葉月賞

DER WÜRFEL（デア ヴュルフェル）

Jakob-Fugger-Gymnasium（ヤコブ・フッガー・ギムナジウム） 六年
チャケ・レオン

前置き

『僕の母はカエルグッズを集めている。先日、コロナ禍で習慣になっている両親との散歩に出かけた時のことだ。母がいきなり走り出した。メガネ屋さんのウインドウに飾られているたくさんのカエルのデコレーションの中から一際目立つカエルのメガネ置きを指差して「これ欲しい！」と言った。母は年齢のわりに目がすごく良いのでメガネをかけていないのにだ。案の定父に「メガネ屋に入ってカエルを買うの？買っても置くメガネ、持ってないでしょ！」と突っ込まれ却下された。

いつもこんな調子で、何か欲しいものがあってその商品にカエルのデザインがあれば必ずそれを買う。父と結婚し僕が生まれるまでは、家中にカエルグッズがあったらしい。僕が生まれてさすがに小さい物は口に入れる恐れがあるし、ガラス製の物は踏んでケガをするといけないので父からカエル禁止令を出されてしまった。母は父の言う通りダンボール箱にしまい、地下の倉庫に置いた。

だけど、僕が大きくなってきたからなのかそのカエル達が最近また増えつつある。』

「起きなさい！もう時間よ。遅刻する！」

と言われてベッドから出る。そして一番に見るのがカエルの時計。中心でカエルが走るかっこうをしていて、手が短針と長針になっている。（あっヤバイ、遅れる。）とトイレに向かう。そこにも二匹の学生のカエルが肩からカバンをかけて立っている。そして朝食をとるために急いでリビングに向かうと、そこにはドイツの有名なシュタイフ社製の［カエルの王様］がモデルとなったクマのお姫様と王冠をつけたカエルがいる。

毎朝このカエル達に会う。そしてこのかわいいカエル達からなんとも言えない視線のようなものを感じ僕はシャキッ！となる。

僕は三歳になる頃にはすでに読み書きができた。両親と電車で出かけた時、止まった駅名を指差して言うと周りの人にビックリされ「君、すごいね！本当に読めるの？」なんて言われるのはしょっちゅうだった。また日本にいるおさむおじさんの家族がドイツに遊びにきた時、おみやげに［ポケット国旗図鑑カード八十一カ国］をくれたけど、一週間後に帰る時にはもう全部覚えてしまっていて、「もっと違うカードちょうだい」と言ったらビックリされた事もあった。幼稚園では僕と知育ゲームをしてくれる子がいなくなった。

両親は周りの子と違う僕の事を注意深く見守り続けてくれていた。そんな時、主治医のヘネベルガー先生の紹介で大きな病院で知能検査を受けることになった。カウフマンという知能検査でドイツ語で行われた。結果は語学を必要としない分野の知能指数が一四〇だったのに対して語学を必要とする分野の知能指数が八十六しかなかった。二〇一九年にホーホベガープト［ギフテッド］と正式に認定を受けたが、当時の僕は父と話す時と幼稚園以外は日本語を話していたし、読む本は全て日本語だったので仕方のない結果だったと思う。

結果だけを見ると僕はホーホベガープトではないという事になるけれど、僕を担当したシンドラー先生は母に「今はまだ判断するべきではないと考えます。もう少し待って、ドイツ語の環境に慣れたらもう一度検査しましょう。」と言った。僕を簡単に診断しなかった先生には感謝している。

そういう事もあって両親は僕には普通の学校の教育よりも、自分で何を学びたいのかを選択し道具を使って集

中して学ぶことができるモンテソーリ教育が向いていると判断し、モンテソーリ小学校に入学させてくれた。

この学校は一年生から三年生まで同じクラスになる。だから自分のテンポで好きなだけ勉強できる。毎日学校が楽しくてしょうがなかった。

一年生の終わりに先生が両親に二つ飛び級する事をすすめたが僕に内緒でそれを断っていた。二年生の終わりにまた先生が飛び級をすすめた。両親はまた断ろうとしていたが、先生が僕が学習できる教材がなくて困っている事、そして僕自身が飛び級をしたいとお願いした事もあって一つだけ飛び級することになった。

ドイツでは四年生の学校の成績によって五年生からの進路が分けられる。決められた成績の評価を持っていて、将来大学に進みたいと思うならギムナジウムに進学する子がほとんどだ。どういう事かというと、たとえギムナジウム以外の学校に進学したとしても、今は昔と違って途中で大学に行きたいと思えば進路変更をする事は可能だが、学習内容のレベルが大きく違うので非常に苦労する事になるためだ。

僕の通っていたモンテソーリ小学校は私立の学校で成績表がなかった。そのため僕がギムナジウムに通うためには入学試験に合格しなければならない。その試験の準備をするための時間が必要だった。

僕は学校で［テスト］というものを受けたことがなかった。テストのあのまわりくどい質問に答えるという独特な形式になかなかなじめなかった。これまで自由に学習してきた僕にはテストがものすごくストレスだった。

四年生になってしばらくした頃、コロナウイルスの感染者が爆発的に増えたため、街はロックダウンになり学校は休校になった。そのため四年生の学習が不十分になり、受験対策クラスの授業も出来なくなった。両親は困っていたけれど、僕はストレスがなくなると思い嬉しかった。

僕は同じ事を繰り返す学習が大嫌いだ。読めばわかる事だから、ノートに書いたりするのも時間のムダで手が痛いだけだと思っている。書く必要がある時は鉛筆を使わずにペンを使う。しかしながら、このテストは一度しかなく、失敗したらギムナジウムに進学できない。しぶしぶ前年の試験問題を頼りに両親と勉強し、試験に合格した。

ギムナジウムではモンテソーリの時と同じようにはいかなかった。与えられた課題を決められた時間で終える。三週間先までの学習スケジュールを手帳に書き込み自分で管理する。課題の提出期限に間に合わない事は許されない。一つでも遅れるとペナルティーがある。このペナルティーがたまると親が呼び出され、改善がないと判断されれば退学となる。やりたい事を勉強してきた僕にはギムナジウムのスタイルがきつかった。それに僕の嫌いなテストがある。お尻に火が付いていた。

忘れもしない。初めてのテストは数学だった。定規を使ってキレイに線を決められた通りに引きグラフを書くという簡単なサービス問題。僕はただやりたくなかった。適当に手で書いてしまった。答えは合っていたけれど、先生からの注意書きと［三］という最悪な成績をもらってしまった。

【ドイツの成績は上は一から下は六までである。細かく言えば数字には＋と－もあるが、主要科目で一つでも六をもらえば留年対象になり、くりかえすとギムナジウムから進路を変更させられるという厳しいルールがある】

母はこの結果にびっくりして「えっ、どういう事？難しくてわからなかったの？」と聞いてきたので「違う。やりたくなかったんだ。定規を使いたくなかった。でも答えは合っているんだよ。」とムッとしながら答えた。

僕の言葉に母はショックを受けたようで、

「えっ、そっち？ママはあなたのわからないところを一緒に乗りこえるために勉強するんじゃなくてテストとは何か、何のためにテストがあるのかをまた一から説明しなきゃいけないのね？」と軽いため息をついた。

しばらく経ち、やっとギムナジウムにもテストにも慣れて自信が付いた事が返って僕を悪くした。

【井の中の蛙大海を知らず】という諺がある

学校での授業が楽しくて大好きになった。あれだけ嫌っていたテストも何時でもどうぞと思えるようになった。

クラスに僕と同じように飛び級をしてきた男の子が一人いる。僕はその子と仲良くなれるかなと思っていたのだけれど、何故か僕だけ目の敵にされる。初めての数学のテスト以外は成績で負けた事がないからだと思う。

僕が自分の成績を自慢する訳ではなく、先生が〔一〕の成績を取った人数を発表するのでクラス中で話題になりバレてしまうのだ。だから僕は自分が一番だと知ることになる。

最初の頃は冷たくされたり嫌味を言われたりした事に落ち込んだりしたけれど、次第に僕の方が上で一番だと思う気持ちの方が大きくなっていった。絶対に負けない。一番は僕だ。そして成績は〔一〕以外欲しくないと。

僕には二人いとこのお姉ちゃんがいる。いろはちゃんは、大阪で一番と言われる女子高に通っている。わかなちゃんは中学生で入学時から学年で一番という成績をキープしている。月に一度スカイプで話をする時、わかなちゃんは僕に成績表を見せてくれた。その成績は〔オール五のオールA〕というマンガに出てくるような成績だった。それでも僕は素直に頑張ったんだね、すごいねと言えず、

「僕なんか飛び級してギムナジウムに行って一番なんだ。僕の方が上だよ。それに僕の方がIQも高いし。」と言ってしまった。すかさず母が「しょうもない。何でそうなるん？いっつもしかめっ面やし。いろは、わかなはしっかり勉強もクラブもスポーツも両立できているから将来の選択の自由がある。そして何より今を楽しんでるやん。いつも笑顔でいる事。それが大事なんであって一番というのは結果に過ぎない事を二人はわかってんねん。」と言った。母が本当に怒った時は関西弁になる事を知っている。それでもまだ僕は母を無視するようにして自分の部屋にこもった。

しばらくして母から「これを読んで欲しいんだけど。」と本を渡された。それは【子どもノンフィクション文学賞受賞作品集】で黄色いポストイットが挟んであった。めくってみると、内田博仁君が書いた「信じて！重度障がい者の学ぶ力」という作品だった。

高知能なのに身体が上手く動かせないので知能が低いと簡単に判断されてしまう。知的障害が重く話せない＝物事をほとんど理解していないとは限らない。僕のようにちゃんと理解できる子もいる。学習の機会を奪わないで欲しいと訴えている。

僕はこの作品を読んでハッとした。

博仁君は【僕が2歳の時のことだ。僕は何とかして母に僕は何も分かっていない知的障害ではないと伝えたくて機会を伺っていた（2歳の子がそんなことを考えるかって？でも本当なのだから僕は事実として伝える）】と言っている。

僕は彼の言葉を信じる。なぜなら僕にも自分の意思で口に入れられるおしゃぶりを吐き出し、母におしゃぶりを使うことを諦めさせたという同じような経験があるからだ。そして僕にも問題がある。僕は会話のキャッチボールが上手く出来ない。おしゃべりではあるけれど、聞かれた事にパッとスマートに答えるという事が苦手だ。会話だけだと相手は僕のドイツ語能力（どの言語でも同じだと思う）が非常に低いと思うのだ。

あるギムナジウムの先生と数学の試験とドイツ語の面接をした時の事だ。二十分程話をしたのだけれど、終わって両親に「レオン君のドイツ語はあまり良くないですね。成績は三から四といったところです。でも、数学はとても出来るようですので何とかやっていけるでしょう。」と言った。だけど、ギムナジウムが始まってみれば僕の総合成績はドイツ語もその他も全て〔一〕だ。母は僕の日本語について、ずっと前から読み書きの力と話す力が違いすぎる事に違和感を持っていたらしい。どうして会話だけが上手くいかないのか今もわからないし、一生このままかもしれない。

僕の場合はたとえ初対面でドイツ語が出来ないと思われても成績や作文などで違うと証明することが難しくはない。だけど、【頭では分かっているけど体が動かない】

と言っている通り博仁君にはそれが非常に難しい。

彼も僕と同じホーホベガープトなんだと思う。同じホーホベガープトと言ってもそれぞれ全く違う。なんの問題もなくただただ賢く、いくつも飛び級して大学に入るような子もまれにいる。僕のように学習能力と性格、生活面のバランスが違い過ぎて問題を抱える子もいる。さらには2Eという発達障害をあわせ持つ子もいる。知能指数が高いという共通点はあるけれど、みんな違うのだ。博仁君は【どうして?知りたい】という気持ちが非常に強く、知識を吸収するスピードが速いんだと思う。色んな事を学びたいのに出来ないと決めつけられその機会を奪われてきた。

博仁君もお母さんもどれほど悔しく、もどかしく感じていただろう。

それでも今は彼の知性を信じてくれる柴田教授とともに前に進んでいる。

そんな彼が今の僕を見たらどう思うだろう。僕も純粋にどうしてなんだろうとか知りたいとかいう気持ちだったじゃないかと恥ずかしくなった。

僕は以前は科学者になって人間のためになる何かを探したいと思っていたけれど、今は地球を守りたいという思いの方が強くなっている。人間は地球のために何をするべきなのか、何を改善しなければならないのかを考えている。その中の一つとして、家畜動物たちがおかれているカオスな環境について関心がある。

ある日授業で先生が「牛が出すゲップには地球温暖化を進めるメタンが多く含まれているので、牛肉を食べるのは控えましょう。」と言った。

はんすう動物は胃が四つあるため、植物の消化をゆっくり何度もくり返す過程でメタンガスを出す。

夕食の時両親にこの話をし、「僕は今日から牛肉を食べたくないからもう二度と買わないでね。」と言った。すると父が「おいおい、先生に聞いた事だからといって全てを肯定するのか?自分で調べもしないなんて信じられないな。そんな単純な話じゃないんだよ。」と言った。僕は食後にネットで調べてみた。

確かに

【牛が出すメタンは二酸化炭素の五十倍以上の温室効果を持っている。そして空気中のメタンガスの二十から五十%がはんすう動物のゲップである。このためゲップを出しにくくする消化の良い餌の開発が進んでいる】とある。(あれ?間違った事言ってないよね。父は何が言いたかったのだろう。)と思った。

そばで見ていた母が、「これじゃあ牛さんが悪者みたいになっちゃうね。」と言った。

・・・・・・!!

そうか、この牛たちのほとんどは家畜として育てられているんだと気が付いた。しかも人工授精でどんどん生まされている。それなのに余ったからといってまだ食べられるのに捨てられていたりする。

ゲップのでない餌を開発するのも良いけれどムダなゴミを減らす方法や、ムリな人工授精をしなくてもいいようにする方法を考える事の方が大事だと考える人もいるだろう。

もっと言うなら人間の数が多すぎるからであって、人間が食物連鎖のピラミッドのバランスを崩している上に自然界をコントロールしようとしているのだ。牛たちは人間のエゴによる犠牲者とも言えるじゃないか。

父の言いたかった事がわかった気がした。

物事には色んな見方があって、複雑な事情がからまっている。一つの方向から見るだけでは不十分なのだ。つまりヴュルフェル(サイコロ)のようなもので、しっかり見ないと一の裏にある六に気が付かないという事になりかねない。

僕はやっと気付いた。いつの間にか蛙になって王冠をかぶり井の中にいた。自分が一番だ!一番でいたいと思っていた世界は小さかったのだ。そして間違っていた。一番でいるという事が目的になってはいけないのだ。重要なのは知りたい、なぜ?という気持ちを大切にし、自分でしっかり考え、広い視野と物事を見極められる目を持ち、正しく行動できるかどうかなのだという事に。

諺には続きがあるらしい。

【井の中の蛙大海を知らず。されど空の深さを知る】

だけど僕は

【井の中の蛙大海を知らず。されど空の深さを知る。そして天高く飛び出し潮風を頼りに海へ向かう】

とさらに付け足したいと思う。

僕はそんなかっこいいカエルになりたい。

母はどうしてカエルを集めているのだろう。きっと深い意味なんてないだろうとは思うけれど、まさかまさかで深い意味があるのだろうか。王冠をつけたカエルを見ながらいつか聞いてみようと思った。

それから僕を目の敵にしていたクラスメイトについて。「僕は君と友達になりたいと思っているよ。どうかな。」と声をかけた。ちょっととまどっている感じだったけれど、「うん。」と言った。一歩前進だ。

最後に僕に考えを改めるきっかけをくれた内田博仁君、ありがとう。

終わり

〈引用〉

第十二回子どもノンフィクション文学賞受賞作品集

「信じて！重度障がい者の学ぶ力」　内田　博仁君

キッズネット

牛のゲップが地球温暖化を進めるって本当？

小学生の部

選考委員特別賞

リリー・フランキー賞

「食べることは生きること」給食から学んだ食の大切さ

鳥取市立鹿野学園　六年

田村　萌梨

私は、身体が小さくて食が細いです。身体が大きい子も小さい子も同じ量の給食を同じ時間に食べます。時間内に食べきることが出来ないので給食の時間は、少し緊張します。

ある時、お姉ちゃんと計画して、「朝ご飯食べていかなければ、給食をぜんぶ食べられるよね」と言って食べないで学校に行ったこともありました。でも、この計画はすぐにお母さんに注意されました。「朝ご飯はきちんと食べましょう」と。

学校でも食育の時間があります。給食委員になってから、放送室で「今日のこん立」や「給食センターの方からのメッセージ」を放送しました。そして、食への興味がわいてきました。なぜなら私たちの学校は、栄養士さんや給食を作る方の想いが強いと感じたからです。

そして、六年生になり私たちは中学部の校舎へ移動しました。身体が成長しているせいもありますが、なぜか今までより給食が美味しいと思えるようになりました。私たちの学校は、ホールで学校中の生徒が集まって給食を食べます。みんなで食べる給食は本当においしいです。男の先生が、鹿野学園に転勤してきたら、「美味しくてお腹が出てきちゃった」と言っていました。

私たちの学校は、鹿野城跡にあり、お城の建物の中に給食を食べるホールがあります。窓から見える風景は、お堀や昔ながらの城下町のふん囲気を残した街並、日本

海、そして春はきれいなさくらが見渡せます。窓はステンドグラスになっています。また、全校生徒と先生がテーブルを囲んで食べることができます。給食中の放送も放送室から聞こえてくるのではなくて、その場でみんなの顔をみながら生放送をします。そして一階は給食センターになっていて、私たちの学校だけの給食を作ってくれています。鳥取の小さな町の小さな学校だけど、すてきがたくさんある自まんの学校です。

コロナかで、同じホールで食事ができなくなり、教室で前を向いたまま何も話さずに食事をするようになりました。でも、給食センターの方はコロナかになっても私たちに健康で美味しい食事を作ってくれます。私たちに食の大切さ、食べることの楽しさ、健康で過ごすことの大切さを伝えてくれます。そんな思いを大切にしたいなと思って、栄養士の先生と給食センターの方たちにお手紙を書きました。そして、その想いを私は、伝えたいと思って調べることにしました。

給食は、明治二十二年に山形県ではじまったそうです。その時は、生活の苦しい子供たちのためにおにぎり、焼き魚、つけものをふるまったそうですが、戦争で一時中断となって給食を出すことができなくなったそうです。

この夏、近所にすむ八十五歳のおばあさんのところへ戦争時代の話を聞きに行きました。夏休みは、戦争に関する本をたくさん読みました。わたしのおばあちゃんは、戦後生まれなので戦争の話は聞いたことがありません。今回、どんなものを食べていたのか気になったので聞いてみました。おばあさんは、遠い昔を思い出すように話をしてくれました。戦争中、食べ物がなくて学校のお昼ご飯の時は、お弁当を持ってくる子もいれば、何もなくて食べることができない子もいたそうです。お弁当の中身も、さつまいもだったそうです。学校の校庭は、さつまいも畑になっていて、私と同じ年のころは、毎日、学校の畑でさつまいもつくりをしていたと聞きました。大変な時代だったなと思います。

鳥取市では、昭和二十四年に学校給食がはじまりました。休み時間に、先生が子供のころの思い出のメニューを聞きました。くじらの肉がでたと聞いて、びっくりしました。水族館でくじらの模型をみたことがあります。でも、くじらを食べたと聞いたのははじめてでした。何日かしたあと、近くのスーパーで「くじらの肉を見たよ」とお母さんが言いました。私の家族は、まだ誰もくじらの肉を食べたことがありません。給食の思い出は、たくさんあって話を聞いていて楽しいなと思いました。

私たちの学校では、栄養士の先生から「好き嫌いをせず食べることの大切さ」や「ごみを減らすために自分たちにできること」を話し合う授業があります。「朝ご飯を食べるとどんないいことがあるのか」という質問がありました。頭がすっきりして一日を元気よく過ごすことが出来るそうです。夜遅くまで起きている休日だと朝ご飯があまり食べられません。でも、早寝早起きをすると、自然とお腹がすきます。きそく正しい生活が必要だということが分かりました。

また、食育の授業の中で、地産地消に力を入れていることに興味を持ちました。「地産地消」というのは、地域で生産されたものを地域で消費しようとする活動です。地域の身近な食材を通して食材の旬や産地について知ったり、郷土食や行事食を知ったりするための大事なことだと教えてもらいました。

そして、私たちの学校では、「鹿野おもしろ広場」という直売所から仕入れていることを栄養士の先生から聞きました。おもしろ広場は、町の温泉施設のとなりにあるので私も時々行きます。

地産地消のメリットは、とにかく新鮮。身近な場所で作られたものなので安心感があるところだと思います。新聞記事によると、食材別では、白ネギ、とびうお、牛肉などは一〇〇パーセント県内産だそうです。私たちの学校がある鹿野町は白ネギ農家がたくさんあります。白ネギは、日に当たらないように、成長するたびに土をかぶせて白い部分がながくなるように育てるそうです。とても大変な作業だと思います。白ネギはとても甘くておいしいので野菜の中で一番好きです。

給食では、「しょうが」が良くでます。しょうがは、

私たちの学校と深い関わりがありました。今から四百三十年以上も前に鹿野城主・亀井これのり公が朱印船貿易によって東南アジアからしょうがを持ち帰ったそうです。私たちの学校は鹿野城の跡地にあるので、なんだかとても親近感があります。また、となり町のしょうが農園では、収穫された生姜は、「生姜穴」と呼ばれる洞くつ（防空ごうのような貯蔵庫）で保管されているそうです。一年中、適度な湿度と十五度前後の温度に保たれる真っ暗な生姜穴で、五ヶ月間熟成させると、余分な水分が抜けておいしくなるそうです。

次に、東京でも有名な鹿野地鶏ピヨは、鳥取の地鶏です。大自然で時間をかけて育てているのでお肉がぷりぷりして、とても美味しいです。鹿野地鶏ピヨご飯、鹿野地鶏ピヨのピザも給食の献立にでます。

今年は、新型コロナウイルス感染症の影響で消費が落ち込んでいる鳥取黒毛和牛が給食に出ました。黒毛和牛のコロコロステーキは一口食べると先生たちも友達もみんな笑顔になりました。また、新聞記事を見てびっくりしたのは、鹿児島牛、宮崎牛、岩手の前沢牛などのルーツは鳥取の和牛だそうです。他にも鳥取県が日本で一番最初の牛の戸籍を作ったそうです。和牛の登録というものを始めたのが鳥取県。焼肉屋さんが多いというのも納得です。

鳥取は、カレーの消費量が日本一です。もちろん給食でもカレーは人気の献立です。中でもチキンカレーは鳥取県産の鶏肉と梨ピューレ、ニンニクがたっぷり入っています。梨ピューレも鳥取で作られています。カレーには、梨ピューレを入れると美味しいので、私の家でもカレーには梨を入れています。

今年は、オリンピックがありました。コロナかでもオリンピックを感じさせてくれる献立があります。それは「海のアスリート汁」というものです。海のアスリートとは、大きな胸びれを広げて海上を飛ぶトビウオのことです。海面をジャンプすると三〇〇～四〇〇メートルの距離を飛ぶことが出来るそうです。鳥取では、トビウオのことをアゴといって、フライにして食べます。

また、鳥取市はジャマイカのホストタウンとして交流しているので、ジャマイカ料理も出ます。今年は、ジャマイカの選手のキャンプがなかったので残念でした。

中学生の先輩が修学旅行で沖縄に行くときは、私たちにも修学旅行を味わってもらうため給食で沖縄料理を作ってくれます。沖縄に行けない私たちも一緒に行っているように感じられるのでうれしいです。

今回、調べてみて、しょうゆなどの調味料も地産地消ができているのがすごいと思いました。

デザートも出ます。一番人気なのは、学校の近くにある牧場で作っているジェラート屋さんのアイスです。自分の好きな味のアイスが食べられます。

クリスマスには、手作りのケーキもあります。手作りハンバーグや手作り揚げシュウマイなど、ひとつひとつ心のこもった料理もあります。

私が一年の中でとても楽しみにしているのは、読書週間中の給食です。イギリスやデンマークの童話に関する食材を使った「人魚姫のお魚フライ」や「シンデレラシチュー」、「ピーターパンサラダ」もあります。献立の名前もかわいくてとても楽しみです。

ドライカレーは、鳥取のおいしさがつまったカレーです。「鳥取のうま味ギュウ～とドライカレー」という名前もおもしろそうだなと感じました。給食の献立表をみるのがとても楽しみです。なぜなら、名前の付け方がとてもおもしろいからです。早くその給食を食べたいなと思わせてくれます。

ドライカレーは、時々鹿肉を使います。ジビエ料理というそうです。鉄分がたくさん含まれているから名前は、「鉄腕ドライカレー」といいます。友達の家では、鹿肉やいのしし肉を食べることもあると教えてくれました。近所のおじさんが届けてくれるそうです。山の物、海の物、畑のもの、いろんなものが近所で交換されている生活は、昔から伝わっているのだと思います。私も、友達の家にいくとおじいちゃんやおばあちゃんが作ってくれたお野菜をもらったことがあります。春になるといちごがりも畑で体験させてもらいました。おじいちゃんとお

ばあちゃんが近くにいるっていいなと思いました。コロナがおさまったら、おじいちゃんやおばあちゃんに会いに行きたいです。

私たちの町では、お米をたくさん作っています。いつもは町の人が作ってくれたお米を食べていますが、七夕の季節になると、鳥取県が開発した星空舞という特別なお米も食べられます。鳥取は星がとてもきれいに見えます。お米が星のようにキラキラしているから名前がついたようです。私たちの学校の駐車場から空を見上げると、プラネタリウムのようにきれいに見えます。

春になるとコッペパンが花型になることがあります。季節によってりんごが練りこんであるアップルパン、鳥取で取れたお米をつかった米粉パンなども出ます。

有名な果物も出ます。鳥取のおいしい「大栄すいか」は、ドバイの王室にも輸出されたと聞きました。はちみつのように甘いといって人気になったようです。一玉三万円で売られたと聞いてびっくりしました。私たちの食べている鳥取県の食材が世界にも輸出されたことは、すごいと思います。

世界中で異常気象が次々と起こっていても、コロナかで世界中が大変で厳しい状況の中でも、私たちの町では安心な食材で食事ができることは、本当にすごいことだと思います。

当たり前が当たり前でない今の時代に、健康でおいしい給食を食べられることは本当に幸せで感謝しないといけないことだと思いました。

鳥取県の取り組みをニュースで知りました。鳥取県北栄町では、学校給食食材の地産地消率が令和元年度は98パーセントだったそうです。新型コロナウイルス感染症により学校がお休みになり、給食が作れなくなったので大根を切り干し大根に加工して食品ロスの削減に取り組んでいることを知りました。

今回、北栄町の取り組みを調べたことにより、「食品ロス」という名前を知りました。

「食品ロス」とは、まだ食べられるのに、捨てられてしまう食べもののことをいいます。食べ物を捨ててしまうのは、もったいないだけでなく地球環境にも悪い影響があります。ごみとして捨てられた食品は、燃やします。すると、二酸化炭素を排出することがあるそうで、環境問題にも影響してくることがわかりました。先日、新聞で環境省が食品ロス削減や地産地消にポイント制度を設けるという新聞記事を見ました。食品ロスを減らし焼却処理量を抑えるため、賞味・消費期限が近づいている食品の購入、食べ残しの持ち帰りなども対象にするそうです。

この夏、ハーバード大学の学生の方からエネルギー問題についての講座を受講しました。その中で、「国内で一番二酸化炭素をだしているのはどこでしょうか」という質問がありました。家庭からでるゴミが第四位でした。だからこの制度はいいなと思います。

二〇一七年度の農林水産省の調べによると、日本の食べ残しなどの食品ロスは、約六百十二万トンで、東京ドーム約五杯分だそうです。日本人一人当たり、お茶碗一杯分のご飯の量が毎日捨てられているそうです。

私たちの学校でも、給食センターの人たちや給食委員会の人たちを中心にして「フードロスプロジェクト」活動に取り組んでいることが分かりました。その結果、私たちの生活する学舎では残飯がほとんどないそうです。

給食センターから「家庭で始めよう身近な食育」という手紙をもらいました。私は、お母さんやお兄ちゃん、お姉ちゃんたちと一緒に料理をするのが好きです。私の得意料理は、卵焼きと餃子つくりです。また、お母さんがつかれているときはお皿を洗います。買い物も一緒に行きます。大好きな野菜も育てています。家族で食べることについて話をすることが多くなりました。

私は三年前から、鳥取大学農学部の先生に年間通して野菜の作り方を教えてもらうというあぐりスクールに参加しています。

大学の土地を無料で貸してもらって、農学部の先生から畑作りを教えてもらえます。また、季節によってイベントもあります。

四月には、梨のてき果作業をしました。梨の花が開花

するのは、通常桜の開花後二週間が過ぎたころです。実がビー玉くらいの大きさの時、一つの軸に三から五個くらいの実が付きます。キズや変形したものをのぞいて一番いい形のものを残します。そうすると、美味しい梨ができるそうです。

秋になると、梨の食べ比べをします。今年はコロナかでできなかったけれど、いろいろな梨を食べさせてもらえます。甘くてみずみずしい梨がたくさんあります。私は二十世紀梨が一番好きです。

六月になると田植えをします。大学の田んぼは、農薬あり、農薬なしなど条件を変えて育てています。それは、大学生の実習用の田んぼだそうです。私たちは、そのうちの一つの田んぼに、あぐりスクールのみんなと田植えをしました。田んぼの中はぬるっとして初めは気持ち悪かったけれど、先生たちのかけ声にあわせて植えたら、きれいに植えることができました。秋になったら黄金色になってきれいになるので楽しみが増えました。

秋から冬にかけて、稲の収穫や草木染め、木材加工でクラフト作りもします。そば打ちやピザ作りもします。農学部の学生さんたちが作ったピザがまで手作りのピザを焼きます。広場でみんなと、「熱い、熱い」といいながら食べるのはとても楽しいです。

そして、十二月にはもちつきをします。先生たちと一緒に臼と杵をつかっておもちをつきます。

作物の育て方では、畑の耕し方、植え方、どんな野菜がどのように育つか、野菜が美味しくなるコツ、肥料の与え方を教えてもらいます。大学で作っている野菜や果物、農学部の学生がどんな実験をしながら野菜や果物を作っているのかも教えてもらいました。大学で作っている果物や野菜を買うこともできます。

お父さんもお母さんも、今まで畑仕事を一度もしたことがなかったので、クワの持ち方から耕し方まで教えてもらって手にマメをつくりながら頑張っていました。肥料も一グラム単位まで正確に量り、何種類も調合しました。苗は、接ぎ木苗が病気に強いとか生育が良いという利点があると教えてもらいました。黒いビニルでマルチをピンとなるように張ったり、風に飛ばされないように注意して苗を植えたりしました。私が植えたのは、なすとプチトマト、キュウリです。

私は、大学の先生が教えてくれたので、野菜に興味を持つようになりました。野菜の収かくの時、気になることが出てきたので本で調べたり、新聞記事を読んだりするようになりました。私が気になったのは、新鮮なきゅうりはトゲが痛いということです。トゲは、熟す前に動物に食べられないように身を守るためにあることを知りました。熟す前のきゅうりは、トゲがあり、葉っぱと同じ緑で目立ちにくく、苦みがあるそうです。日本のきゅうりの標準的なサイズは一〇〇グラム、二十一センチくらいだけど、外国では五〇〇グラムくらいになってから収かくするものもあるそうです。日本は、熟す前に収かくし、外国だと黄色くなって熟してから収かくするそうです。だから、キュウリのことを「黄瓜」と書くそうです。面白いなと思いました。野生のきゅうりは、熟したあと、トゲがなくなって黄色くなって目立ち、苦みもなくなるので動物に食べてもらい、種を遠くに運んでもらう利点もあるそうです。私の家では、大きくなったきゅうりを「お化けキュウリ」と呼んで、野菜炒めで食べます。これもまた、おいしいです。

私は、調べた中で「食べることは生きること」という言葉が印象的でした。人間には四つの食べ方があるそうです。とりあえずお腹いっぱいになればいいという「腹で食べる」。好きなもの、好きな味だけを選ぶ「口でたべる」。栄養バランスを考えて食べる「頭で食べる」。感謝して食べる「心で食べる」。その中で、腹や口で食べるのではなく、頭と心で食べることが大切だと教えてもらいました。

私が給食から学んだこと。それは、私たちが健康にすごせるように考えて給食を作ってくれる人、食材を作ってくれる人、食べることの大切さを教えてくれる人、みんなで食べると美味しいことを教えてくれる人が私たちのちかくにいてくれることです。給食という体験は、人生の中でほんの少しの時間だと大人は言います。その少

しの時間で私たちに食の大切さを伝えてくれます。そして給食という思い出を作ってくれます。

給食センターでは小学生一食二七〇円、中学生三一四円の予算の中で、私たちの心も身体も元気に過ごせるように栄養のバランスを考えてくれています。私たちの「おいしい」顔がたくさん見られるように願っているそうです。わたしたちの身体は、毎日の給食で大きくなっています。私は、小学一年生の時から二十七㎝大きくなりました。これから中学生になるともっともっと大きくなります。

給食センターの方たちの想いに感謝してみんなと楽しく給食を食べ、毎日元気に学校へ行きたいです。

中学生の部

大賞

命の襷を繋ぐ時

青山学院中等部　三年
座間　耀永

ステージ四。父が癌を宣告された。癌専門病院の主治医が言った。

「毎日、この病院の入口を二千人が通ります。でも全員が出口を通るわけではありません。」

あなたは「死」を覚悟したことはあるか？父は、命懸けで何十時間にも渡る手術を受けることになった。術中に心肺機能停止になる可能性もある、と言われた。術後も命と闘い続けることになる。奇しくも私も昨年、命懸けで大手術を受けた。「死」を何度も感じた。もし、サンタクロースがいるのなら、早めのクリスマスプレゼントとして生還した私から父へ「命のバトン」を渡させて欲しい。これが切なる願いである。

父は何年も年に二回、会社の人間ドックを受けていた。春頃から喉の調子が悪くなり、かかりつけ医に三度、栄養士やクリニックにも通院。どこに行っても風邪と診断され服薬が続いた。しかし一向に改善せず、大学病院に転院。そこでは検査が一ケ月かかった。当初はスコープカメラ、ＭＲＩ。そのうち喉から注射をして生検。その頃から、家族全員に嫌な予感が漂い始めた。検査は続き、最後には組織片を大きく採取。そして九月四日の宣告。父は耳を疑い、連絡を受けた私と母も呼吸が一瞬止まった。何と、舌の奥にゴルフボール大の腫瘍が見つかったのだ。ゴルフボール大？舌にそんな大きさの腫瘍なんてできるのか？そして、何故かかりつけ医が三回も見逃し

たのか？すぐ全身ＰＥＴ。翌週結果には母も同席した。父は冷静を装っていたが、声が震えていたそうだ。癌は舌の奥に広がっていた。発見するのが極めて困難な種類のものだった。また、選りに選って非常に珍しい種類であり、放射線治療も化学療法も無効。手術一択しかないと説明を受けた。周辺組織に浸潤が見られ、病変より大きく組織を摘出することになる。舌を亜全摘（機能を少しでも残すために一部だけ残して全摘すること）する以外、助かる道は残されていなかった。亜全摘するとどうなるか？食べることが何よりも好きで、母よりも料理が上手な父が今後一切食事が取れなくなる。胃瘻と言って、胃に穴を開けチューブを通し、流動食を直接流し込む生活になる。昨年からカナダと日本のＮＰＯ法人でボランティアを始め、子供達にヨットを教えることを新しいライフステージとして始めた矢先なのに、話すことができなくなる。来年、教え子たちをカナダに連れて行き、現地の子供達とＳＤＧｓ活動をする約束は、どうなるのか？私も血の気が引いたが、父のショックは想像に余りある。「舌を取るだけなのに？」父の身体の大きさからすれば、舌など小さな組織に感じた。それまで舌の働きなど考えたこともなかったが、調べれば調べるほど舌の機能は極めて繊細で複雑だった。父の原発巣（最初に癌ができた箇所）である舌根は嚥下機能でも重要な機能を有している。看護師さんの説明が分かりやすかった。食べ物は通常、重力では飲み込むことができず、「ごっくん」とするには筋肉による力が必要。その力をコントロールしているのが舌根だった。つまり、舌根を除去することは今後、嚥下機能障害が起こり、誤嚥性肺炎のリスクがあるということだ。厚生労働省の「人口動態統計」によると誤嚥性肺炎が原因の死亡者は二〇一八年で四万人近くに上る。つまり比較的身近に起こる可能性がある。母の親友のお母様が誤嚥性肺炎で熱が出た、と施設から連絡があり、親友が向かうまでにお亡くなりになったという話を聞いたことがある。癌もさながら術後の生活にも常にリスクがつきまとう恐怖。

大学病院で一通り説明を受けたものの、父も母も何とも納得ができなかった。しかも手術は早朝から深夜まで及ぶと言う。父が、

「この病院で、同じ癌の手術件数はいくつですか？」

と聞くと担当医はこういったそうだ。

「非常に珍しい癌で…。私は経験がないのですが教授たちは…。」

いくら大きな大学病院でもここには命を預けられない、と思った瞬間だったそうだ。父はセカンドオピニオンを求めたいと、紹介状を依頼した。私は両親からの報告を、涙を堪えながら聞いた。そして、誓った。

「今度は、私が父を支える番だ。」

かつて苦しい闘病生活を強いられてきた私は、家族で一番父に気持ちがよりそえる。私は、まだ十五年間しか生きていない。しかし、そのうちの三分の一の五年間は辛い闘病生活だった。今もなお、その闘いは続いている。闘いとは大袈裟な、と思う人もいるかもしれない。でも当時、小五だった私からは想像もできない道のりだった。二〇一六年、夏。学校の健診である病気が見つかった。見つかってから一番増えたのは泣いた回数だろうか。言い渡された病名は、〝特発性側湾症〟。思春期の女子に多い病気だそうだ。特発性とは原因不明という意味で、本来Ｓ字型の背骨がねじれを伴って横に曲がっていく。成長に伴い、悪化すると胸郭が変形し肺を圧迫、肺活量が減少していき、生命に関わってくる。早速、生まれた病院に行ったが主治医は正直、最悪に近かった。

「ああ、よくある病気ですね。まあギブスを作って、しといて下さい。それでも進行しちゃったら手術ですね。」

いとも簡単にはっきりといわれた。心がこもっているとはどうしても思えなかった。体中に生ぬるいべちょべちょした石膏をぬりたくってギブスの型取りをした。いざできあがった実物を見た時、ハッとなった。目の前にあったのは首から腰までがっつりいかついロボットにでもなるのかというギブスだった。当然、学校にしていく勇気は出ずに寝る間だけの装着となった。担当医師にも技師にも一日、平均二三時間装着が必要と言われ、お風呂の時以外は全て着用が求められたが、到底無理だった。

ノートを書くために下を向くだけで首が締めつけられるのだ。金属の棒を背にベッドに寝るが、夜中に何度も目が覚めた。体が曲げられず、落とした消しゴムも拾えなかった。その夏には合宿があった。長崎の海を最大二㎞も泳ぐ壮絶な合宿だ。数本のベルトを複雑に締めるギブスは、介助者がいないと装着ができない。先生に頼むのも難しく、一週間だからとギブス未着用のまま行った合宿。帰宅後の健診で更に悪化したことが言い渡された。最初の健診からたった一ケ月の間に、二八度だった湾曲が何と四〇度にも進行していたのだ。

「進行性だね。手術しよう。」

レントゲン結果を見ながら人の目も見ず、さらりと言う医師。ショックで泣いていると、

「なんで泣くの?」

バカにされた気分。余りにも医者との相性が悪い。父の知り合いから紹介状を頂き、症例数が多い大学病院に転院をした。新しい医師も感じが良いとは言いにくかった。前よりはまだマシといった感じだろうか。

「先生も子供がいるからわかるよ。」

と言いながら、機械的に仕事をしている印象は否めなかった。ギブスは装着しないと意味が無いと、新しいギブスを作ることになった。胸から腰までのギブスで、以前のタイプより目立たなかった。制服のサイズを二サイズアップすれば学校にも装着したまま登校できそうだった。それでも、重く苦しく、最初は学校にして行く勇気がでなかった。学校の友達がどう思うだろう。何か言われたり、もしも触られたら、不快な思いにしかならない。しかし、その時には六〇度まで進行していて、手術に待ったなしがかかっていた。手術をする決意ができず悩んだ。「前のギブスよりはマシ。まだいい方じゃないか。」そう自分に言い聞かせ、意を決して学校に装着していく覚悟をした。鉄製からプラスチック製になり少し軽くなったとはいえ、それでもゴツく、重い。夏はギブス内がムレて蒸し暑く、苦しかった。前傾姿勢になるとギブスが反って目立つ。気づいていても触れられなかったのか、気づかれなかったのか、しばらく誰にも言われることはなかった。毎日、びくびくしては、「今日も誰にも言われずに終わった。」とほっとする空しい毎日を繰り返した。友達との会話が自然に減った。

参観日があった。突然、お友達のお母さんが言いにくそうに、ただし、とてもそっと、

「もしかしてギブスしてる?」

と聞いてきた。「あ、終わった。気づかれてしまったか。」頭が真っ白になった。ただ次の一言に私は救われた。

「実はお姉ちゃんが同じ病気なの。私、看護師なので、何かあったら相談乗るから何でも言ってね。」

同じ仲間がいる。そう思った時の安心感をいまだに覚えている。偶然にも、病院が同じだった。それにも救われた。だが、真剣に長時間ギブスを装着し、毎日厳しいリハビリを受けているにも関わらず、どんどん病状は悪化していった。医師には、

「どこの学校でも一学年に一人か二人位いるよ。」

と聞いていた上、学術書によると全人口の二~三%に発症する、とある。しかし、私の周囲には全く見当たらなかった。いつも、人の後ろ姿を見る度に「私の背中とは違う。皆、真っ直ぐだ。何で私だけ。」目の奥で涙を堪える日々だった。辛かった。悔しかった。空しかった。

小六の運動会は組体操だった。私は背中に人がのられたら大変だ。先生が配置やポーズを配慮して下さった。二人一組でやる逆立ちは先生と組んだ。簡単なポーズだけ演技し、残りは後ろからみんなの大技を眺めているだけだった。一人だけ何もやっていない。一見、怪我をしてる訳でもないのに、「どうして演技しないの?」と聞かれそうで嫌だった。虚無感に襲われた。

中一になった。ギブスのために制服は大きめで作り不格好だった。新しい友達に何か聞かれたらどうしよう。と不安なまま入学式を迎えた。春の合宿。皆、お洒落なジーンズをはいてきた。私は、ギブスのせいでぶかぶかの服しか選べなかった。同部屋の友達に知られたくなくて、保健室の先生の部屋でギブスの装着をした。皆は気が付いていたのかもしれないが、何も言わなかった。定期健診は続いた。ここになると、もう毎回「手術しかな

い」というワードしか出てこなかった。いくら中学生になったって手術は怖い。簡単に「手術、手術。」という先生に納得がいかず、どうしてもその先生に切ってもらうことに信頼がおけなかった。先生と話す度に、医療ドラマなどでよく出てくるメスを渡すシーンを思い出し、身体の中に戦慄が走った。泣いている私を横目に、淡々と先生が話せば話すほど、「この人には手術を任せたくない。」という思いが募り、せっかく決めた手術直前で、「信頼関係が無いと、執刀は難しいと思います。」と突き放された。もともと紹介状の絡みもあり、大学病院の政治的な動きの中で、担当医を変えるのは困難である。家族で悩み、手術を一度延期することになった。この先どうしたらいいんだろう。途方もない不安。発症率が高いなら、誰か話を聞ける知り合いはいないだろうか、と必死で捜した。偶然、母の知り合いのお嬢さんに二人も手術をした人がいることが分かり、会ってみることになった。二人共、手術は十二時間程かかっていた。でも、今は元気だから、「早く手術をした方がいいよ。」と薦めてくれた。一人は先天性の骨の病気があり、三回も手術をしていた。それでも今はスキーも楽しんでいる、と背中を押してくれた。ただ二人とも首から腰にかけての傷跡が生々しく、痛々しくもあった。丁度、同じ手術をしたイギリスのユージェニー王女の挙式が話題になった。「世界中の側弯症の患者に勇気を届けたい。自分を助けてくれた医師に感謝を伝えたい。」と、手術痕をわざと露出する背中が広く開いたドレスを着ていた王女の勇気に私は震えた。同様に私が好きなモデルも背中の傷を露出した写真をインスタグラムにアップしていた。二人とも私より軽症だったが、「いつか傷は個性になる。」と少しだけ前向きな気持ちが芽生えた。手術に向けて、決心を固めていった。そんな折、奇跡的に担当医が転勤になったのだ。引き継ぎの医師を選べると聞き迷わず友達のお姉さんの担当医を指名した。優しいと聞いていたからだ。新しい担当医は全然違った。今までやったことのない細かいＭＲＩ検査や肺活量を測る検査など細かく調べてみて下さった。同じ病院でなぜこんなに違うのか。先生は、私の右肺の機能が通常の半分以下に落ちていること、このままいくと成人まで生きられないこと、生きていても酸素ボンベを持ち歩く生活になること、を優しい口調で分かりやすく説明してくれた。「肺、もう肺にまで近づいてしまったのか。」「もう今度こそ私はダメなのかもしれない。」確かに最近、階段を少し登っただけで、少し走り過ぎただけで息が上がりやすくなっていた。そうであっても普段は普通に呼吸していることを伝えると、

「骨は徐々に曲がりながら、少しずつ肺を圧迫してきている。段々と機能が衰えてきているので、気づきにくいんだ。実際にはもう機能が危ないよ。」

と諭してくださった。私は今度こそ手術を受け入れる覚悟をして、大泣きした。私は今まで何度、健診を繰り返し、何度手術を拒んできたのだろうか。もうだめだ。もう命の瀬戸際だ。決断の声を振り絞った。

「お願い…します…。」

その時、先生は私の肩にそっと手を置いて、

「大丈夫だよ。」

とだけ仰った。その瞬間を今でも忘れない。優しい温かい手。その手には、「信頼」が宿っていた。予期していなかった大量の涙で視界がぼやけて見えた。私は、初めて、「この先生ならお願いできる。」と安心して、また泣いた。

しかし、そこから、手術「まで」の道のりも壮絶であった。生まれて初めての採血。あとでかなり後悔したが、私はすぐ調べる癖がある。採血方法など検索すると、血が入った注射器の画像で気分が悪くなった。献血センターを通った時、思い出してふらふらした。そんな状態で行った採血。針が刺さり、「あ、そんなに痛くなくてよかった。」と思ったのも束の間急に目の前の景色が歪み始めた。意識がどんどん薄れていく。「聞こえますか？」声は届いた。だが、気づくと担架の上に横たわっていた。血圧が急激に下がっていたらしい。

検査も続いた。ＣＴやＭＲＩ、他にもレントゲンの繰り返し。幸いにも造影剤の投与は免れたがその後壮絶な

難関が待ち構えていた。「死」の恐怖を味わった「貯血。」手術に大量出血が予想されたため、自己輸血準備をする。八百ミリリットルを事前に採血をして保存しておくのだ。一回にコップ一杯分、二百ミリリットルを採取するのが限界のため、術前一ケ月の間に四回通院をすることになった。迎えた一回目。前回、採血で失神したことが引き継がれていたためベッドに横たわった。説明に吐き気を催した。十分採血をし、十分針を入れたまま意識を戻すために生理食塩水を入れ、十分止血という地獄の三〇分メニュー。母に手を握ってもらっていて看護婦さんにも見守ってもらったがすぐに意識が遠のいた。やはり血圧が下が三〇上が七〇という命が危険の領域まで下がったらしい。通常であれば、その後はすぐ動けるらしいのだが、私は更に三〇分休まないと立ち上がれなかった。一週間後の二回目も、同じように血圧が下がった。もうこれ以上できない。もうこんな辛い思いはできない。しかし、一般の輸血が合わない人もいるらしい。事実、母の親友が脳腫瘍の手術をこの大学病院でした際に輸血が合わず術中に痙攣を起こしたことがあるそうだ。恐怖で泣き叫ぶ日々。

「こんなこと繰り返していたら手術前に死んじゃうよ!」

毎日、気持ちが張り裂けそうだった。翌週、三回目。手術日まで二週間を切っていた。急いで貯血を終わらせないといけなかった。しかし、生理が始まってしまった。体中の血が無くなりそうな恐怖で震えた。震えている様子を心配した採血の先生と話しをした。ここで体調を壊して手術を受けられないのが一番リスクであること、最近の血液製剤は安心であると説明され、私の貯血は予定の半分、四百ミリリットルで終わることとなった。ほっとした半面、「もし手術中に大量出血して血が足りなくなったら?他人の血は本当に安全なの?」貯血ができてもできなくても不安がいっぱいだった。どこにも逃げ場がない気持ちだった。

学校のことも心配だった。春休み明けには初回の高校進学テストがある。春休みに手術をする私は、中二の一学期前半は出席できないことが予想された。テストが受けられないとどうなるんだろう。また、新学年になるとすぐに合宿がある。皆はそこで仲良くなる。新しいクラスにおいてきぼりになるかもしれない。体育の授業も見学になったら成績はどうなるんだろう。不安だらけだった。母と中一の担任、学年主任、保健室の先生にお時間を頂いた。先生方は、事情を理解してくれた上で、解決策を提案して下さった。「約束はできませんが。」と前置きした上で、クラスも配慮して下さると仰っていただいたことで私は安心して手術へ一歩を、踏み出すことができた。

そして遂に手術日が三月二六日に決まった。大掛かりな手術のため、先生がチームを組んで下さった。これにより通常十時間以上掛かる手術時間を大幅に軽減できると言う。手術時間が短いということは身体の負担が少ない。長時間の手術中に褥瘡（床ずれ）ができる可能性もあると言う。床ずれはできると治りにくく感染症のリスクもある。その他、手術のリスク、術後のリスクなど細かく説明を受け、何枚もの書類に母がサインをしていった。私は横で「無」になって受け入れていくしかなかった。入院日は後日電話が入ると言われたが、手術日の二日前が目途と言われた。手術日が決まってから、本格的に入院の準備が始まった。少しでも気持ちが前向きになるように肌触りの良いパジャマを買いにいった。手術を知った友達が応援ビデオをラインに送ってきてくれた。歌を歌ってくれているビデオやひたすら応援してくれるビデオ。辛いイベントを少しでも盛り上げようとしてくれる友達に感謝が一杯だった。一方で世の中には新型コロナ感染症の恐怖がじわじわと広がり始めていた。三月三日から予定されていた学年末試験を前に学校が休校になった。病院から入院前に不必要な外出を避けること、衛生面に気を付けて欲しいと連絡が来た。アメリカの医療現場の壮絶なニュースが毎日映像で流れ始めた。ロサンゼルスに住む叔母からも、日本もすぐ似たような状況になるだろうから、と手術前の私を案じる連絡が来た。声の様子からアメリカの逼迫した情勢が伝わってきた。

家族内に緊迫感が漂った。近所の病院がコロナ病床となった。薬局からマスクが消え、恐ろしく高額な値段でネットで売買されはじめた。友人の一人が、手術前にマスクが無いと困るだろう、と二枚マスクを送ってきてくれた。彼女にとっても貴重なマスクのはずだろうに。私はそのマスクをお守りに入院セットに詰め込んだ。その頃、テレビでは死体が収まりきらずに冷蔵庫に積み上げている衝撃的なアメリカの惨状が映し出されていた。国内でも院内感染での死者が出始め、私は自分の病院が大丈夫か不安になってきた。予定通り入院日は三月二四日。病棟は全て面会禁止となっていたが、小児病棟だけは両親に限りお見舞いが許可されていた。しかし、入室までのセキュリティと消毒、検温が厳重に行われた。担当看護師さんの病棟説明があった。手術が大きいため術前からＩＣＵに入ることを説明された。目が覚めた時に真っ白なＩＣＵに入るとパニックを起こす患者が多い為、慣らしで前日から入るのだそうだ。心の準備のために見学することを薦められた。無機質な空間にところ狭しとモニターや機械、管がぶら下がっている。向こうのカーテンがいくつか閉まっていた。担当医から最後のブリーフィングがあると部屋に呼ばれた。湾曲した背中をできる限り矯正し胸骨の位置を確保。肺の形を優先する。一方で歪んだ骨盤の位置も矯正しなければならない。何ケ所かに渡って、背骨の両側に梯子のように金属の支柱を埋め込み、ロッドを詰め込んでいく。ロッドの数は三〇を超えると言われた。背中の筋肉を一度剥し、金属を埋め込み、また筋肉を戻していく。私の半分の角度しか湾曲していなかった友達が十二時間の手術なら私は一体何時間かかるのだろう。手術後は、飛行機に乗るセキュリティゾーンに引っかかるため、一生、医療証明書が必要になる。怪我をしても体内に金属があるからＭＲＩも受けられない。お洒落をしたくてもエステの機械も使えなくなるらしい。私は先生が模型を使いながら説明をしているうちに、段々と血の気が引いてきた。看護師さんが気が付いて下さり、

「後はご両親に聞いてもらおう。」

と、私は抱きかかえられて部屋を出た。病室のベッドに横たわり、首からお尻までざっくり切られていく自分を想像して泣いた。

病室にWi-Fiが通っていないことがわかり、父は急遽レンタルに走ってくれた。

「これから頑張るからNetflix見放題でいいよ。」

と励ましてくれた。テレビが本当に好きな私にとってそれほど嬉しいことはない。しかし、手術前日には、採血があると急に言い渡され不安が募った。家族で麻酔科にも行く必要があった。まずビデオを見させられた。脊髄に注射を打ってる。痛そうだった。「嘘だろ。」という気持ちにしかなれなかった。

「心配なことは全部書き出した方がいいよ。」

と看護師さんに言われて気持ちを整理するために質問メモを作った。麻酔科医の先生は私の心配を一つ一つ払拭してくれた。病院食は恐ろしくまずかった。冷えたハンバーグが固く、何も食べる気になれなかった。一階には本当であればスターバックスがあるはずなのにコロナの影響で閉店になっていた。更に小児病棟の患者は病棟から外出禁止となっていた。地獄の監禁所のようであった。病室は四人部屋だったが、カーテンが閉まっていて誰がいるか全く分からなかった。

手術前夜。下剤を飲まされた。聞いていなかったのでかなりショックだった。生ぬるく、不味い。飲んで寝た後、夜通し何度もひどい腹痛と下痢に悩まされ本当に眠れなかった。しかも夜中から当日の昼まで、水も飲めないというとてもとても過酷な体験もせざるを得なかった。「水が飲めないってこんなに苦しいんだ。」本当に当たり前が当たり前じゃない体験をした。迎えた当日。まず、ＩＣＵに移動。「いよいよ今日、私の背中に異物が入ってしまう。嫌、でも治すためだ。これからあの四年にも及ぶ辛い思い出とさらばできる。着られる服だって増える。よし頑張ろう。行ける。大丈夫だ。」自分を奮い立たせたが、足が震えて動けなくなった。ベッドで寝たままの状態で運ばれていくのだろうなと予想していた私に看護師が言った。「車椅子でいきますか？それとも

歩かれますか？」（え、歩く？そんなのもってのほかだ。こんなに震えて緊張している中で手術室まで歩けというのか。）

「車椅子でお願いします！」

あまりの驚きで強く車椅子を主張した。エレベーターで下りて手術室の中に入っていく。コストコの冷凍庫にいるような感覚。少し肌寒かった。自分の手術室まで着いた時、目の前にはたくさんの手術服を着た医師達がいた。

「ああ私は本当に手術をするんだ。」いよいよ現実を見た感じになった。向こうで医師の方たちが呼んでいる。

「呼ばれているのは他人だ。自分なんかじゃない。」そう思いこみたくて必死だった。手術台にのぼった。頭が真っ白な私に医師と看護師の方々は慰めようとしてくれていた気がする。ただ一人を除いては。麻酔科の先生だ。

「泣いたってどうするの。やるの？やらないの？」

なんという言い方だ。「今ぐらい被害者面くらいさせてくれよ。」そんな思いでいっぱいだった。あまりの驚きやショックに言葉が出てこなかったがこの瞬間になって私は三歳児のように泣き出してしまった。それだけ辛かった。結局泣き叫んでいるうちに、点滴の針を刺された。

「ああ次には麻酔の針が…。」と思ったら、吸引による全身麻酔だった。「ああ、良かった。吸引だ。痛くない。」そう思っているうちにいつのまにか寝ていた。気づくとベッドの上だった。仰向けで寝たはずなのに、いつの間に下向きで背中を切ったのだろう。そしていつの間に、今ここで上向きになっているのだろう。不思議な感覚。タイムリープをしている気分だった。今思えば笑えるがその時は口が開きそうな感じだった。目の前に家族が見えた。「あ、私の手術成功したんだ。したんだよね、だから今ここにいるんだよね。」そう、思った。ただ、周りには管しかないというくらいに管に繋がれていた。「これ除去するの絶対痛いじゃん。」そんなことを思っているうちに次の試練がやってきた。とにかく痛みだ。背中が痛い。横を向けない。「だれか助けてくれ。」藁にもすがる思いだった。体が痛くて動かない。声も出ない。自分に繋がれている管から血が動いているのが見えた。

「私、出血している。大丈夫なのか。」看護師さんたちは走り回って機械を調整している。体がうっ血しないように足にポンプがついており、しゅぽしゅぽと音をたてていた。両親はベッドの傍らまでは入ってこられないようだった。やはり大出血だったそうだが、回収血といって出血した血を洗浄して体内に戻してくれたため、貯血がぎりぎり足りたと言われた。ただし、今後まだ出血が続くと輸血となる。私は、血が流れる管を睨みながら「止まってくれ。」と念じた。

二日を経て病棟に戻った。四人部屋のはずが三人しか埋まっていなかった。その時に聞かされたのが、何と新型コロナ感染症のクラスターが隣の病棟で発生していた。その為、新規患者受け入れと手術が停止したとのこと。私はぎりぎり手術を受けられたわけである。両親はその知らせを待合室で受けた。私の手術が始まって三時間経過した頃、ＩＣＵの看護師と整形外科の医師が、

「お話があります！」

と慌てて飛び込んできた。両親は、手術が失敗したと思い、顔面蒼白になったらしい。看護婦が手紙を渡したが、頭が真っ白で文字が入らなかった。手紙には、院内でクラスターが発生したことが説明されていた。父は憤慨していた。そういえば、手術前夜、「感染症のチェックをします。」と鼻の中に綿棒を入れられた。今にして思えばあれはＰＣＲ検査だったに違いない。しかし、コロナの恐怖以前に私は体中の激痛との闘いが深刻だった。痛かったら〝ショット〟と言って自分で麻酔を打っていく。我慢できずに何度もショットを入れるが、一向に痛みは治まらない。食事が運ばれてくるが背中中をハンマーで殴られ続けているかのような激痛に、ベッドから起き上がるどころか、頭をもたげることすら苦痛である。動かないと床ずれになり、筋肉低下が起こるからと、少しでも身体を動かすように看護師さんが、足や背中に枕を入れたりずらしたりする。痛いところに氷枕を置いてくれる。何をやっても痛くて苦しくて泣いた。入院初日に部屋の奥の子がナースコールを押し続け騒いでいるのが、うっとおしかったが今は彼女の気持ちがよくわかる。夜

七時になると両親は病室から帰らないといけない。しかし、痛くて寂しくて父と母の手が離せなかった。看護師さんが特別に、と、九時まで、ただし女の子の病室なので母だけ、と言ってくれて寝るまで母の手を握っていた。しかし夜中に激痛が襲い、ショットをしたが効かない。ナースコールをしようとボタンを探したが、どこかに行ってしまって見当たらない。痛くて体が動かずボタンが探せず、また泣いた。見回りの看護師さんが来て下さり、氷を頂いた。とにかく辛かった。看護師さんは、慰めの言葉を何度もかけて下さったが、辛さに耐えかねていた私は、

「看護師さんは、同情はできるけど共感はできないじゃないですか。」

と言ってしまった。せっかく看護をして下さっている人に対してひどい言葉を向けてしまった。もう、自分のことで頭が一杯になってしまっていたのだろう。翌日、動脈にささっていた点滴を抜いた。その作業も激痛だった。手が腫れあがっていた。次にカテーテルを抜く。これも得も言われぬ痛みが走った。そしてリハビリが始まった。背の高いポール状の歩行器につかまりながら、まずはトイレに行く。しかし、ベッドから降りることさえ、ままならない。少し足を動かすだけで頭の先まで激痛なのだ。看護師さんに介添えして頂きようやく歩行器前に立った。四日ぶりの歩行。ふらふらする。トイレに便座まで歩くだけで息切れした。だが、貧血で倒れてしまった。

「リハビリなんてしたくない。」

ごねた。動脈点滴を抜いたところは、気味の悪い青色のあざができた。筋力はあっという間に落ちるからと言われて歩行練習は継続された。痛いのをこらえながら、廊下を歩く。毎日、少しずつ距離を延ばしたり、本来であればリハビリステーションまで行ってするのだが私には難しかった。体を毎日拭いてもらっていたが、数日後にはシャワーを浴びるように言われた。（点滴が刺さっているし、まだ痛くてしゃがむことができない私にシャワーなんて浴びられるわけがない。）看護師さんがシャワー室まで介添えして下さったが、自信がなくて戻ってきた。私は家にいたら朝晩二回入浴するほどお風呂好きだ。術後一ケ月は入浴禁止だと聞いた時はショックだったが、今は、こんな状態でシャワーなんて無理だ。夕方、仕事帰りの母が来た時、看護師さんが母とシャワーに挑戦した方がいいと促した。髪の毛も洗った方がいいと思ったが、上も下も向くことができないほど首の金属が痛くて、断念。パジャマのズボンを脱ごうと思ったら、しゃがむ際に、身体が曲げられないことに気づいた。せっかくギブスがはずれたのに、身体に埋め込まれた金属のせいでまたロボットみたいにしか動けない！パニックになった。母に手伝ってもらってそっとシャワーを浴びた。背中の傷口にお湯が当たらないよう前だけお湯をそろそろかけた。さっぱりした。だがタオルで身体を拭く時、どんなにそっとタオルで拭いてもらっても傷口に電気が走った。「私は治るんだろうか。」不安しかなかった。傷口が大きいため、固定するために身体を保護するギブスをすることになった。しかも三ケ月は必要だという。（やっとギブス地獄から脱出できるはずだったのに、またギブス!?）ショックを受けた。しかし、今までより簡易的だし治るための措置だからと、諭された。まだ痛くて処置室まで歩けず、車椅子で移動した。技師さんたちが私を覚えていて、

「心配していたよ。手術が成功してよかったね！」

と笑顔で言って下さって嬉しかった。作業台に私のレントゲンの写真が貼ってあった。現実に引き戻された。見事に首から腰まで金属の支柱が二本、しかもそれを支えるロッドがぎっちり写っていて具合が悪くなった。私の背骨は湾曲が進みすぎていたので、角度を〇度にするにはリスクがありすぎると、結局三十度を残している。その生々しい様子がありありとわかった。技師さんたちに、リハビリを頑張るように応援された。歩くのはまだ辛かった。数十メートル歩くだけで重い痛みが響く。余裕がなかった。

三月二九日。病棟の皆が大騒ぎをしていた。覚えばこの日初めて外をみたように思う。三月だというのに大雪だった。ぼたん雪が横殴りの風に吹かれて流れていく。

入院時、桜は既に満開だった。今年は温かかったのに。

「冷え切った私の心みたい。」と談話コーナーから外を茫然と眺めた。ふと、そこにある身長計が目に留まった。

「そうだ。」父に手伝ってもらって、身長を測った。なんと、五センチも身長が伸びていた！曲がった背骨を矯正したので身長が伸びたのだ。

「やったぁ！」

声が出た。これは嬉しかった。少し気持ちが前向きになった。やがて日々、歩く距離が延び、痛みがあっても我慢ができるようになってきた。仰向けに寝るのが辛かったはずなのに、ベッドを動かしたり、自分で上にずり上がることもできるようになった。看護師さんたちに、

「その姿勢から、自分で這い上がれるなんて、すごい回復力だね。」

と言われた時は嬉しくて嬉しくて仕方がなかった。「ずっと辛かった思い出にもうすぐ終止符が打てる！」そんな気がしただけで笑顔になれた。主治医が研修医と一緒に回診に来て下さるのだが、いかにも「白い巨塔みたい。」と、笑えるようにもなれた。毎朝、来てくれる研修医が少しイケメンで朝起きて会うのが小さな楽しみだった。食欲もでてきた。先週までは大好物の餃子を母が差し入れてくれても一つ食べるのがやっとだったが、病院食の七割くらいまで食べられるようになった。

その頃になると、病棟の患者数は激減。院内は閑散としていた。完全に新患者がストップしていた。リハビリセンターに行く道も人気がなく、廃墟病院のようになってきた。コロナの脅威が迫ってきていることが肌で感じられた。「今、罹患したら、弱った私の右肺では耐えられない。」時々、怖くなった。四人部屋は、対角線上に二人使用になり、ついに一人で使うことになった。最初は孤独だろうなと不安だったが、テレビが大音量でみられるのは快適だった。まだ入院時期は長かったが、更なるクラスターが院内で発生。ニュースにもなり院内はぴりぴりした空気となった。予期せぬ感染リスクを回避しなければならないと、主治医に言われて、私は退院して通院に切り替えることになった。

退院の日、ずっと私の心を支えてくれた看護師さんに挨拶をした。お礼を言っている時、つい感極まって泣いてしまった。まだまだ痛みはあったが帰宅できるのは嬉しかった。父が迎えにきてくれた。久しぶりの外界。あんなに満開だった桜はすっかり葉桜に変わっていた。しかし、再びショックがあった。体が曲げられず車に乗り込むのが激痛なのだ。先に座席を倒し、寝返りを打つように座席に着く。首が苦しく、さらに席を倒し、楽な姿勢を探したがシートベルトをすると少し苦しかった。家に帰れることが嬉しかったので我慢できた。帰宅すると、身体がこわばっていた。それでも長い辛い合宿から帰ってきた気分で家の玄関に着いた時の安心感は、ひとしおだった。「私の闘いもようやく終わったぞ！」とにかくほっとした。「すごく久しぶり。」とソファに座ろうとしたら体の異変を感じた。お尻が沈むので、首が苦しく姿勢が辛い。金属がなじんで筋肉を動かせるようになるまでまだ何ケ月もかかるのだ。「またもや次の試練か。もう散々だ。」本当に懲り懲りだ。そんな気持ちで一杯だった。座り続けていることが辛かった。新学期がオンライン授業になったことは救いだった。その後も、何ヶ月も特に立ったり座ったりする動作が痛く、苦しかった。

分散登校が始まり、私はまたギブスをしたまま登校になった。傷に負担がかかるため荷物が持てないと、当時、リモート業務になっていた父が毎日往復送迎してくれた。ギブスは結局夏まで外れなかったし、今でもリハビリは続いているが、そのお陰で私は今、少しずつ体育の授業も参加ができるようになった。背中の傷を見た友達がびっくりしたこともあり、水泳の授業にはまだ抵抗がある。でも、ギブスから解放されたお陰で今まで着ることができなかったスキニージーンズをはけるようになった。手術から約一年後の定期健診で主治医に会った時、

「ようやく笑顔が見られて嬉しいよ。いつも泣いていたから。」

と先生に言われ、恥ずかしかったが、嬉しかった。私は金属の状態を確認するために生涯通院をしなければならないし、筋力を保つためにリハビリも欠かすことができ

ない。時々耐えられない痛みもあるが、手術を後悔していない。

だが、私が一年半かけてようやく復活してきた矢先に父の癌宣告。最初は耳を疑い、受け入れるまで家族全員時間がかかった。いつもは気丈な母が、涙もろくなった。父は調べに調べ、有名な病院からいくつもの癌専門病院、最先端治療病院など訪ねていた。似たような癌経験者の生々しい話も多く聞いていた。まだどこかに、舌を残せないのか、希望を持っていたのだと思う。しかし、ある先生が、まず一番大事なのは、命。次に機能。最後が容姿（傷口の形成という意味で）という説明をし、父は腹を決めた。会った中で一番厳しいことを仰る、だが、一番信頼できる医師にお願いをした。機能を断念し、命を優先する道を選ぶには、その先生しかいらっしゃらない。四以上のステージはないからだ。先生は、両親のどんな質問にも真摯に正直に答えて下さった。手術中に心肺停止の可能性もあるなど、様々なリスクを先生は忖度なく説明したそうだ。聞くのは辛かったが、覚悟ができた。

病院に心の準備のため、と、かつて舌を失った方々のその後の様子をインタビューしたビデオを渡された。リハビリで七割位まで機能が戻った方を中心に年齢や術後経過年数別に編集したものだと言われた。リハビリは大変そうだったし、回復しても残る障害が鮮明だった。リハビリで一番大変なのは父だ。私たちができることは父を全力で支えることだ。

入院するまでの間は、父は何をするにも、「最後の」を接頭語にした。分散登校が始まってから、長い間学校まで送迎してくれていた父は、最近は駅まで送ってくれていた。病気がわかってからは、私は自分からバスで行くようにした。一分でも父に睡眠をとって欲しかったからだ。しかし、入院直前、「最後だから」と朝早くから起きてくれた。断ったが、父の気持ちを考えて甘えることにした。宣告後は、食卓も大きく変わった。野菜や所謂癌に良いとされる食材が多くなった。晩酌はなくなった。しかし、入院一週間前からは、「もう二度と食べられないから」と「最後の」鉄板焼き、「最後の」パスタ、

「最後の」チャーハンを食べに出かけた。無事に手術が終わっても、舌を失う父は二度と固形物は食べられない。家族でこうやって、好きなものを食べることはないと思うと切なかった。食べることが人一倍好きな父とこれからどうやって食事をしていけばいいんだろう。「最後の」鉄板焼きはお墓参りのあとに寄った。墓前で父は静かに手を合わせていた。私も必死に祈った。その鉄板焼きは父が小さい頃から祖父母と一緒に行っていた思い出の場所だった。レストランには七五三をお祝いする幸せそうな家族がひしめいていた。なんだか羨ましかった。「何で父が。」その思いが常にあった。いつもは、自分が食べたいものを真っ先にオーダーしてしまう私だが、その日は、

「パパ何が食べたい？」

と聞いてしまった。いつも通りにしていれば良かったのに。父がかえって過敏に感じてしまったのではないか、と後から反省をした。シェフと食材や料理の仕方を普段通りに楽しそうに会話をする父を横目に見ていると、父が病気であることが信じられなかった。食事が終わった時、

「もう、心残りはないな。」

と父が笑った。決意の食事だったのだろう。それからは、普段は勉強時間の関係で、家族と食事の時間がずれてしまっていた私も、家族の食事時間を優先にした。

「最後の」週末は、家で手巻き寿司をしようと近所の仲良し家族に来ていただいた。父が板前を担当した。「最後の」板前だった。入院の前日は、私と母でふわふわハンバーグを作った。「将来このくらいの柔らかさだったら食べられるようになって欲しい。」、思いを込めて、玉ねぎは炒めずにトロトロに蒸して崩して混ぜた。パン粉は使わず少量の片栗粉に豆乳と卵を浸して、焦げ目をつけないように丁寧に時間をかけて蒸しながら焼いた。

「いやぁ、こりゃうまいわぁ。」

父がおかわりをしてくれた。私は泣くのを我慢していたのに、母の目は真っ赤だった。

「私が片付けるから、お風呂入って。忘れ物がないよう

にね。」

と、母はあたかも明日から出張に行くかのように父に声をかけていた。ふと、父が、

「あきのが、お風呂入った後に爪を切ってあげるよ。」

と言った。私は、背中に入った金属のせいもあり、恥ずかしながら足の爪を切るのがなかなか苦しい。中三にもなって、と母に怒られるが、甘えていつも父に切ってもらっていた。最近は、自分で一生懸命切ろうとしていたが、首が詰まってなかなか辛かった。それを見ていたのだろう。自分でできるから、と断ったものの、父の、

「最後だから。」

に負けた。ぱちんぱちん、という音。今でも覚えている。私は今まで癌については他人事だと思っていた。まさか我が家にもこんな日がきてしまうなんて、父がこんな病気になってしまうなんてショックで仕方がなかった。違和感を感じ始めてすぐに病院に行ったのに。最初の病院でも近くの医者にも、「大丈夫。」と言われていたのが悔しい。あの時わかっていれば癌はこんなに大きくはなっていなかったはずだ。

手術日は、十一月十六日。私と同様、二日前に入院予定で、週末入院の可能性もあると聞いていたのに、四日も前の十二日の金曜日が入院日となった。家族と一日でも長く過ごしたいと交渉したが、却下された。感染症のため、家族のお見舞いすら禁止なのに。入院日も付き添いは一人まで。学校に行く前、父に思いっきりハグをした。「すぐに会える。」記念写真も撮った。週末こっそり病院に行こうと思ったがセキュリティが厳しく断念せざるを得なかった。毎晩、父にビデオ通話をした。父は笑っていたが疲れているように見えた。病室の様子を見せてくれたり、病室から見える景色がきれいだからと写真を送ってきてくれた。食事も選択ができ、意外と美味しいと食レポが面白かった。手術前日、看護師さんがうっかり選択させてくれるのを忘れ、魚の煮物が出てきたらしいのだが、もう一生食べられないと交渉したら、何とカツ丼が出てきたらしい。何とも父らしい。

『最後の』カツ丼だ。もう思い残すことはないね。」

父は笑っていた。下剤をこれから飲むから、と夜九時半に「最後の」ビデオ通話を切った。私と母はしばらく会話ができないまま暗くなった携帯を見つめていた。

手術当日。偶然、創立記念日で私は休みだった。コロナでなかったら私だって付き添いたかった。八時半から手術だと母は早朝から出かけていった。まず家族で手術室前に移動。最後の手術説明を受ける。失われた舌を形成するために、左手か腹部から移植をする確認を受ける。病巣のある舌根は血流を司るため、手術中に血流が止まった場合は、舌全部を取る可能性もあること、手術をしながら都度判断していくが、咽頭なども摘出する可能性があることなどを最終確認される。説明後、

「ここから先は家族の方は入れません。」

と突然、父は手術室の奥に誘導された。母は力いっぱい手を握ったそうだ。父は、最高の笑顔で、

「大丈夫だよ。行ってきます。」

と言った。その笑顔の写真を母が送信してきた。私は大泣きした。緊急の時は連絡します、母はPHSを渡された。病院内しか繋がらないらしく、また待合室もないことから、母は外来のソファでひたすら待つことになった。仕事のメールが何回も来たらしく、そのお陰で冷静に待っていることができたようだった。当初最低でも十時間から十二時間かかると言われていた手術。突然、十四時過ぎにPHSが鳴ったそうだ。母はパニック状態。まだ予定の半分の時間。絶対に、何かがあったに違いないと、手が震えてPHSのどのボタンを押せばいいのかわからなくなったらしい。何とか応答すると、主治医が明るい声で、

「今どこにいますか?説明室に来て下さい。」

と言われ、母は走った。部屋の前で、銀のトレイに恐しく大きな病巣をのせた主治医が、待っていた。

「今、癌が取れました。いやぁ、大きかったですねぇ。」

母はトレイにのった三百グラムステーキ大の肉片を見て息が詰まりそうだったという。母の質問に先生はいつも通り、真摯に答えてくれた。病巣が大きくリンパ節まで取ったこと、幸い大きな転移がなかったこと、残りのチー

ムが形成手術をしていること、まだ数時間はかかること、説明は明確で丁寧だった。そのうえで、

「写真を撮りますか?」

と母に聞いた。母は思わず、シャッターを押した。また階下で待ってくださいと言われ、写真を見直した母は涙が止まらなかったという。私は生涯その写真は見たくないと封印をお願いした。そして、夜十七時過ぎ。再びPHSが鳴った。さきほどのトレイを持った別の先生が、同じ部屋で待っていた。パソコンの画面で、どういった手術が行われたか詳細を説明してくれたそうだ。最終的に四分の三の舌を切除。嚥下機能を司る舌根は一センチしか残せなかった。発声練習より嚥下機能訓練が壮絶になると予測される。飲み込む力より、吐き出す機能を鍛えなければいけない。何故なら誤飲をすると誤嚥性肺炎を起こし命に関わるからだ。そのため切除、移植と同時に食道を拡張する手術を施したそうだ。まず一週間、ICUで、移植が成功したか血管が通っているか確認する。口腔内が腫れるため、気管切開をして気道を確保していたが、術後二週間程度を目安に腫れが収まり、自己呼吸ができそうになったら管を外す。その後、バリウムを通し、レントゲンで確認しながら臓器がつながっているかを確認する。そこから、嚥下機能訓練開始。そのリハビリたるや地獄らしい。食事ができないにも関わらず、ひたすら吐き出す練習。たいていの方はここで心が折れてしまうらしい。私には想像ができない世界だ。よく海でご一緒する方が咽頭癌だった話を入院直前に聞くことができた。偶然にも同じ病院、同じステージ時で今や五年経過、寛解している。彼もまた、壮絶なリハビリを乗り越えたと言っていた。苦しかったはずの闘病生活を持ち前の明るさで、面白、おかしく話してくれたことは、今後の父の精神を支えると信じている。母は手術後、一時間程度麻酔が覚めるまで父を待った。タブレット越しに一瞬だけ父の顔を見せてもらったらしく管という管につながれた父の写真を送ってきた。声が聞こえていたらしく、

「世界で一番愛しているよ!」

と母が叫んだ時、嫌な顔をしたそうだ。恥ずかしかったろうに、父にちょっと同情をした。その後、すでに五日経過したが、いまだ病院からは音沙汰がない。ICUにいる間は、父は携帯が使えない。一週間ICUにいることになるので、まだ連絡は取れないが、「便りがないのは良い知らせ」と信じて私は静かに待っている。一般病棟に移っても入院は長い。父は誕生日もクリスマスも年末年始も、家族に会えず、病室で闘うことになる。一般病棟に移ったらビデオ通話をするね、と入院前に言った時、

「しゃべれないからプレッシャーになるよ。放っておいて欲しい。こちらから連絡するまで待って。」

と言った父の声が耳に残っている。だから私は父を信じて待つのみだ。母と電車に乗った時、『さよならも言えないうちに』という本の広告を見て、いきなり母が泣いた。私は、父は死なないと信じているので絶対に泣かない。私は医学が進歩することを信じているし、何より父の生命力を信じている。父はまだまだやりたいことがある。私だって父とやりたいことがある。父はリハビリを乗り越えるだろうし、父を待っている人がいることを誰よりもわかっているはずだ。

喋れなくなってもいい。食卓を一緒に囲みにくくなったっていい。そんなきれいごと、と思われるかもしれない。でも生きてさえすれば手は握れる。会話ができなくても筆談がある。目で感情がよみとれることだってある。最後のビデオ通話でなぜもっと話しておかなかったのだろう。後悔が未だに残っている。父の手料理は二度と食べられない。今度は私が美味しい流動食を作る番だ。私の闘病生活を母と共に支えてくれた父を今度は私が支える番だ。五年後生存率が何だ。私は父がずっと元気でいられることを誰よりも信じている。

中学生の部

佳作

「平和のバトン」は「命のバトン」

上越教育大学附属中学校　二年
井口　穂香

「教科書の中の言葉だけじゃ、絶対に理解できないはずだよ。」

母はそう言って、私と妹を戦争のパネル展に連れて行った。私が小学六年生の時だった。

会場に足を踏み入れた途端、私はそこから一歩も動けなくなってしまった。全身がすうっと冷めていくような感覚が私を襲った。展示パネルのモノクロ写真には、悲惨な状況が鮮明に残されていた。中にはよく見ないと、何が映し出されているのかわからないものもある。

「ん？これ、なあに？」

私は写真に顔を近づけ、その瞬間、言葉を失った。黒焦げの球体、それは人間の頭だった。何だか見てはいけないものを見てしまったような感覚に襲われ、私は思わず、

「ごめんなさい。」

とつぶやいた。

戦争については、授業でも習ったはずなのに。図書館の夏の図書コーナーには必ず戦争をテーマにしたものが並べられていたはずなのに。私は戦争を全くといっていいほど理解していなかった。教科書には戦争に関する情報がきちんと整理されていたはずなのに。いつ、どこで、どんなことがあったのか、暗記すべき内容として教えられたのに。私は勉強の仕方を間違えていたのだろうか。

ただ今なら、ほんの少し、分かるのだ。実際の戦争というものは、理路整然と説明できるようなものではなかったと。戦争の内実は、もっともっと複雑に絡まり合っているのだと。どうにもならない感情、思惑の渦、善悪への危うい線引、何が真実かさえわからない、ごちゃ混ぜの情報にあふれているもの、それが戦争なのだと。戦争を学ぶとは、その絡まった糸を、少しずつほぐす作業なのではないかとさえ思うのである。

パネル展の写真や映像は、その衝撃ともに、悲惨な戦争の事実を私に教えてくれた。一方で、「怖い」という感情は、私からしばらく離れることはなく、パネル展に行ったことを、私は強く後悔していた。

当時の私は、「戦争そのもの」を悔やむというよりも、戦争の「怖さ」を知ってしまったことを悔やんでいたように思う。自分の心を守るために、こんなに怖いものをこれ以上知るのはよそうと決め、心に蓋をしたのかもしれない。恐怖の感情から逃れるためには、そこで見たものをフィクションだと思い込むしかなかった。

今も、私の生活の中には、戦争を強く意識させるものはない。そして、これから先も当たり前のように、この平和が続くものだと思い込んでいた。永久平和の確実な根拠など、どこにもないのに。

ある日、私は祖母の家に遊びに行った。そして、仏壇の傍に薄茶色の葉書が数枚置いてあるのに気付いた。祖母の父親の兄、正栄さんからの手紙だという。祖母の父、つまり私にとって曾祖父は、私が小さい頃に他界した。祖母の話では、曾祖父は末っ子で、出征した長男の正栄さんとは、随分と歳が離れていたそうだ。

仏間には、眼鏡をかけた若い青年である正栄さんの遺影がある。小さい頃の私は、祖母の家の仏間に並べられている遺影の中に、一人だけ随分と若い人がいることが不思議で、何だかしっくりとこないような感じを抱いていた記憶がある。

仏壇の傍に置いてあったもの、それは、戦地からの葉書だった。心許ないほどの薄さで、その手触りは私の指紋とこすれ合い、何ともザラリとしている。ほんの少し青を混ぜたような黒いインク、この手書きの文字が、確

かに正栄さんがいたのだということを強く訴えかけてくる。しばらく、その葉書をじっと見つめながら、私は思いを巡らせた。

「正栄さんは、一体、どんな気持ちで書いたのだろうか。」

正栄さんが当時、どんな場所にいたのかは全く分からないが、私は暗がりの中、必死にペンを走らせる正栄さんの姿を思い浮かべた。

召集令状一枚で、有無を言わさず戦地へと連れていかれた時代。そのことから、兵士の命は、その郵便はがきの値段に例えられたという。代わりはいくらでもいるんだと、次から次へとかけがえのない命が戦場に動員された。

今、私が手にしている資料には、戦死者は軍人や軍属を併せて二三〇万人を超えたと書かれている。その莫大な人数の中に、正栄さんがいる。二三〇万人の、その一人一人に人生があり、家族があり、仲間がいたであろう。資料に書かれた戦死者数の背後には、その何倍、何十倍もの人々の痛みや悲しみがあるはずだ。それを思うと、私の胸はまたも締め付けられるのだ。

私はふと葉書の消印をみた。昭和十九年とある。太平洋戦争が始まって三年目、原爆投下の一年前である。調べてみると、昭和十九年とは、銃後と呼ばれた国土が戦場へと一変していった頃だと分かった。つまり、いよいよ日本が追い込まれていく時だったのだ。「本土決戦」のかけ声とともに、女性や子どもに至るまで、すべての国民が戦争に巻き込まれた瞬間だ。

正栄さんが送ってくれた葉書に書かれた言葉は、不自然なほどに、とても穏やかだ。

葉書の中で正栄さんは、雪消えの遅れを気にして、田植えの準備はどうかと尋ねてくる。次の葉書では、山野が青々と色づき、鈴蘭の香る絶好の季節が訪れたと喜ぶ。またある葉書では、柿の赤々と色づく「内地」の様子を思い出すと語っている。描かれる情景は、きっと正栄さんの脳裏にある故郷の姿なのだろう。そんな文面からは、悲壮感など全く感じさせないのだ。そして、どの葉書にも決まって、次のような言葉が添えられているのである。

「一生懸命軍務に精励致して居ります故何卒御安心下さい。」

この言葉は一体、何を意味しているのだろうか。

ある資料に、戦地に赴いた兵士は太平洋戦争中、家族を心配させないよう過酷な軍隊生活等は書かなかったと書いてあった。また、反戦的な内容が書かれていないか、軍が検閲をしていたとも記されていた。集団疎開で親元を離れていった学童が出す手紙でさえ検閲があったとも書かれていた。新聞報道に至っては、苦戦の事実が全く報じられない状況の中である。本当の気持ちを書くことなど、許されなかったのかもしれない。

そんな葉書の中に、一枚だけ、同じ部隊の方からと思われる異なる筆跡の葉書があった。

「正栄君も毎日元気にて軍務に精励致して居ります故ご安心ください。」

「寒さに負けず毎日猛特訓張切って居ります。」

「正栄くんはこちらで充分喜んで一生懸命です故、どうぞご安心の程」

何だろう、このざわざわするような違和感は。私は自分の中に、何かしっくりのとこない、懐疑的な感情が沸き上がるのを感じた。そして、私の心は叫んでいた。

「くやしい、くやしい。悲しい、悲しい。」

「喜んで一生懸命」という言葉は、こんなにも切なく響く言葉なのか。偽りの言葉がもたらす優しさは、無情にも、辛く悲しい事実を突きつけてきたのである。

戦死の報に「おめでとうございます」「ありがとうございます」と言葉を交わさざるを得ない時代。「名誉の戦死」とたたえられ、家族が悲しむことなど、許されない時代だったろう。

そんな中で、家族は正栄さんの葉書を見て、何を思っただろうか。戦争の理不尽さをぐっと飲みこみながら、それでも正栄さんの安否を知ることができたと、胸を撫でおろしただろうか。

最後に届いた葉書は、正栄さんからのものではなかった。正栄さんの父が、正栄さん宛てに書いた葉書であっ

た。その上には「本人不在ニ付差出ニ返送相成度」と書かれた紙が貼られていた。「不在」が意味するところを察し、私の頬を涙がつたった。

「この手紙をどんな思いで、受け取ったのだろうか。」

「そこには誰がいたのだろうか。」

「どんな言葉が交わされたのだろうか。」

そんなことばかりが、頭の中をぐるぐると駆け巡る。想像を巡らせるたび、私は切なさで息苦しくなった。この時初めて、あの戦争がフィクションではなく、まぎれもない「現実」であったのだと痛感した。私にとって、「戦争」が他人事ではなく、自分事になった瞬間だった。

戦争の事実を知ろうとすることは、心が痛む苦しい作業である。それでも、私たちはこの事実に向かい合わなければならない。

当たり前に感じてきた現在の平和は、多くのかけがえのない命と、それを取り巻く多くの悲しみの上にあるのかもしれない。未来の平和を願って、人々が渡し、繋いできた「バトン」が今ここにあるのかもしれない。渡されようとしている平和のバトンを、無責任に誰かに託すこと、は、自分の命に向き合わないということではないだろうか。

戦争が過去のものとなりつつある。私自身も、両親も、祖父母でさえも、直接的には戦争を知らない。戦禍を生き延びた人々は高齢化していて、意識しなければ、平和のバトンがあることすら見逃してしまいそうだ。本当は、私たち一人一人が受け取りにいかなければならないバトンのはずなのに。そうでなければ、正栄さんや家族、苦しい時代を生き抜いた、全ての人々の思いは報われないのに。

戦争を知らない世代が担う責任の大きさに気付いた時、私の脳裏をよぎったのは、自分でも訳の分からない、無意味な選択肢だった。

「知らないふりをして、楽観的に生きるのが幸せか。知りながら平和を噛みしめて生きるのが、幸せか。」

頭の片隅に問いを残したまま、私は中二の夏休みを迎えた。じりじりと肌に刺さるような暑さの中、ようやく、私は結論を出した。

「よし、やろう。」

この夏、「知るため」の行動を起こすことに決めた。気合を入れなければ心が押しつぶされてしまうのではと身構える私の肩は、この上なく力んでいたのかもしれない。戦争に向き合うのは、そんなに簡単なことではないと自覚しているつもりだった。それでも、怖いという感情を言い訳に、戦争の事実から目を背けることはもう止めよう。私はやっと自分勝手に閉めた心の蓋を、開くことにした。

私はまず、戦争の歴史を調べることにした。戦争に関する資料や本が、こんなにもたくさんあるのかと圧倒された。空爆が投下されたのは大きな都市だけではなかったこと、原爆投下の背景に各国の様々な思惑が絡んでいたこと、戦争末期には日本も原爆研究を行っていたこと等、調べるほどに新たな気づきに出会うことができた。また、戦争についての新たな証言から、これまでとは違う見方で戦争が捉えられていることも知った。小学生の頃、図書館の子どもコーナーに置かれていた本の内容とは随分違っていた。資料を開けば開くほど、発見が得られることは、私にとって刺激的でもあった。

しかし、読み進めていく中で、著書によっては、情緒的で主観的な表現が多かったり、著者の思想が前面に出ていたりするものも多数あることに気付いた。飛躍的な捉え方の本に出会って感じたのは、戦争の真実にたどり着くことは、思いの外、困難だということである。ひとたび疑念を抱いてしまうと、これまで読んできたものも、果たして事実だったのだろうか、私が習ってきた歴史は正しかったのだろうかと、自信を持てなくなっていった。あふれかえている戦争資料を前にして、途方に暮れ、私は何も考えられなくなってしまった。

「一体、何が本当なのだろう。今、私がやっていることに意味はあるのか。」

自分に何ができるのか、何をすべきなのかを問う中で、様々な考えが、頭の中を堂々巡りする。気づいたことは山ほどあっても、それがどう未来の平和につながるのだ

ろうか。どうやってつなげていけばよいのか。学びのゴールが見えずに、無力感だけが私にのしかかった。

難しい言葉で書かれた大量の資料は、結局、どこまで行っても、読み終わる気がしない。読み比べるようにして本を眺めると、一方の本に書いてあることと、もう一方の本に書いてあることとの矛盾に気付き、頭の中で一気に情報が錯綜する。分かったような、分からないような、薄っぺらくて不確実な達成感が荒波のように私を襲う。

確かな手応えを得られないまま、時間だけが過ぎて行く。そして、なぜ戦争の道を選ばなければならなかったのかという問いだけがますます深まり、まるで森に迷い込んでしまったような気持ちになった。

そして、数日が経過した。私は「調べる」ことから離れてみようと思った。何をしたら良いのかが、見い出せない混迷する時間が、自分の力の無さを突きつけてくる。一方で、本当にこのままでいいのかという、何とも言えぬもやもやとした気持ちが、私にまとわりついてくる。

そして、その気持ちは決して離れようとはしなかった。

悶々としている私に、父が本をくれた。表紙には『戦争というもの』と書かれている。今年の一月に亡くなった半藤一利氏の著書である。半藤氏は昭和史研究の第一人者といわれ、戦争に関わる著書もたくさん遺している。まえがきには、次のような一文があった。

「戦争によって人間は被害者になるが、同時に傍観者にもなりうるし、加害者になることもある。そこに戦争の恐ろしさがあるのです。」

この一文を読んで、ハッとした。知ることを止めようとしている今の私は、戦争に関わっていないようでいて、実は「戦争の傍観者」になっているのではないかと感じたからだ。半藤氏は語る。

「戦争の残虐さ、空しさに、どんな衝撃を受けたとしても、受けすぎるということはありません。破壊力の無制限の大きさ、非情さについて、いくらでも語りつづけたほうがいい。」

あれこれと理由をつけて学ぶことを止めようとしている私は、写真の怖さから知ることをやめた小学生の私のままではないか。半藤氏の言葉は的確に、私にグサリと突き刺さる。妙な爽快感を伴って。

時を同じくして出会ったのが、秋山正道氏の「新潟県の空襲被害」という論文だった。戦争に対する筆者の評価が書かれていない資料に出会ったのは、初めてだった。思想的な立場や政治的な立場からの分析とは距離を置き、史料や証言、研究文献等に客観的に向き合っていることが伝わる資料だ。歴史と誠実に向き合う資料に、私はこれまで得られなかった確かな手応えを感じた。

そして、私の住んでいる地域にも、空爆があったという記録が目に留まった。当時のことを知る人や犠牲となった人の子どもからの証言を基に、克明に記述されている。私はこの事実を、自分の目で確かめたいと思った。

迷い込んだ森から抜け出すように、私は「確かめる旅」に出ることにした。

最初に向かったのは、上越市にある黒井公園である。その一角に確かに、慰霊碑は建てられていた。「直江津空襲・黒井被爆の地」と書かれている。昭和二十年五月、アメリカの爆撃機が飛来し、直江津に爆弾が投下された。これが県内最初の空爆であった。この爆撃によって、駅で作業をしていた人と農作業をしていた二人が即死し、もう一人は搬送後まもなく死亡したと記されていた。この他にも四人の方が重傷を負った。心地良い風が吹き抜ける公園に、ひっそりと建つ慰霊の標柱は、今の世の中をどう見ているだろうか。慰霊碑には児童文学者の杉みき子さんの言葉が刻まれている。「戦争のいたみをつねにおもいおこし平和を考えるよすがとするために」と。

この言葉を、戦争における人々の痛みを想像し、平和を想う心のよりどころにしなさいというメッセージとして、私は解釈し受け取った。学びを止めることなく、自分の目で確かめ、率直に感じた自分の思いを、まずは信じようと思った。

私が次に足を運んだ場所は、上越市にある「平和記念公園」である。かつての直江津捕虜収容所跡地に整備された場所だ。平和記念公園は一九九五年にできた。上越

日豪協会によると、捕虜収容所跡地での平和公園建設は、上越が初めてだったという。国内の捕虜収容所の組織はたびたび改編され、大戦期間中に開設された本所・分所・派遣所分遣所などは約一三〇ケ所に及ぶという記録もある。収容された捕虜は合計で三二四一八人に及び、終戦までに約三五〇〇人が死亡している。

「平和記念公園」と書かれた石碑には「戦争の悲劇を再び繰り返さないように、世界の平和と国際友好の大切さをみんなで語り継ぐ広場」だとある。隣接する展示館には、捕虜収容所に関する資料や、開設に携わった上越日豪協会の活動に関する資料などが展示されている。太平洋戦争開始後、直江津捕虜収容所では、オーストラリア兵を中心にイギリス、アメリカ、オランダなどの七〇〇人もの捕虜を収容した。展示館には亡くなった兵士の名前や表情までよくわかる顔写真が残されていた。苦しかった収容所生活が写真や絵、地図等で細かく記録されていた。

元捕虜ジャック・ミューディ中尉は、人間愛に満ちた多くの詩を詠んだという。戦後直江津を訪れ、友好を深める中で、「愛によって平和を」という言葉を残している。顔写真は戦後しばらくたったものだろう。柔和な表情が印象的だった。

覚真寺住職円理師は「死者に敵も味方もありゃせん」という言葉を残している。当時の国情の中で捕虜の遺骨を預かり、これを丁寧に弔い、祈りに訪れる捕虜をもてなし、捕虜の信望を集めた。元捕虜の誰もが師の人柄を慕って覚真寺を訪れたという。写真に写る表情は凛としていて、私は自分の心を見透かされてしまいそうだと感じた。

元捕虜セオ・リーさんが収容所で愛用した小さなフォークも展示されていた。食事に使っていたものとして飾られていていたものだが、そこには「奥様のジョイさんより」という文字が添えられていた。これを見て私は、収容所に居た一人ひとりに、家族があり、大切な人がいたのだということに改めて気づかされた。

壁の一角に、トニー・グリン神父という方の顔写真と言葉が残されていた。グリン神父は、戦後、奈良の教会に籍を置き、豪州との間を往復して、日本の戦争未亡人や孤児たちの援助を行ったという。戦後、グリン神父がオーストラリア元捕虜兵と直江津を訪問している。グリン神父は、戦後の反日感情が厳しい中で、豪州での日本展の開催、豪州軍人が持ち帰った日本刀の返還事業、日豪双方の各地での仏教・キリスト教合同慰霊祭など、日豪の和解を推進するために様々な活動を行った。日豪関係が厳しい時代に、両国の和解の実現に人生を捧げたという。

戦争が終わりを告げたからといって、当たり前のように平和がやってくるのではない。展示物に添えられた「忘れることはできないが、許そう」という文字が、平和を築くための努力の大切さを教えてくれているようだ。戦争の苦しみは自分の国に限ったことではないという当たり前の事実に気づき、広い視野と想像力をもって考えていくことを自分に約束した。

展示館の中には、終戦後に責任を問われた収容所職員の遺書もあった。「戦争犯罪者」を裁く極東軍事裁判の横浜軍事法廷において、捕虜の死の責任を問われて有罪となった、八名の遺書だった。誤った国策の犠牲となって罪に服し、軍人二名と警備員六名が処刑されたのである。遺書には、家族の無事と世界の平和を強く願う言葉が綴られていた。私は戦争の憎しみや悲しみは、幾重にも折り重なっていることに気づかされた。

ここから離れたところにも、戦争の悲惨さを訴えかける場所がある。「名立機雷爆発事件」のあった名立区小泊の海岸である。

ここには地蔵尊や「平和をまもる碑」が建てられている。ここに漂着した機雷によって、六十人が一瞬にして命を落としたそうだ。そこには、小学生三十六人、中学生七人、幼児は十三人もいたという。昭和二十四年三月のことだ。十五に満たない尊い命が、戦後、「戦争」で亡くなったのだ。終戦を迎えても、戦争による悲劇は終わらないことが痛いほど伝わってくる。

地蔵尊は大きな赤い頭巾をつけ、賽の河原をさまよう

子どもたちを救おうとしているようだ。日本海に背を向けるように、こちらを向いて佇んでいる地蔵尊姿は、まるで海の向こうの国々までをも背負って、戦争の悲惨さと平和の尊さを訴えているようだ。

「ああ、そうだったのか。」

私は、今頃になってようやく気づいた。今の私の生活の中に、戦争を意識させるものがないのではない。それに気付かない私がいたのだ。だから、何もしなくても、平和は永久に続くものだと錯覚していたのだ。過去からのメッセージを受け取り、過去に学ばなければ、いつ同じことが繰り返されてもおかしくないだろう。

足を運んだ先々で、私はそこにある史実から、平和を希求する勇気をもらった。何が本当なのかを、自分の目と耳と心で判断し、貪欲に求めていくことそのものに価値があるのではないだろうか。

私は、もう一度、祖母のところに行った。そして、あの葉書を見せてもらった。呆然と葉書を見つめる私に、祖母は曾祖父から聞いた話しをしてくれた。

祖母によると、まだ幼かった曾祖父は戦争には行かなかったという。長男の正栄さんは戦争に行く前、末っ子の曾祖父に、こう言ったそうだ。

「これからは、お前がこのうちの『あんちゃ』だ。」

幼い曾祖父は、食料増産のために、必死で米作りをしたそうだ。農繁期には、学校を休み、必死に働いたそうだ。だが、そんな曾祖父のもとにも、召集令状が届いた。正栄さんの戦死を伝える葉書が届いてから一年が経とうとしていた時だという。そして、戦争に行くとなった矢先に、終戦を迎えたのだという。

この話を聞いて、私は自分の生の奇跡に気付いた。もし、何かのタイミングが少しでもずれていたら、曾祖父は戦争に行ったのかもしれない。曾祖父が帰ってこなかったら、祖母はこの世にはいなかっただろう。そして、母も、私もいなかっただろう。直接的に戦争を知らなくても、この命は、確かに、命のつながりの先にあるものなのだ。

「そうか、そうだったんだ。私も、いろんないろんな偶然が積み重なって、生まれてきたんだね。」

ふとつぶやく私を見つめる祖母の表情は、何だかとてもあたたかかった。私は祖母の顔を見て、もう一度、戦争について調べることにした。

「事実を知るために足を運ぼう。人に会って直接、話を聞こう。全てを知らなくてもいいから、深く深く理解しよう。」

自分に何ができるのかと、どれだけ頭で考えていても、結局は何も始まらない。心の揺れをきっかけに、小さな行動に変えていく。その積み重ねてこそが、平和へとつながるのだと信じて、私はもう一度、「戦争」について学ぶことにした。

これまでを振り返り、手にした資料だけで、全てが分かったつもりにならないように、真っすぐに、戦争の事実に向き合いたいと思った。

正栄さんの姿を思い浮かべながら、顔も名前を知らない人へ、想像力を働かせ、メッセージを受け取りたいと思った。もう「怖い」という感情よりも、「とにかく知りたい」という気持ちが強くなっていた。

私は戦争を詳しく知っている方の生の声を聴きたいと思った。そこから様々な情報を調べる中で、戦争に関するたくさんの実物資料を保存している方がいることを知った。私はその方に連絡を取り、会いに行くことにした。

その方は、お寺の住職さんで平田真義さんという。平田さんは二十年前から、戦争に関する実物資料を五千点以上収集している。平田さんの父親は、日中戦争から太平洋戦争で激戦をかいくぐり生還したという。ビルマ戦線のインパール作戦に参加し、生還することは常識では考えられないことだという。後に資料で調べてわかったことだが、インパール作戦は多くの兵士が命を落とした戦いであった。日本軍の弾薬は尽き、飢餓に瀕している中での戦いであったらしい。そのため、肉弾攻撃を繰り返し、多数の死傷者が出たということが分かった。平田さんの父親が生き残ったということはまさに奇跡的なことなのである。

「父が生還してくれたお陰で現在の私がある。命のつ

ながりの中で生きているんだ。すべての人が命のつながり、つまり、命のバトンを持っているんだ。君だってそうだよ。」

そう語る平田さんに、私は大きくうなずいた。

平田さんは、自分が生を受けたことは、決して当たり前のことなんかではないと繰り返し語っていた。僧侶という立場から人の生死に多く関わってきたことも、現在の活動につながっているそうだ。そして何よりも、戦争を風化させないように、戦争を後世に伝えていくことは自分の使命だと感じていると語っていた。

平田さんは私に様々な実物資料を見せてくれた。そして、一言、私に言った。

「君は戦争の何が知りたい？」

空爆の怖さか、原爆の恐ろしさか、戦争の悲惨さか。改めて、戦争の何を知ろうとしているのかと自分に問うた。

ここに至るまで、資料を広げては戦争の混沌とした不明瞭さと理不尽さを感じてきたが、調べるほど何が真実かわからなくなっていた。戦争を始めたのは誰かということや、戦争責任が誰にあるかということ、誰かを擁護したり批判したりすることは、今の私にとっては、追求したいと願うところではない。ふと思い出したのは、やはり正栄さんだった。

葉書を手にした時、正栄さんは確かに生きていたのだと私は感じた。そしてその瞬間、何とも言えぬ、あたたかな感情がこみ上げてきたこと、心揺さぶられたこと、そんな瞬間を、私は探していたのかもしれない。まるで、歴史と自分がつながったような不思議な感覚、長い歴史の先に自分はいるのだという感覚を求めていたのかもしれない。その感覚は、今の自分をまるごと受け入れ、生きているということそのものに価値があるのだと、勇気づけられるものだった。

私が知りたかったのは、その当時、確かに人々は生きていたという姿である。歴史の資料に閉じ込められている人々が、確かに生きていたのだという事実なのである。

そんな私に、平田さんは子ども服やおもちゃや生活道具等を見せてくれた。奥の部屋のケースには、当時の感触そのままの実物資料が待っていた。

子どもが使っていたであろう手提げかばん。持ち手が擦り切れ錆びた金具に、愛着をもって使っていたことが伝わってくる。

小さな男の子が着ていたであろう柔らかな生地でできた寝巻。そこには兵士や戦車、鉄砲等が鮮やかに描かれている。男の子は疑うことなく、「かっこいい」と喜んでこれを着ていたのかもしれない。

色鮮やかなめんこや塗り絵。レトロな絵は何ともかわいらしく、目を細めてしまうが、そこに描かれているもののテーマは、やはり、「戦争」だった。

小中学生向けの児童雑誌『少年倶楽部』で連載されていた『のらくろ』のフィギュア、その姿はなんともユニークである。愛嬌のある表情に、軍隊の悲惨さを忘れてしまいそうで怖くなる。

小さな子どもの頭の大きさに合わせて作られているおもちゃのヘルメット。それは、日本軍のヘルメットにそっくりだ。兵器や軍用機を再現したおもちゃを手に、子どもたちはどんな気持ちで戦争ごっこをして遊んでいたのだろうか。そして、こうしたおもちゃで遊ぶ子どもの姿を、大人は誇らしく見つめていたのだろうか。

おもちゃの中には、木でできた大砲の手作りおもちゃもあった。子どもにせがまれたのだろうか。角が削れ、使い込まれた様子がうかがえる。おもちゃを撫でながら、私は小さな子が戦争をイメージして遊ぶということの恐ろしさを考えていた。

白い顔の女の子が描かれた羽子板。よく見れば、着ているものはセーラー服で、かぶっている帽子には水兵のマークが描かれているのである。男の子用のものと女の子用のものがはっきりと分けられていて、男女平等社会という思想等、まるでなかったかのように社会に消されている。

「ああ、こんなものもあるよ。」

平田さんはそう言うと、奥のケースから小さな小箱に入った二つのおもちゃを持って来てくれた。

一つは将棋だ。箱には「軍人将棋」と書かれている。かわいらしい駒に書かれているのは、軍隊の階級や地雷、スパイ等といった文字である。この駒で遊びながら、相手を倒すことや戦術を練ることを自然に学んでいたのだろうか。

もう一つの箱にはスライディングパズルが入っていた。一つ一つピースをずらして、目的のピースを枠から出すおもちゃだ。竹でできたつるりとしたピースには「蔣介石」「宋美齢」「英國」「露國」「佛國」「共産軍」等の文字やと日本国旗が描かれている。ピースを少しずつずらしながら、まさに明確な「敵」意識をもって、対象を「追い出す」というゲームである。

私はしばらくおもちゃに触れていた。広い部屋の中に、扇風機の回る音だけがする。ふと、私の脳裏に、たくさんの子どもたちの姿が浮ぶ。そして、聞こえるはずのない声が頭の中に響きわたる。

子どもに与えられていたたくさんの戦時中のおもちゃに触れ、私の心に引っかかっていた問いの一つが、砂埃のように消えていった。こんな感覚を「腑に落ちる」というのだろうか。

それは、徴兵年齢に達していない少年たちが、志願兵として続々と入隊を希望していたことだ。私と同じ歳の少年が、なぜ兵隊に憧れるのか、戦地に赴くことを志願するのか、これまで、どうしても理解できなかったことだった。自分を犠牲にしても家族を守りたいと思ったからか、国のため戦争に勝ちたいと願ったからか、熱烈な声援を受け、出征していく青年の姿に感銘を受けたからか。きっと、私が想像できるようなものは答えではないのだろう。

少年たちの憧れは、戦時下という環境において、社会で醸成された思考だったからではないだろうか。気まぐれな感情ではなく、確固たる信念からだったのではないだろうか。自分を取り巻く全てのものが戦意を掻き立てる中で、それを良しとする文化の中で、子どもたちの思考や思想は無意識のうちに形作られていったのだろう。召集令状を手に、家族や職場、近所の人々が祝いに駆けつける中において、この思考はより一層強化されていったのかもしれない。出征を祝うのぼりの文字が、私にはつらく悲しいものに見えるのは、今が戦時下ではないことの証拠だろう。

軍国主義に洗脳するためのプロパガンダの手段として、子どもが遊ぶおもちゃも利用されていたと今ではよく分かる。これは日本に限った話ではない。ドイツ人の子どもたちは、アドルフ・ヒトラーに対する狂信的信奉を植え付けられ、ボードゲームも人種的、政治的なプロパガンダの一つの方法として用いられていたという事実がある。アメリカでもスパイダーマンやミッキーマウス、ドナルドダック等がアニメーションに起用され、戦争の正当性を主張していた。そもそも、「トイ・ソルジャー」とよばれるおもちゃの兵隊は、ヨーロッパやアメリカの男の子の定番のおもちゃだった。

当時のおもちゃを黙って触る私に、

「そうか、そういうことを知りたいんだね。」

と言って、平田さんは自宅の資料室に案内してくれた。

きれいに整理された実物資料が棚一面に置かれている。平田さんが一枚一枚、ポスターフレームに入れたのだという。

戦意高揚のためのスローガンがかかれた何枚ものポスター。そこには「今ぞ全土戦場！決戦の大空へ、一億戦士となって航空機を送ろう」「造れ送れ撃て！」と書かれている。意気揚々と描かれているポスターを見ていると、確かにこの国はこの戦争に勝てるんじゃないかと錯覚してしまいそうになる。大人には、より強烈な洗脳が仕組まれていたのだと改めて考えさせられる。

そんなポスターの隣りに置かれたフレームには、身近な品物の配給切符が並べられていた。味噌、塩、醤油、砂糖、食用油、マッチ等、生活のありとあらゆるものが配給制になったのだ。粗悪な代用品も当たり前ようになり、そもそも物資不足のため、切符があっても手に入らなかったという。当時の生活がいかに苦しいものであったことを示している。

配給切符と並べられると、戦意高揚のポスターとそこ

につづられていた言葉は、なお一層虚しいものに思えてくる。

どう見ても矛盾している世の中なのに。それでも戦時中、至るところに武器や戦争に関連する絵や言葉がちりばめられ、生活のあらゆるものを通して戦争を意識づけられると、大人であっても思考や感覚は形作られていってしまうのだろうか。

戦争を煽る世論に個人の主張は消し去られ、世論自身が引っ張られる形で、その声はより大きくなっていったのではないだろうか。戦争に対する人々の思想は、言論と共に強く統制され、戦争に対して疑問を持つことすらできなかったのかもしれない。

しかし、家族や大切な仲間を失って、悲しくない人間などいるはずはない。本当の気持ちはどのようなものだったのか。

やはり私はどうしても納得がいかないのだ。人々の心の揺れを想像すれば、プロパガンダ的な宣伝による人々の洗脳にも、必ず限界はあるはずだと思えてならないのだ。きっと矛盾に気づいていた人もいたのではないかと思えてならないのだ。心に疑念を抱いていた人もいたのではないかと無責任な望みを託してしまうのだ。私は、その矛盾や疑念を、言葉に出すことが許されなかったことが、一番の障壁だったのではないかと考える。気持ちを語り合うことさえも許されない中では、洗脳から抜け出すことは難しいのかもしれない。一人一人の中に沸き上がる感情と、それをどうにもできない現状の狭間で、なお一層苦しむ中人々の切なさに胸が苦しくなる。

かつて人々を洗脳していたその実物資料は、今の私たちに重大なメッセージを投げかける。それは、洗脳の怖さや戦争の愚かさだけではなく、極限の情報下では、何が正しいのかという判断が困難になり、人間が人間らしくいることがいかに難しいかということである。

二十一世紀を生きている私たちは、やはり過去とは無関係ではない。どれだけ長い時間が過ぎようとも、史実の積み重ねの、その先に、今の私たちが息をしているのである。

目の前に無いから実感が持てないというのは、きっと言い訳だ。目の前にあるものの背景を想像できたら、そして、そこにないものを想像できたら、きっと未来への道が見えてくるのではないだろうか。何かに惑わされたり、ごまかされたりしないために、自分の目や耳や手で、丁寧に確認していくことが、「平和のバトン」を受け取るということなのではないかと思う。そして、行動の積み重ねが平和を築くために欠かせないのだと強く思う。

もう、私は知らないふりをしないと決めた。

もう現実から目を逸らさない。

今を生きる私たちには、未来への責任がある。「平和のバトン」は「命のバトン」。

あなたにも、このバトンが見えていますか。

中学生の部

佳作

ウズラと暮らせば

堺市立三国丘中学校　三年
石川　照葉

ウズラを飼い始めて3年になる。長いようで短くもあるが、一つ屋根の下で共に暮らす家族と言える。

ウズラはキジ科の鳥だ。キジ科の鳥の中では最も体が小さく、羽を除けばその体の大きさは大人の握りこぶし程。卵はよくスーパーで売られている、あの小さな卵だ。体は丸みを帯びていて、尾は短い。オスは全体が赤褐色だが、メスは全体が淡褐色である。胸の柄もオスは赤みがかっているがメスは白っぽい。

また、実際に飼ってみて分かったことだが、オスとメスで目の印象が異なっている。さらに、メスに対してオスの羽根は艶が良く、ふわふわとしている。体長は雌雄であまり変わりないが、いくらかメスの方が大きく感じられる。そのため、オスメスの区別は容易にできる。

ウズラは日本でも家禽（家畜として飼育される鳥）として存在している。その歴史は長く、日本で唯一家畜、家禽化した生きものだ。が、野生のウズラも存在するという。野生のウズラは世界各地に生息し、なんと渡りをする。

渡りとは、越冬地と繁殖地との間を定まった季節に往復することだ。ウズラはキジ科の中で唯一、長距離の渡りを行う。これには大変驚いた。なぜなら、飼育下のウズラは基本的には飛ぶことのない鳥として扱われているからだ。確かに、我が家のウズラも長距離は飛ばず、また飛ぶことを移動手段として使用していないように見える。ただ、何かに驚いた場合などは、2m程高く跳び上がり、さらに3から4m程の距離を移動できる。

つまり、「飛ぶ」というよりも「跳ぶ」ことは大変多い。私の失敗から言えば、ケージ等で飼う際は驚いて跳び上がったウズラが天井に頭を打ちつけ、出血する可能性がある。そのため、注意が必要だ。

さて、我が家のウズラ達について話そう。彼らは私が小学6年生の夏に生まれた。二〇一八年のことだ。当時、私は夏休みの自由研究のテーマが見つからず、困っていた。過去には、「鳥の巣の研究」や「鳥の羽根の研究」といったテーマで調査した。鳥の巣や落ちている羽根からその地域に生息する鳥について考える、という内容である（実際にこの研究で、普段観察することのないような鳥もその地域に生息していることが分かった）。

しかし、小学校6年間の集大成として、これらを上回るようなテーマが見つからず、刻々と時だけが過ぎていった。

夏休みも半ばが過ぎようとしていた時、父に相談し、打ち出した案が、「ウズラの卵の孵化」だった。父の支援のもと、私は30個のウズラの有精卵を手に入れた。

そもそも卵には有精卵と無精卵があり、いわゆるスーパーで売られている卵が無精卵だ。こちらの卵は温めたところでヒナは孵らない。だが、温めるといってもそう簡単にいかない。そのことを実践してみて分かった。

有精卵はインターネットで父に注文してもらったのだが、その際に孵卵器も頼んでもらった。当初の予定では、孵卵器が卵よりも先に届くはずだったが、先に我が家に届いたのは卵だった。どうも父は安価な孵卵器を注文したらしく、海外の船便で届くため遅くなったらしい。孵卵器が無くては卵が温められない。放っておけば腐ってしまうだろう。

考えた末、自由研究ということも兼ねて、自分で孵卵器を作ることにした。名付けて「自作孵卵器」だ。鳥の卵を温めるのにも最適な温度がある。37℃程だ。そしてその温度を保たねばならない。おそらく親鳥の体温に近づけるためだろう。

自作孵卵器を作る他にも、家のボイラー室に放り込むという手段があった。だが、計ってみると最高温度が34・2℃、最低温度が27・0℃で既定値に届かず、断念した。

自作孵卵器はインターネットで調べたことをもとに作成した。縦35㎝、横55㎝程の大きめの発泡スチロールの箱の中に小型の電気カーペットを敷き、さらに保湿用の水と温度計を入れた。

極めて単純な物で、いささか不安だった。そのため自作孵卵器には25個の卵を入れ、4個の卵は注文した孵卵器を待つことにした（30個の中で配達中に1個割れていた）。

卵を孵化させるには、温度管理が非常に大切だ。しかし、急遽製作した自作孵卵器は温度管理が難しかった。蓋の付いた発泡スチロールの箱の中に入れていたのだが、蓋を閉じたままでは温度が42℃まで上がり、開けたままでは32℃まで下がってしまう。繰り返し様子を見て、調整するほかなかった。

さらに、卵は転卵といって、卵を傾けさせる必要があった。転卵は黄身が卵の殻の内側に付着しないようにするためで、自然界では、親鳥が動くことによって行われている。これを毎日、人の手で行うのだ。

温めること16日。8月26日のこと。ウズラの卵は約20日程で孵化するらしく、そろそろだろうと期待が弾けんばかりに膨らんでいた。箱の中の様子を覗くと、2個の卵に5㎜程度の穴が開いており、くちばしと思われるものが確認できた。

ヒナには卵歯と呼ばれる小さな突起がくちばしの先端に付いており、これを使って殻を破る。この卵歯はカメなどにも見られ、成長する過程で無くなってしまうという。

卵歯のおかげでヒナは卵から自力で出られるのだが、私は不安でしかたなかった。このまま放っておいては死んでしまうのではないか。「啐啄」という言葉があるように、外から多少つつく程ならば導く方が良いのではないか。善は急げだ。私はピンセットを使って穴の開いた1つの卵の殻を剥き始めた。

殻の中には薄い膜が張られ、顔をしかめたくなるような嫌な臭いがした。生まれたばかりのヒナの全身は濡れており、既に羽毛が生えていたが、べったりと体にくっ付いている。目は開いておらず、気怠げだった。体の色は黄色と黒色で、卵の大きさとそう変わらなかった。

そして、5時間後には濡れていた体も乾き、元気そうに歩き回り出した。しかし、1羽目のヒナは何故か臀部に卵の殻が取れず、体に付いたままだった。父に頼んでハサミで切り取り、無事撤去してもらった。おそらくカラザと呼ばれる卵の黄身の両端にあるひも状のもので繋がっていたのだろう。

名前は、最初に誕生したので、家族には不評だったが、「うー」にした。その頃はまだオスかメスか分からない。ヒナの時は、まるで同じ姿だからだ。そのため、両親も1つ上の兄も2つ下の妹もそれぞれ、「うー助」だの「うーちゃん」だの好き勝手に呼んでいる。

さらに5時間程して、2羽目も殻を剥いて生まれてきた。「うー」と同様、体が濡れており、もう辺りは暗く寒そうだった。2羽目は「うー」に対し少しばかり大きかった。2羽目のウズラは「うー」に続いて「ずー」と名付けた。

夜はかつて飼っていたハムスターのケージがあったため、その中に入れた。「ずー」はまだ濡れていたため、布に包んだカイロをケージの中に入れた。布に包んだのは、低温やけど防止のためである。しかし、温めたところで、寝てはくれなかった。夜中に「ピーピー」と鳴いてはとてもうるさく、1時間程手で温めてやった（ほとんど母が行ったため、私にこの記憶は皆無に等しい）。母は両方のてのひらでウズラを包み込み、子守歌すら歌っていたらしい。

翌日の8月27日。殻にひびが入ってから1時間程時間を要し、3羽目が生まれた。やはり体は濡れていたが、比較的元気そうだった。名前は2羽に続き、「らー」と名付けた。その後、残りの22個の卵を観察したが、生まれる様子は確認できなかった。そもそも3羽が生まれた

ことで、その飼育に夢中になり、孵卵器の管理を怠ってしまったせいもある。家の廊下に置いていたため、兄妹が箱につまづいたりしていたこともある。

結局、注文した孵卵器のためにとより分けておいた4個の卵も孵卵器で温めたが、変化はなかった。孵卵器に入れるまでに時間がかかってしまったのが原因だろう。時間や外部からの衝撃など、些細な差でも生まれてくる命には多大な影響を与えることを改めて痛感した。また、生まれさせたのは自分であり、責任と飼い主としての自覚を持とうと決心した。

数日後。私は3羽に白い筋のようなものが出てきていることに気が付いた。よく観察してみると生えかけの羽根である。小さな箒のような形をしており、数日にして生えてくるものなのかと驚いた。ウズラのヒナは生まれてすぐに巣を離れる離巣性があるらしいが、そのためだろうか。

さらに1ヶ月後の9月末、3羽の体重は誕生時に15g程だったのに対し、10倍近くの重さになった。生き物の成長は本当にあっという間だ。羽根も生え揃い、時折羽ばたくようになった。もう立派な成鳥である。

成長するにつれて、3羽の違いは明確になった。まず、オスとメスの違いが現れてきた。差は歴然である。「うー」と「ずー」はオス、「らー」はメスだった。

ウズラのオスには、クロアカ腺と呼ばれるものがある。これはなかなか存在感のあるもので、肛門付近に付いている赤い袋のようなでっぱりだ。クロアカ腺はオスにしかないそうで春や秋（繁殖期と思われる）になると普段よりも赤く腫れていると感じる。また、オスに対してメスの方が、体重が50g程重い。卵を産むためだろう。ヒナの時には気が付かなかったことが段々と分かってきた。

しかし彼らが成長するとともに課題も出てきた。揉め事が絶えないのである。ヒナの時は3羽を同じケージで問題なかったが、しだいに難しくなった。オス2羽が激しい喧嘩をしたり、オスがメスである「らー」を追い回し、乗っかろうとして羽根を毟ったりするのだ。かなり激しく、手加減なくだ。

そこで、広い小屋で飼うことにした。父に頼んでウサギ小屋を買ってもらったのだ。大きさは横111cm、奥行き43cm、高さ73cm。そして、これまで室内飼いをしていたのだが、マンションのベランダに置いてそこで飼うことにした。この小屋は2階建てで、1階は「うー」、2階は「ずー」と「らー」の部屋とした。「ずー」はそれまで「らー」を追いかけず、つがいにしておけば彼は落ち着いていた。

だが、ウズラのオスはけたたましく鳴くのである。メスは「キュッ」と鳴くのに対してオスは「ウピピュウ」と鳴く。さらに、メスが見当たらないとなおさらだ。この鳴き声は遠くまでよく通る。騒音として近隣住民に訴えられそうな程で、頭が痛かった。

10月6日、「らー」が初めて卵を産んだ。卵は想像していたよりはるかに小さかったがおそらく有精卵だ。翌日から毎日1個ずつ産むようになった。私はそれらの卵を今度は市販の孵卵器で温めてみることにした。無事に孵ってくれるといい。

10月25日、孵卵器に入れていた4個の卵のうち1個から普通の大きさよりもずっと小さなヒナが生まれた。これまで見たのとは違って自らエサや水を口にしない。そのため、スポイトで水をやり、エサは水と練って与えた。そのせいか、スポイトを親鳥だと思い、スポイトを見ると後をついてくる。小さくて一生懸命に生きる姿はいじらしい。

しかし、たったの3日で死んでしまった。普段よりも静かで、奇妙に思って様子を覗くと、そのヒナは足を伸ばしたまま硬直していた。

その翌日、別の卵からもヒナのくちばしが見えていた。だが、こちらが手伝って生まれさせたために、ヒナには腹部に卵黄がまだ残っており、数時間後に死んでしまった。卵黄は卵の中でヒナが成長するにつれて小さくなり、殻を破って出るころは無くなるはずのものだ。孵化させるのが早すぎた。

10月29日、3羽目のヒナが生まれた。前日から声はしていたものの、前回の反省から下手に殻を剥かず、そのままにして置いた。10月にもなると卵の中の温度と部屋の温度に大差が生じる。そのため、ヒナにとっては負担になるのではないだろうか。丸1日かけて、3羽目は無事に孵化した。たとえ小さな命でも育てあげることは大変だ。もっと言えば、それを自然界の親鳥は過酷な環境の中で平然とやってのけている。自分のふがいなさが身に染みた。

3羽目は「ちー」と名付けた。1羽だと寂しいようで、人の姿が見えなくなるとよく鳴いた。そのため、「ちー」は他3羽に比べて懐いているようだった。

さて、他3羽はというと、ベランダのウサギ小屋の中で必ずしも穏便に過ごしているわけではなかった。何しろオスが鳴き叫ぶのだ。特に1羽になった「うー」があまりにうるさく、3羽を一緒にする、という案が家族の中から持ち上がった。何となく嫌な予感はしていたが、1階と2階をつなげ、行き来ができるようにした。そもそも構造上、2階の床の1部をスロープに変えることができる。結果は想像を絶する程の苛烈さを極めていた。

「うー」が他2羽に流血するまで追い詰められていたのだ。彼の後頭部は羽毛がまるで抜かれ、皮膚まで剥がされ、筋肉とおぼしきものがあらわになっていた。目を狙ってだろうか、左目は酷く腫れていて歪な形をしていた。ケガを負った「うー」は普段からは想像もできない程で休むばかりだった。

翌日、彼の状態はより悪化した。左目がついには閉じたまま開かない。さらには顔全体が腫れ上がり、聴力も怪しかった。このまま治らず、死んでしまうかもしれない。不安が波のように押し寄せてきた。

しかし、杞憂で、3日後には、彼は以前と変わらずけたたましく鳴くようになった。全快とまではいかないが、閉じていた目は開き、元気そうに見えた。本当に生き物の治癒力は凄まじい。だが、私も手は尽した。毎日傷口を消毒し、化膿しないよう、人間用の化膿止めのテラマイシンを塗った。どうも後頭部は毛根ごと持っていかれたらしく、その後も羽毛は一切生えなかった。今も彼は落ち武者のような姿のままだ。

さらに1ヶ月程経て、ヒナだった「ちー」は他3羽とさして変わらない大きさとなった。クロアカ腺はなく、胸にまだら模様がある。面持ちも「らー」に酷似していることから、メスだと分かった。これは我が家にとって大変有難いことである。なぜならメスをオスの「うー」のそばに置いておけば、少しは静かになるはずだからだ。

そして冬が来た。ベランダの小屋はビニールの温室の中に入れ、保温に努めた。その中ではさすがに0℃を下回ることはなかった。関門海峡のおかげで、この辺りは比較的暖かいのだ。

二〇一九年3月15日の朝。私はあろうことか父にウズラの世話を任せきりにし、ほうけていた。小学6年生の最後の時が近づき、自分のことで頭がいっぱいになっていたともいえる。父が「床がえ」(下に敷いている新聞紙を取り換え、水とエサを新しいものに換える作業)をしている時、2羽のウズラが開いていた小屋の扉を抜け出し、飛び去った。この時まで私はウズラが飛んで逃げるとは考えていなかった。2羽は宙に飛び出し、マンションの14階から飛び降りた(落ちた、というほうが正しいのかもしれない)。「ちー」が逃げ出し、その後を「うー」が追った形でベランダの手すりを越えていった。

あっと思い、下を覗いた時にはもう遅かった。そこにウズラの姿はなく、車が行き来する県道や住宅の屋根だけが見えていた。慌てて1階に降り、周辺をしばらく捜したが、見つからなかった。その日は平日で、私は学校に行かなければならない。無論私は遅刻した。妹もだ。

両親は捜してくれると言ったものの、私は授業中ずっと上の空だった。あの高さから落ちて無事なのだろうか。車にはねられてはいないだろうか。カラスがネコに食べられてしまわないだろうか。

帰宅すると、母が安堵の表情で迎えてくれた。「うー」が見つかったらしい。しかし、彼は決して無事ではなく、鳴き声をあげるたびに血を吐いていた。落ちた時にどこ

か打ったのだろうか。そのわりには溌剌としていて意表をつかれた。

母はいわく、近所の川のそばの草むらで鳴き叫んでいたらしい。姿は見えなかったが鳴き声のおかげで発見できたが、「ちー」はメスだ。「うー」の様には鳴いてはくれない。「うー」がその日のうちに見つかったのに対し、どんなに捜しても彼女は見つからなかった。夜になり、捜索は一時打ち切った。

翌朝。私は塾の日で家を出るしかなかった。しかし、塾から帰宅すると、嬉しい知らせを受けた。「ちー」がマンションの敷地内で見つかったのだ。

母が言うには、ちょうど我が家のベランダの下にあたる所にいたという。もちろん、昨日はいなかった。なんと「ちー」は自分で元の場所に戻ってきたのだ。生き物には帰巣本能があると聞く。鳥類はまさにそうだろう。

さらに野生のウズラは渡りをするのだ。例えば磁場を感じとり、同じ場所に戻ってくることができるのかもしれない。家禽化されたウズラにその本能が残っているかは分からない。しかし、仮定にすぎないが、ウズラにも帰巣本能があり、それが今でも残っていると考えられた。逃げた当初は焦りと不安でいっぱいだったが、とても興味深い出来事だった。

そして二〇一九年のある日、母があることに気が付いた。家禽であるウズラを飼う際には、役所に申請して登録してもらう必要があるのではないかと。そしてワクチンの予防接種の必要があるそうだ。ウズラにもワクチンがあるとは驚いた。早急に市役所に連絡し登録を済ませた。獣医師と市役所の人が来てくれたそうだ。ウズラはペットではなく、家禽であり、その飼い主も養鶉家と同様に扱われるそうだ。

この日はニューカッスル病の予防接種で、年に2回行う必要があるとのこと。飼育小屋が大きければ、水に溶かしたワクチンを全体に散布するそうだが、飲ませることも有効らしく、こちらの方法をとった。薬を溶かした水を与えるだけだ。それは透明で、匂いなどもなく、一見ただの水のようだった。加えて、小屋を清潔に保ち、野鳥との接触を避けることで、ウズラを守ることになると自覚した。ワクチンは3回程家に来てもらい、4羽に与えた。

この間に私は中学生になった。朝早く家を出て、北九州市にある中学校に通う。家の近くのバス停でバスを待つ時もオスのけたたましい鳴き声は私の耳に届いた。二〇二〇年、中学1年生の終わりにはコロナ禍が訪れ、生活は一変した。自粛生活によって、ペットの需要が増えたと聞く。それに伴い、飼育放棄も増加したそうだ。生き物を飼うには責任が必要だ。忘れてはならないことだろう。

春になり、我が家は山口県下関市から大阪へと引っ越すことになった。前々から話にあがっていたこととはいえ、中3になるとともに、通い慣れた学校を転校するのは胸が苦しかった。

ここで問題になったのがウズラの輸送方法である。ウズラは鳴くので公共交通機関での移動は難しく、かといって車の揺れに何時間も耐えさせることもつらい。

この打開策として挙がったのが、フェリーで行く方法だ。フェリーにはペット用の空間がある。さらに、北九州（新門司）から大阪（泉大津）までなら、乗船時間もそう長くはない。これは丁度いい。ウズラはフェリーで私達と一緒に移動することに決めた。

そうしているうちに引っ越す当日がやってきた。正直来て欲しくはなかったが、致し方ない。ウズラ達をそれぞれ個別の小さなケージに入れ、車に乗り込んだ。ここから港に向かい、乗船する。4羽を連れて歩くのは想像していたよりも大変で、彼らは何よりエサをまき散らす。また、船内のペットルームへは乗船してから出航するまでのわずかな時間しか入室することができない。私達家族は4羽を1人1羽ずつ抱えて船室へと急いだ。

ペットルームに入るとそこはロッカールームのようで、それぞれの生き物をロッカーの中に入れる仕組みになっていた。隣の部屋には小さめの犬がいた。先に到着していた父がいうには、もともと小型犬は同室者だった

そうだ。ウズラが怖がってはいけないからと、犬の飼い主がわざわざ隣の部屋へ移して下さったらしい。とても嬉しく、またお会いできたらいいと思った。そうして私は住み慣れた土地を後にした。

新しい家は広い庭が付いており、魅力的だった。ウズラ小屋は庭に置いたのだが、何と庭にはネコやカラス、イタチなどが来た。ネコやイタチはウズラを食べかねない。また、野鳥はウイルスなどを持っているため、接触は禁物だ。魅力的な庭は危険な場所だった。

室内飼いをしたかったが、ウズラは常に大量のフンをし、エサを撒き散らす。そしてにおいもある。仕方なく庭で飼うことにしたが、夜行性のネコやイタチが近づけないように夜は大きなベニヤ板で覆った。

野鳥に対しては、ウズラのエサを小屋の奥に置き、小屋の外にエサが撒き散らされないようにした。季節も初夏に向かう時だ。心地良い風をウズラ達も楽しんでくれればいい。

それから数週間後。「らー」の様子がおかしいことに気が付いた。季節も移り変わり、だいぶ気温も上昇しているにもかかわらず、体全体を膨らましている。羽毛を膨らましているのは寒いか、体調が悪い時の様子だ。これはずっと前からのことで、既に知ってはいる。しかし、羽毛を膨らませるのはてっきり寒いためだと思い込んでいた。これまで、食欲もあったため、気にしていなかった。だが、今の「らー」はどうも肩で息をしている感じがした。苦しいのだろうか。そのわりには食欲があり、よくエサを食べている。獣医に近いうちに行くことを考えたが、自分自身も慌ただしく、今は様子を見ることにした。ただ、彼女を室内には移しておいた。

しかし、状況は良くなるどころか、悪化していく。未だ食欲はあるものの、動きが鈍く、尻を床に着けて過ごしていた。私はようやく「らー」が病気であることを確信し、父は私に〝卵秘〟の可能性があると言った。

卵秘とは、適切に卵が体外に排出されず、卵管に詰ることだ。手術で取り除くが、放っておけば炎症をおこし、

最悪の場合死に至る。「らー」が卵を産まなくなって1年1ヶ月程たっていた。このままではいけない。そう思い、私は母と妹と一緒に「らー」を連れて動物病院へと向かった。

動物病院の待ち合い室には、コロナ禍でも多種多様な生き物がいた。動物病院は初めてで周りが気になったが、「らー」の容態が第一だ。とはいえ、周りにエサをこぼす勢いで食べ続けている。正直「らー」はエサを食べている瞬間が1番元気そうで、私も安心した。

そうしているうちに「らー」の番がやってきて、眼鏡をかけた若い獣医師が診察室へと案内してくれた。まず「らー」の体重を測定した。約170g程で以前より20g程増えている。卵秘のせいだろうか。体重を測る際、「らー」は透明で蓋の付いた、まるで虫籠のようなケースに入れられた。穴が一切ないように見え、苦しくはないのかと焦ったが、「らー」はあまり気に止めてはいないようだった。

先生は「らー」を見るなり、とても苦しそうだと言った。彼女は座り込み、肩で息をしている。きっとつらいのだろう。先生はまず病気の可能性を考えて、フン便の検査を提案した。綿棒を細く長く伸ばしたような白い棒で、ケージの中のフンを少量拾いあげると、奥へ戻っていった。

さらに、卵秘の可能性を考え、レントゲンを薦めた。その際、先生は検査中に命を落とす可能性があるが、それでも良いかと尋ねてきた。一瞬不安がよぎったが、きっとあらかじめ聞かれるものなのだと考え直し、「お願いします」と答えた。調べない限り、何も分からないままで終わってしまうだろう。助かる道があるのならばそちらを選びたい。

色々と思考を巡らせているうちに、先生が「らー」を連れて戻ってきた。「らー」は無事だった。再び椅子につくと先生はパソコンにレントゲン写真を映し出した。レントゲン写真を見るのは久しぶりで、ましてや鳥のレントゲン写真を見るのは初めてだった。目が釘づけである。

先生は「らー」の写真の臀部を指差した。そこにはうっすらとしただ円形のものがあり、これが卵の可能性があると言う。本来、卵秘であればもっとはっきりと濃く写り、卵の形をしているそうだ。だが、これは薄く、輪郭がぼやっとしている。そのため、卵の殻は完全にはできていない、未完成の卵ではないか、という結論に至った。

治療としては、薬によるカルシウムの摂取（カルシウムの不足で卵が未完成らしい）を行い卵の排出を待つ、というものだ。この提案を聞いて私は少し驚いた。なぜなら、てっきり手術で取り除くのだと思っていたからだ。既に「らー」は体力がもはや無く、手術は難しいという。

それから「らー」は酸素室にしばらくの間入り、点滴を受けた。酸素室に入ると、普段より楽になる。また、鳥の点滴は首の後方の背中に打ち込み、よく漏れ出したりもするそうだ。

こうした治療の後、私達の手元に戻ってきた「らー」は心無しかいつもより元気そうで、エサをがっついている。ほっとして、行きはタクシーを使ったが、帰りはバスを使用した。バスに鳥を連れこんでいいのかと不安だったが、運転手に確認するとケージに入れておけば問題ないそうだ。「らー」の運賃もかからず、最寄のバス停まで無事にたどり着けた。「らー」を運んでいると、様々な人に視線を向けられた。ウズラが珍しいのだろうか。いや、きっと鳥を抱えているだけで十分人目につく。

無事に家に着いたものの、またもや問題が発生した。「らー」が薬を飲まないのだ。先生は薬に糖分も混ぜてあるから、気に入るかもしれないと言っていた。が、「らー」はどうも嫌いらしい。どろっとした液体の薬は、ごまだれのような色で、おいしそうではない。しかし、飲んでもらわないと困る。

そこで私はウズラの大好きなミルワームに薬を浸して与える、という方法を思いついた。さっそく試す。きちんと薬がついているのかは分からなかったが、「らー」は薬つきミルワームを食べた。まるでごまだれに浸したミルワームをだ。

その後もこの方法で薬を与えた。これで元気になってくれれば一番いいが、そううまくはいかない。日に日に動くことが減り、定位置に座り込むようになった。容態は悪化している。明らかだった。肩で息をし、瞼は脱水症状でしぼみ、弱々しかった。以前から羽根はぼさぼさになっていたものの、さらに艶が消えていた。おそらくもう羽づくろいをする余力もないのだろう。

点滴をしてもらえば少しは元気になるかもしれない。そう思い、再び動物病院へ足を運んだ。「らー」は前回より10g程体重が増えていた。食欲は減退し、食べる量は減っているのに対し、増えている。おかしい。先生はまた卵が作られているのではないかと言った。

そこでレントゲンを再び撮ってもらったが、あいかわらず映ったものは薄く、ぼんやりとしていた。薬の投与の仕方が甘かったのだろうか。だが、捕まえて無理にくちばしを開かせるのも、小さいゆえうまくできない。

その日は酸素室に入り、点滴をしてもらって帰った。もう駄目かもしれない、そんな考えが私の中で膨くれあがっていった。

それから「らー」は段々と大好物であるミルワームですらも食べる量が減っていった。これでは薬も与えられない。無理強いしてつらい思いをさせるのは得策ではないだろう。私は薬を与えるのをあきらめてしまった。無理に薬を飲ませたくない、少しでも楽にしていて欲しい。薬を飲ませるべきか、私が彼女にできる最善の行動とは何か、私には分からなかった。

その1週間後、「らー」をもう一度病院へ連れて行った。エサにはあまり手をつけようとせず、しゃがみ込んでいる彼女を見るのは胸が苦しかった。病院の診察室に入ると担当の先生が変わっていた。先生は「らー」を見ると、肝臓に問題があるかもしれない、と言う。あたり前のことだが、獣医師も人によって見解が異なることに少し驚く。肝臓に問題がある可能性により、以前までもらっていた薬とは違い、薬も灰色がかった黒ごまだれ色に変わっていた。さらにどろっとしており、今までの2滴から4滴と、倍の量を投与せねばならないのだ。私は

頭を抱えた。おそらく「らー」はこの薬を飲まない。弱りきった彼女をつかむのはとても気が引ける。家に帰ったものの、衰弱した「らー」は薬を飲む気を見せなかった。

それから彼女は小屋の周りをうろうろと徘徊するようになった。母はその姿を見ると、死に場所を探しているのだと悲しげに言った。もう動く力すら残っていないだろうに、歩き回る姿は見ていられなかった。

毎朝「らー」の様子を見に行くのがつらくなった。いつか動かなくなるのが怖かった。そして2日から3日後、「らー」は血の混じった便をしていた。血便をしていてはもう助からない、という考えが押し寄せてくる。なぜなら、以前飼っていたハムスターが血便をした際、数日もたたずに死んでしまったためだ。しかし、私にできることは何ひとつなく、せめて空のペットボトルにお湯を詰めて温かくし、祈ることぐらいだった。

そんな5月21日のことだ。共にいたオスの「うー」が早朝からけたたましく鳴いていた。朝から鳴くのはいつものことだが、4時半頃でその鳴き方が何やら尋常ではなかった。甲高く鳴き続け、叫び続けている。

「うー」の声がとても悲痛さを含んでいる。きっと「らー」が動かなくなったのだろう。布団から起きあがりたくない。彼女を見たくない。そう思った。しかし、現実は変わらなかった。嫌な想像は見事にあたってしまった。私は彼女に何もしてやれなかった。何もできなかった自分に対する怒りとくやしさが込み上げてくる。

「らー」の目は半分開いて、足は伸びきっており、うつぶせで固まった姿はとても安らかとは言えない。きっと「うー」には分かったのだろう、もう「らー」は死んでしまって二度と動かないことを。見るに耐えない姿に私は自分の未熟さを責めることしかできなかった。

生まれさせたからには責任を持つという決意は何だったのだろう。おそらく私は分かっていた。「らー」の体調が悪くなり始めたのはこの5月に始まったことではないと。

「らー」は冬の間もずっと羽根を膨らませていた。あれは寒かっただけでない、既に体調不良をおこしていたのだろう。もとよりウズラは自然界では常に天敵に狙われている生き物だ。そういった生物は自分のケガや病気を必死で隠そうとする。天敵に狙われやすくなるのを避けるためだ。だから、飼い主が気付いてやらないといけない。

しかし私は気付くのが遅かった。既に重症化していては助かるものも助からない。動物の病気は分かりにくいうえに、これといった特効薬も数少ないだろう。常に観察し、早期発見と早期治療が大切だ。だが、私は過信して、放ってしまった。できることは、残されたウズラを育てあげること。それが今後の私にかせられた課題だ。

「らー」を庭のクスノキの根元に埋めて数週間後。彼女がいなくなって小屋はもの寂しくなった。ひとりになった「うー」がメスを捜してけたたましく鳴く。本格的に梅雨に入り雨の日ばかりが続いていた。

その日の夜もバケツをひっくり返したような激しい雨が降っていた。夜が明けて外のウズラの様子を見に行くと、小屋の1階はぐっしょりと濡れていて、砂浴び用の容器に水が張っていた。そして「ちー」の様子が普段と異なっていた。部屋の隅で小さくなっている。雨で体が冷えて体調を崩したのだろうか。

母が「ちー」を室内に入れた。それから布を与えたり、お湯の入ったペットボトルを置いたりして温めた。どうにか調子が回復するのを待つ。しかし、一向に良くなる兆しは見えず、不安が募っていった。

その日の夜、私は塾に行かねばならなかった。夜7時から3時間程「ちー」を見ることができない。授業が終わって塾に迎えに来た母は、私に「明日は早起きしなくちゃね」と言った。その時私は意味が分からなかった。何も予定はないはずだ。何かあるのだろうか。

家に帰って、「ちー」の様子を見にいくと、「ちー」はいなかった。代わりに小さな紙袋がある。私はやっと理解した。「ちー」は死んでしまったのだ。母はきっと彼女を埋めるために早起きをする必要があると言ったのだ

ろう。

まただ。また死なせてしまった。心臓がうるさい。目頭が熱くなる。吐くような苦しさが込み上げてくる。私は紙袋から目を逸らした。「らー」が死んでしまって3週間もたたないうちの出来事だった。

翌朝私は母の言いつけどおり早くに起きた。いつもよりも憂鬱で体が重かった。シャベルを探すのも億劫で、その辺にあった底の浅い容器で穴を掘った。死んだウズラは足が伸びきっていて、いつも感じている大きさよりも大きい。そのため、穴を掘るのはあまり楽ではなかった。それから「ちー」を穴の中に入れた。布でくるんであるものの、隙間からは見慣れた淡褐色の羽根が見えた。それを覆い隠すようにたくさんの花を入れる。この庭の花だ。ツツジが丁度咲いていて、鮮やかだった。土をかけて、最後に大きな石を置いた。何かに掘り返されてはたまらない。私はさらに上に花を添えるとその場を後にした。

立ち止まっている暇はない。これからが大変だ。メスを失ったオス達はきっと相当うるさいだろう。この問題の処置も講じなければならない。やることは山のようにある。私は強く目をこすった。

案の定、その日から「うー」と「ずー」はわめき始めた。近所迷惑である。外で飼っていたが、日中はあまりにうるさい。そのため、耐えかねた母が室内に入れようとした際、再び「うー」が逃げる、という出来事があったらしい。家の庭の壁を軽々と飛び越え、近所の家の庭にいたのを鳴き声を聞きつけ、無事に見つかったという。後で母から聞いた。もう室内飼いにして良いのではないか。そもそも外の小屋飼いはとんでもなく面倒臭い。効率が悪く、無駄な動きが多い。そこで室内飼いに切り換えることにした。

しかし、ここでも問題が発生した。なんとウズラの次に母がわめき始めたのだ。ウズラと比べてもさして差はない程のレベルだろう。母が言うには、オス達があまりにうるさく、ノイローゼになりかけているらしい。2羽は互いに見つめあって黙りこくる時もあるが、ふとした瞬間に我を思い出し、鳴き叫ぶのだ。しかもどうやら2羽の間には激しいライバル意識があるようで、1羽が鳴くともう1羽も呼応するように鳴く。母にはこれが耐えられないのだろう。私は普段家にいないため気持ちは分からないが、想像はできる。

そして母は父と私に提案をした。単身赴任をしている紀伊半島の南端暮らしの父に1羽を連れていってもらってはどうかと。父の職場は多くの生き物に囲まれていて、既に我が家のカメはそこへ移転済である。多少ウズラが1羽増えたところで差支えはないようにも思える。しかもこより環境が良さそうだ。しかし私は反対だった。これ以上ウズラが家からいなくなるのは耐え難い。

だが、母の家庭内権力は絶大で、2羽のうち「ずー」が連れていかれることとなった。気は進まなかったが、彼に元ハムスターのケージとミルワーム、エサを持たせてやった。きっと向こうの方が暖かく、元気でいられるはずだ。それに父は私より生き物に詳しいため、心配する必要はない。母も少しは負担が軽減されるはずだ。それから1羽になってしまった「うー」との生活が始まった。

ウズラのオスは1羽になってもうるさかった。どうにか黙らせねば。機嫌取りにミルワームを与えたり、鳴こうとすれば邪魔をしたりした。が、あまり効果は期待できなかった。

ある日、「うー」がとある物の前に居座り、黙るようになったのである。それは鏡だ。今まで私のお手製ウズラ人形やウズラの写真には全く反応を示さなかったというのに。動くものでないと駄目なのだろうか。それとも生き物なりに、存在や気配が感じとれるのだろうか。何にせよ、ウズラは鏡があれば静かになる、ということが分かった。これは我が家にとって大発見だ。まさに革命的。3年間悩まされていた問題が今解決したのだ。

そうして「うー」は鏡の前で日々自分の姿を見て過ごすようになった。これがなかなか興味深く、まるで彼はウズラのメスを見ているかのように動いている。

ウズラは一夫一妻で一生を過ごし、繁殖すると示唆されている（飼育下でのつがいの絆は弱いらしいが）。我が家はこれまでオスとメスの一組のつがいにしており、そうすれば落ちついて、静かにしていた。

また、室内飼いでは日光のあたりが悪く、病気になりかねない。私は1日1回は日光にあてるよう努めた。ここでも鏡の効果を改めて知ることができた。鏡から引き離すととたんに鳴き出す。さらに、ケージから出してやると一目散に鏡に突進するかのごとく向かうのである。

鏡を自身の伴侶にするのはどうかと思うが、彼は映っている姿が自分だとは一切思っていないらしい。

生物の実験の中にミラーテストと呼ばれるものがあるが、「うー」は不合格だろう。このテストは自己認識の有無を確かめるものだ（妥当性については意見が分かれている）。まず鏡を使わなければ見ることのできない体の部位に目印をつける。そして鏡を見ることで、その印に触れたり調べたりすれば、自己認識があるとされる。このテストで成功した生き物はヒトやバンドウイルカ、アジアゾウ、チンパンジーなどだ。鳥類ではカササギが成功したと言われている。実は、夏休みの自由研究で、私はこのミラーテストをウズラ4羽で試そうとしたが失敗に終わっている。

長い間鏡の前にいるにもかかわらず、駆け寄って鏡の中のウズラに夢中になっている「うー」には自己認識は無さそうだ。他にも「うー」と暮らす中で気が付いたことは山のようにある。

1つは赤色が非常に嫌いなことだ。赤や赤紫色を目にすると逃げ出し、しばらくは隅で縮こまる。赤は警告色、警戒色と呼ばれ、他の生き物に対する警告の役目を担っているという。そのため、私がワインレッドの服を着ていると酷く避けられてしまう。さらに、警戒色の物体が動いているとなおさら嫌らしい。個人的に「うー」に避けられるのは心が痛いが、人に馴れるつもりはなさそうだ。

2つ目は細長いものを避けることだ。動いていなければ気には留めないが、それを人が持つなどして動きだすと、そのとたん逃げ出す。私はおそらくヘビに似ているからだと考えている。「うー」はヘビを見たことはないが、本能的に危険を感じているのだと思う（臆測にすぎないが）。人間もヘビを避ける傾向にあり、ヘビを見たことがない幼児でも複数の写真の中からヘビだけを素早く見つけだすそうだ。

細長いといっても太さや長さで反応に違いが見られた。極端に細かったり太かったりすると気にならず、また、短すぎても同じだった。しかし、母の赤い、直径1㎝、長さ60㎝程の自転車のキーチェーンは畏怖の対象で、やはりヘビに近い太さだ。きっと、天敵は本能で分かるのだろう。「うー」には申し訳ないが、いつか本物のヘビで実験してみたい。

他にも、「うー」には生き物の気配が分かるらしい。例えば、近くに人がいないと鳴き声をあげ、存在を確認する、といった行動がよく見られる。返事をしてやったり、姿を見せたりすると落ち着くようだ。鳥は群れる生き物だけに一人は嫌なのかもしれない。

生き物は言葉を持っていないが、気配に対してかなり敏感なのではないだろうか。家禽となった今でも、野生を忘れてはいないのだろう。

また、全くといっていい程懐いていない彼だが、なんと人がハイハイをするとついて来る。正直なぜついてくるのかは分からない。が、きっとこの四つんばいの体勢に何かを感じ、懐いてくれているのだと信じたい。基本的につかまれたり触れられたりするのを嫌がる彼が自発的に動いてくれるのは有難い。

ウズラは常に私に課題や疑問を投げかけてくる。そのたびに私は思考を巡らす。きっと新たな発見があるだろう。そして、私は彼らに対し、できることを尽くしたい。それは決して多くはない。私はケガの手当てもできないし、病気の治療もできない。飼い主としての責任と覚悟。これらがあってこそ胸を張れる飼い主だろう。私はたとえ持っていたとしても、とても小さなものだ。今、この手に抱えている命は小さくともずっと重い。彼らが彼らの命を精一杯全うしようとしている、その重みだ。私は

改めて気付くことができた。

ここに記したことは話の一片にすぎない。されども、これまでのウズラを巡る波乱万丈の出来事は私に様々なものを残してくれた。私はこれからもウズラと共に歩んでいく。小さな覚悟と自信を持って。

参考文献

動物大百科〈全20巻〉
第7巻鳥類Ⅰ
C・M・パリンズ／A・L・A・ミドルトン
株式会社　平凡社

日本動物大百科〈全11巻〉
第4巻鳥類Ⅱ
樋口広芳／森岡弘之／山岸哲
株式会社　平凡社

ウィキペディア
https://jp.m.wikipedia.org

中学生の部
選考委員特別賞
あさのあつこ賞

あたりまえとは

飯塚市立筑穂中学校　三年
國丸　祐司

これを読んでいるあなたは「あたりまえ」について考えたことはあるだろうか。これを書いている私は、最近この「あたりまえ」という言葉についてよく考えている。

この言葉について考えるようになったのは去年の十月の終わりあと数週間で修学旅行というときの出来事だった。私は自分の部屋で友達とゲームをしていた。学校から帰って部活もしていない私にとってこの流れは、「あたりまえ」になっていた。しかし、この日は私にとって「あたりまえ」ではないことが起こった。裏口のほうから「ドタン！」と何かが倒れるような音がした。私はその音のことが気になり裏口へと向かった。得体の知れない音に私は少しの不安がありながらも裏口のドアノブに手をかけてドアを開けた。そこには何かが倒れていてそれがなんなのか私はすぐに分かった。自分の母親だった。私はその倒れている母を見ても一瞬なにが自分の目の前で起きているのか分からなかった。私は、この状況からすぐにでも逃げてしまいたいと思ってしまった。でもその「逃げてしまいたい」という感情よりも目の前で倒れている母を一刻も早く助けてあげたいという感情のほうが、私の中では大きかった。そして私は近所の家のドアに歩きづらいサンダルのことなど気にすることなく走った。そして必死に助けを求めた。助けを求めた近所の人たちは、すぐに来てくれ救急車を呼んでくれた。救急車が来るまでの間、私は手足の震えが止まらなかった。で

も震えを気にしてそこに止まっているひまはなかった。すぐに母のタンスの中をかき分けて保険証を探した。そして私が保険証を見つけるのと同時に救急車が来てくれた。ドアの鍵も部屋の電気も消さずにすべてを放置して私は救急車に乗り込んだ。救急車に乗るまでは忘れかけていた大きな不安と恐怖がまた私のことを襲ってきた。よくドラマで見る心臓の鼓動を数字と波で表すような機械が自分の座っている席のすぐ横においてあった。確かに母にその機械は繋っているはずなのに、心臓の波は動いていなかった。そのすぐ横に大きい数字で0が見えた。私はそれを見て不安が絶望のほうへと変わっていくのがはっきりと分かった。もうこの時点で私のいつもの「あたりまえ」はそこには少しも残っていなかった。その数分後、救急車が病院へ着いた。すでに数人の医師らしき人たちが待ってくれていた。そして母が運ばれるのを見ながら私は、看護師さんに必要な住所や電話番号を書く用紙をもらい記入を始めた。いつもはすらすら書けるはずの名前や住所もなぜか手が思うように動かせなかった。そしてその紙をなんとか書き終わり看護師さんに待合室まで案内をしてもらった。そこでイスに座ると信じられないほどの感情が押し寄せてきた。そこに一人でいたのは数分だったのだが、とても長い時間そこにいるように感じられた。気づいたら父と兄弟から病院に着いたと連絡がきていた。そして家族が待合室に着いたときどこか安心した自分がいた。そして家族にどうしてこうなったのか何があったのかを聞かれた。私はなぜか落ち着いて話すことができた。そのあと母の治療を担当してくれる医師の方が来てくれた。母は肺の血管がつまり心臓に血液が送られなくなる病気だということが分かった。今も心臓と肺は動いていないが、この時期流行していた新型コロナウイルス感染症の治療にも使われている体外式膜型人工肺（ＥＣＭＯ）が母に使われ機械でなんとか生命を繋いでいるという状況だと説明を受けた。衝撃的だった。朝まで元気だった母が今、機械で生命を保っているということをそのときは受けとめきれなかった。家族に事情を説明したとき妙に落ち着いていたのは、あまりのことに自分が受け入れられなかったのではないかと今では思っている。説明を聞いたあと、集中治療室で治療を受けている母に会いにいった。ついさっきまで笑っていた母がたくさんの管に繋がれ寝ている。見るのが辛かった。更に最悪なことに新型コロナウイルス感染症の影響であまり長い時間は同じ空間にいることさえ許されなかった。仕方のないことだとしてもどこからか怒りのようなものがこみ上げてくるのを感じた。その後は今日は帰って大丈夫と言われて帰った。車の中で私は疲れはあまり感じていなかったが寝てしまった。これが私の「あたりまえ」がなくなってしまった日だった。

次の日は、一日特に変化がなかった。母の心臓は動いていないし昨日と状況は変わらなかった。その日の夜、夜ご飯は父の作ったカツ丼と母が作っていた残り物のカボチャの煮物だった。私はその煮物を食べることがなぜかできなかった。この煮物を食べてしまうと母がもう帰ってこないような気がして食べられなかった。その日の夜、久しぶりに自分の部屋で泣いた。ここで初めてしっかりと自分の心が受けとめたのだと分かった。次の週から、私は修学旅行の予定だった。しかし、私はこのまま修学旅行に行ってしまっていいのか迷ってしまった。この状態のまま行ってしまって自分は修学旅行を笑って楽しむことができるのか。自信がなかった。もし自分が修学旅行に行っている間に母になにかあれば後悔と自責の念に押しつぶされてしまうのではないかと考えれば考えるほど不安が大きくなっていった。そんな時、自分を救ってくれたのは父の一言だった。

「お母さんは、大丈夫だから行ってこい。」

と言ってくれた。大丈夫なんて確証はないが私はとても勇気づけられた。私はあらためて父の強さと優しさを実感した。次の週私は修学旅行に行くことができた。旅行中も不安と心配はあったが友達と話していると心が落ち着いて修学旅行を楽しむことができた。そして今まで誰にも母の事を話していなかったが初めて友達に話すことができた。友達は静かに聞いてくれ私は心が楽になった。旅行先の宮島で母に頼まれていたキーホルダーを買い私

の修学旅行は幕を閉じた。旅行から帰っても母の状態は変わっていなかった。帰ってきてから母は集中治療室を技け普通の病室に移された。私たち家族は毎日、母の様子を見に病院へ足を運んだ。母は普通の人より血圧が低くなっていると聞いた。私は病院へ行くたびその数字を見るのが嫌だった。しかし、自分たちが母の近くにいると不思議なことにほんのわずかではあったが血圧が高くなっていた。自分は血圧の数字を見るのが嫌だったが母のそばを離れたくなかった。普通の病室に移ってからは、小人数で母の職場の方たちが会いに来てくれた。そのときも母の血圧は少し上がっていた。そのまま母の意識が戻ってほしいと私は願っていた。そんな生活が続き私にとってこのような生活が「あたりまえ」になりかけていたとき、変化が起こった。その日は晴れていて温かい一日だった。自分はその日が日曜日だったので家族全員で母の病院にいた。次の日から平日ということもあり私たちは四時すぎに自宅へと帰り夕食を食べた。夜の九時か十時をすぎたころ父の携帯が鳴った。病院からだった。母の血圧が下がってきているので急いで来てほしいとのことだった。私たちは、父が飲酒していたこともあり兄の小さい車に乗りこみ病院へ向かった。病院に着くと早足で病室に向かった。母の病室に着いたとき私たちは嫌でも知らされる現実を突きつけられた。母が亡くなってしまった。その瞬間涙があふれてきた。自分でもこれ以上ないほどの涙がでてきた。それと同時に後悔が自分に押しよせてきた。なぜあのときもっと早く母の異変に気づけなかったのかなぜあのとき母の最後の手料理を食べなかったのか、そんな後悔しても意味がないのは分かっていた。それでも目の前の光景は変わらない変えられないその現実を受け入れるしかなかった。そのあとは自分はなにも頭に入ってこずなにも考えられなかった。その次の日の夕方、母のお通夜が行われた。ここで初めて知った人もいただろう。その人たちの気持ちがなんとなく分かる気がした。

これが私の人生で経験した最も辛い出来事の話です。それと同時に人として成長した出来事であるとも思っています。これを読んでいるあなたにとっての「あたりまえ」は私とけっして同じではないと思います。ですが、今の「あたりまえ」は決してずっと続くわけではなくいつか必ず変化します。それは決して悪い変化ではなく良い変化もあると思います。その変化で後悔やときには絶望することもあると思います。だから考えてほしいんです。自分の「あたりまえ」がどのようなものなのか。それが私がこれを読んでいるあなたに伝えられる思いの限界です。では最後にもう一度聞きます。あなたは「あたりまえ」について考えたことはありますか。

中学生の部
選考委員特別賞
最相葉月賞

転校を経験して

（ペンネーム）小山　公也

ぼくは、四年生に上がるタイミングで小学校を転校した。三年生までの学校は、全校生徒が八十人くらいで、僕の同級生は十四人だった。男子四人、女子十人、男女の差もなく、保育園から一緒の友達も多く、みんなの仲が良い学校だ。田舎の学校だから自然もいっぱいで、低学年の頃はよく男子四人でダンゴムシやバッタやカナヘビを探して集め、教室でカナヘビやカブトムシを飼ったりもした。三年生になれば校庭で高学年に混ざってサッカーもできた。全部の先生の名前も分かるし、全員ぼくを覚えて声をかけてくれる学校だった。ケンカがあってもすぐに仲直りできる平和な学校。事件といってもサッカーをしていてボールが顔面に当ってしまう程度の事だった。ぼくにはそれが当たり前の生活で、それが当たり前の小学校だと思っていた。

ぼくが転校することになった理由は、兄の中学校進学だった。前住んでいたところから兄が電車で通うと往復三時間らしい。ならば、と母と兄と妹と四人で兄の中学校の近くに引っ越し、ぼくも転校することになった。転校する前、母は何度もぼくの気持ちや考えを聞いてくれた。友達がたくさんできることや一生の友達ができるかも・・・といったことを言われたのを覚えている。車で一時間だし、頻繁に帰って来られるし、転校しても良いかなと思いすごく悩んだけど「いいよ」と言った。

四年生の四月。ぼくは新しい学校へ一学期の始業式から登校した。前の学校での転校生は三年間のうちに三人いた。転校生は人気者だし、みんなで大事にしたし、全校のみんながすぐ友達になって、笑って過ごすところを見てきた。きっとぼくも、新しい小学校でその子と同じようになる！と思って自己紹介を考えていた。でも、想像していた流れとは全く違って、初日から初めてのことだらけで落ち着けなかった。新しい学校はどの学年も三クラスあって、全校で六百人。前の学校生徒より一学年の人数の方が多かった。担任の先生もその年に転任してきた先生で、転校生のぼくに寄り添ってくれる先生がいなくて、心臓がドキドキした。始業式、体育館の広さは変わらないものの、その場所に集まる人数は思っていた以上に多くてびっくりした。これが六百人っていう人数かぁと圧倒された。その時ステージに立たされ挨拶した転校生は五人。六百人もの大勢の人を前に立ったのも話すのも初めてで、緊張しすぎて自分が何を言っているか分からなくなった。

それまで十四人で使っていた教室も、三十三人が端から端までぎっしり使う狭い教室に変わった。とにかくニコニコして過ごしたけど、始業式の日に家に帰って母に話したことは、「あのね、おかしいんだよ。始業式なのに四年生のみんなは校長先生のお話を聞かないでずっとおしゃべりしてたよ。」「あのね。すごいよ。今度の学校じゃ、教室でもボールを投げたり蹴ったりしてもいいんだよ。」だったらしい。母はそのことを「初めて行って帰ってきた日にそう言っていたね。」と何度も振り返って言った。その時は僕の言っていることが信じられなかったらしい。

僕にとっては、新しい学校はマンモス校。なれるまでいろいろなことがあった。前の学校は自由時間に学年を越えてサッカーしていたぼくは、六年生の遊びに混ぜてもらおうとしたら、「あっち行け」と突き放された。「なんでダメなんだよ。」と答えただけなのに、その六年生は僕の担任に生意気だと言いに来て、僕は注意された。大きい学校は校庭が狭いから当番制で使用するルールを知らなかった。前の学校は年上も年下も仲が良くて、掃

除も縦割り班で取り組んでいたし、登山や芋煮会も縦割り班で取り組んでいた。学年を越えて仲良くなるってことが当たり前ではないことを段々と知った。注意されるたびに「でも今までは・・・」と自分の気持ちを伝えてみたけど「前の学校とは違うよ。ここは大きい学校だから早く慣れて。」と担任の先生に説得されたけど、悔しい気持ちになった。受け入れてもらえないように思ったし、前みたいに先生を頼ることもできないんだと感じた。僕は不器用だし、自分の気持ちをうまく言葉で伝えられないタイプだった。そのせいもあってか、自分が先生に嫌われていると思うようになった。

授業が始まっても、前の学校にはなかったことが毎日毎日起こっていった。授業が始まっても、ずっと多くの人がおしゃべりをしている。授業中なのにふざけて四足歩行をして後ろのドアから教室を抜け出ていく人もいた。僕が何か一つ失敗すれば「バカだな」「おっつー」「ざまーみろ」と、つぶやく声を聞こえるように言う友達もいた。仲良くなったと思って遊んでいると、僕が何か悪いことをしたのかわからない内に、蹴られたり、殴られたりすることもあった。クラブ活動の集まりが終わり、階段を降りようとしたら突き飛ばされ、上からおどり場まで、転げ落ちた時もあった。腰や足を強く打ち、数人の友達が保健室に連れて行ってくれた。僕が何度「絶対誰かに突き飛ばされた」といっても、「大人数で降りていたから誰かとぶつかっちゃったんだと思うよ。」と答えられ、信じてもらえなかったときも悔しかった。次の日に、担任の先生から電話が来て、母が心配のあまり泣いていたのも覚えている。

図工でつくる作品も、途中で誰かに壊されるから仕上がることはなかった。色々なことがあるけど、少し時間を置くと元に戻る。教室の中で起こっていることはいじめではないけど、前の学校にはなかったことがたくさんあって、ぼくの関心は授業ではなく、そっちに向いていってしまい、勉強も集中できず、何が正しいのか分からなくなった。

五年生になってクラス替えがあった。担任の先生も変わった。僕と同じように小さい学校から来た先生で、僕の気持ちを分かってくれる先生だった。それでも、五年生にあがっても色々あった。授業中に「ゲームしてぇ！」と叫ぶ友達。女子の間でも、もめ事が多くなった。気に入らないことがあると椅子を持ち上げ暴れる友達もいた。僕の言葉に怒って、授業中もずっとぼくのそばに立って文句や悪口で怒りをぶつけられたこともあった。毎日のように、授業を抜け出して体育館や図書館に隠れる友達もいた。休み時間後の授業は教室に戻ってくるのが遅いから遅れて始まる。カブトムシを教室で飼うことになり、僕が霧吹きを持っていくと、教室中に振りまいてびしょびしょにする友達がいて、持ち帰ることになった。前の学校のように教室で飼育ができなかった。それでも一生懸命に声をかけてくれる先生がいて、五年生を終えた。三学期はコロナのこともあり、しっかり挨拶できないまま、その担任の先生は別の学校へ行った。

六年生になり、ついに学級崩壊する。担任も変わり、コロナで授業参観も行事もない一学期だったが、その間に僕のクラスはどんどんひどくなっていた。授業の挨拶に誰も立たず、先生が話している間もみんなおしゃべりを続けている。教科書や授業に使う笛や鍵盤ハーモニカはクラスの半分は持ってこなくなった。授業の道具がなくても多数持ってきてなければどうってことがなかった。授業中なのにゴミを捨てに立ち歩くのも普通。掃除もほとんどしない。まじめにやると笑われてしまう。給食の準備も遊びながらやるからなかなか進まない。担任の男の先生をあだ名で叫ぶ人もいたし、先生が距離を置くようにと体に触れると「セクハラ！」と叫ぶ女子もいた。ゲームを深夜までして朝に起きれず毎日三時間目から登校する友達もいた。それが当たり前だから何も思わない。この年、女の子が転校してきて、僕と同じにならないかと気にかけていたら、ある朝、机にひやかされるいたずら書きをされたこともある。その時いつも授業を抜け出す友達が、その机のいたずら書きを消してくれた。そんな風に、僕から見れば、いろいろ問題はおこるけど、友達の良いところも知っているから、心から嫌いになれ

なかった。

テレビで見る学級崩壊が、自分のクラスで起きていた。母から見れば、僕も問題を起こしているし、多くの人に迷惑をかけていると、毎日毎日怒られたり泣かれたりした。けれど、間に挟まっている僕には苦しいだけだった。みんな立たないのに、自分だけ立つことはできないし、正しいことが分からない。みんながおしゃべりをしていれば、そっちのほうが楽しいに決まっている。前の学校の授業みたいに先生とやりとりする授業ではないから、ただ聞いているのはつまらない、みんながやっているおしゃべりやお絵描きをしてたほうがラクになった。宿題だって出さない人が多数いる・・・出すのも面倒、なら周りに合わせて提出もしない。体育の時間、マット運動するより、みんながやっている友達とじゃれ合う遊びをしていたほうが楽しい・・・。そんな風にクラスが崩れていった。担任の先生の声は聞こうとしないし、届かない。母から注意されるのも苦しくなると、ぼくは「お兄ちゃんのせいだ！お兄ちゃんのせいで転校して、おれだって大変なの分かるか！」と泣きながら言い返したこともある。そのときは、兄も母も泣いていた。学校がおかしいのは分かっているけれど、どうやったら抜け出せるのか、分からなかった。

普通の授業がまったくできなくなり、二学期の修学旅行の説明会の日、体育館で僕のクラスだけが残り、教育委員会の先生から親子で注意を受けた。たくさんの話し合いもされたらしい。その後、担任の先生は変わり、授業には常に三～四人の先生が入るようになった。算数や国語、書写もクラスを二つのグループに分かれてするようになった。親が来ていてもみんなの態度は全く変わらない時もある。母が授業支援に来た時、絵具道具が床に散らかり、おしゃべりがとまらなく、紙粘土が投げ飛ばされたりした図工の時間、「もう無理、限界」と母は言って泣きながら帰っていったこともある。気持ちが分からなくないけど、それがいつもの僕のクラスだった。新しい担任の先生は、僕たちができなくなっていた小さなことをクラス目標にして取り組んだ。一年生でもできるような「授業の挨拶の時三十秒以内に全員が立つ」といった当たり前のことが目標だった。掃除の時間、やらないのが当たり前だったから、三学期後半に机を数人が運び出した時は先生がカメラを取りに走ったくらいだった。

そんな僕の生活に母は六年生になった時から、中学校を変えよう！と兄と同じ中学校の受験をすすめた。僕は勉強が好きなほうではない。進んで勉強するタイプでもない。大半は嫌々とやっていたけど、自分の中にも前の学校の時のような学校生活に戻りたいという気持ちがあって頑張った。中学生になって、平和で落ち着いた友達と楽しく過ごせている。トラブルが起きない。学校が平和ってすごく幸せだなぁと思う。ただ勉強についていくのが大変で、僕の悩みはそれに変わった。母の悩みもそれにすっかり変わった。

小学校の時のみんなも中学校に進んでから変わった。と聞いている。この三年間で経験したことは、いつか役にたつ日が来るかもしれないよと母や祖母には言われている。でも、まだどんな時に役にたつんだろうかとピンとこない。ただ、やっぱりみんな友達で、一緒に苦しい時間を過ごした仲間だと思う。何があんなクラスにするんだろうと僕は思い出す。僕自身、今の中学校の先生には絶対しない態度をしていたのも確かだ。

小学校の卒業式の日、寂しさや悲しさなどの感じは全くしなかった。電報の中に、前の学校の三年生の先生から僕だけあてに一通あった。「全校八十人の学校から六百人を超える学校に転校し戸惑うことが多かったでしょう。三年間の様々な経験は心も体も大きく成長してくれたはずです。中学校生活では新しい友達・勉強や部活が待っています！自分の力を信じて、無限の可能性に挑戦していってください！中学校生活での新しい発見・出会い・夢や仲間を大切にしていってください。応援しています！」というのであった。転校する前に、「あなたには良いところがいっぱいあるよ！流されちゃダメだよ！ちゃんと自分を持って頑張るんだよ！」と声をかけてくれた大好きな先生からだった。辛い時に何度かメールを

くれたこともあった。その電報が卒業式で一番うれしいことだった。

ぼくは、もめ事もケンカも争いも好きではない。負けず嫌いでもない。どちらかというと面倒くさがりで忘れ物も多くて準備が苦手で段取りも悪い。テレビでいう「やる気スイッチ」が自分でもどこにあるのか分からない。でも今は、良い友達や先輩に囲まれ、前の学校みたいにそんな僕に声をかけてくれる先生がいっぱいいる。だから、これからは、母にも、先生たちにも迷惑をかけないで成長したい。

中学生の部
選考委員特別賞
リリー・フランキー賞

かか

上越教育大学附属中学校　一年
林　翠恋

私が人の命を大切に考え始めたのは、今から三年程前の、月が静かに輝く四月の夜でした。

小学二年生の夏、いつもと変わらずに、

「今日の晩ご飯のメニューは何かな～？」と考え、ワクワクしながら家に帰ると、いつも笑顔で出迎えてくれるかか（母）の姿が、少し元気がなく、具合が悪そうに見えました。かかはいつも元気で、風邪もあまりひかない人だったので、私は少し心配になりました。

どうして具合が悪いのかが気になった私は、かかに気を遣ってその訳を、忙しそうに晩ご飯を作る、ばばに聞いてみました。ばばが言うには、

「会社が暑すぎて、熱中症になったんだよ」

と言うので、初めて「熱中症」というものを身の回りに感じ、意味も分からずドキドキしていました。

でも、そのドキドキは、かかの姿を見ると「心配」に変わっていきました。

かかのいつもの明るい声は、少し薄暗く、具合が悪そうな顔をしており、体もだるそうにしていました。その日は家族みんな、かかのことを心配そうに見ていて、私はとても不安でした。なので寝る前には神様に、

「かかの具合が、良くなりますように」

と、人生で初めて心からお祈りをしました。

でも、何日経ってもかかの具合は良くなりません。心配した家族は、かかに病院に行くことを勧めました。

後日病院に行くと、原因は分かりませんが、風邪だと診断されたそうです。その時のかかの顔は、少し不安そうで、雲がかかっているかの様でした。

でも私はただの風邪だと知り、前までの重い不安は軽くなり、一安心しました。

それからまた何日か経ち、前から楽しみにしていた、かかの妹である、おばちゃんの住む神奈川に行く日になりました。

でもかかは、何日も前にかかった風邪なのに、良くなったり悪くなったりを繰り返し、なかなか元気にはなりません。出発する一時間前には、

「かかだるくて…行くの無理かも…」

と言ってきました。でも私は、前から楽しみにしていた、せっかくの神奈川旅行なので、どうしても行きたかったのです。

どうしても行きたかった私は、かかには申し訳ないけど、

「行ってみたら?気分が変わるかもよ」

と、行くのを説得させるような言葉を言い、かかを何とか神奈川へ行く気にさせました。まだ小さかった私は、何とか旅行に行けることになったので、とても嬉しかったです。

でも大きくなって考えてみると、かかはとても辛かったのに我慢して、私のわがままに付き合ってくれたので、自分の思いやりの心の無さに気が付きました。

私の住んでいる新潟から神奈川までは、ととの車で四時間ほどかかるので、夜十二時頃に出発しました。私は、夜に車でお出かけをするのがドキドキして、とても楽しみです。それは、途中のサービスエリアで食べるおやつが特別に感じて、美味しいからです。

サービスエリアに到着すると、かか、とと、弟、私の四人で手をつなぎながら、サービスエリアをゆっくりと歩きお散歩しました。

まだ三時の空は薄暗く、夏なのに少し冷んやりとした空気です。でもこうして、家族と手をつないで歩いていると、心が温かくなり、久しぶりにかかの優しく包み込むような笑顔が見れたので、小さな幸せを感じました。

サービスエリアを一周して、売店の中に入ると、そこには色々な物が売られていて、中でも私の目に留まったのは、「チョコチップメロンパン」です。私はメロンパンが大好きなので、これを買ってもらうと、かかが

「本当にメロンパン好きだね〜」

と言ったので、なんだか褒められているような気分になり、何だか嬉しくなりました。

そしてまた車で移動し、朝六時くらいに、おばちゃんの住んでいるアパートに着きました。そのアパートに来るのは久しぶりなので、私は大はしゃぎです。

具合の悪いかかも、自分の妹に会えたのが嬉しいのか、私と思じくらいはしゃいでいました。こんなに喜ぶかかの顔が見られたので、来てみて正解だったんじゃないかと思います。

神奈川では遊園地に行ったり、大きなショッピングモールに行けて、家族でとても楽しい時間を過ごせました。

かかも具合が悪いような様子でもなかったので、気分が変わって本当に風邪も治ったんじゃないかと、希望の光も見えてきました。

しかし、二日ぐらいしてから新潟に帰ると、良くなっていたはずのかかの風邪が悪化して、また病院に行くことになりました。でも何度も病院に行っても、かかの風邪は良くなる気配はありません。なので、今まで行っていた病院ではなく、市内でも大きな病院で検査することになりました。

検査当日、かかはばばと一緒に病院に行きました。その時の私は、

「どうせまた、ただの風邪だって言われるよ」

と、とても軽い気持ちでいました。

かかが病院で検査している間、とと、弟、私の三人で海に行くことになりました。久しぶりの海なので、私と弟は大はしゃぎ。

でも…ととだけは違いました。その時のととは、少し何かを心配するような顔をしていて、いつものととでは

なかったです。

お昼ご飯を食べ、少し遊んでいると、ばばから電話がかかってきました。その電話は、「かかが入院する」という驚きの内容でした。

でも、夢中になって海で遊んでいる私と弟は、かかを心配するそぶりもなく、

「え～、まだ遊びた～い」

と、駄々をこねていました。ですが、ととがとても不安そうな顔をして、

「もうやめようよ。かかのところに行こ？」

と言うので、まだ遊び足りないですが、かかのいる病院に、行くことにしました。

病院に着いてからは、ととはお医者さんからかかの病気について、別室で説明を聞いていました。その頃私と弟は、海で遊び疲れたので、休憩室の椅子でお昼寝をしていました。

それから数時間経つと、ととが戻ってきました。そして、とても真剣な顔をして、私達に二人にかかの病気について話し始めました。「よく聞くんだよ。かかはね、「白血病」っていう病気になって、これから入院することになりました」

それを聞いた私は、「白血病がどんな病気なのか」、「どれくらいかかは入院するのか」、頭の整理が追いつかず、ととに沢山質問してしまいました。

ですが、ともかかのことで、まだやることがあったので、私達にはあまり多くは話さず、どこかへ行ってしまいました。

その時私達のそばには、不安そうな顔をしているじじとばばがいましたが、私はかかとととが同時にいなくなってしまったので、今にも泣き出しそうな程、心細くなりました。

それからは、じじとばばに連れられ家に帰りました。家に帰っても、これからのかかがいない生活がどんな感じなのか、不安で頭がいっぱいです。

家には電気がついているはずなのに、暗い雰囲気で、厚い雲がかかっているかのようです。まさか海に行った日が、かかに毎日会えるのが最後だなんて、思ってもいませんでした。

この日から、かかは病院で入院し「白血病」と戦うことになりました。私はかかに毎日会えないのでとても寂しいですが、早くかかの病気が治ることを願って、心の底からかかを応援しました。

夏休みが終わり、学校が始まると、いつもはかかがやってくれていたことが今度はととがやらなければいけないので、朝からバタバタでした。私の髪の毛もこれからはととが結ぶので、最初はヘタクソすぎて、たくさん文句を言ってしまいました。でも、私のわがままも優しく受け止めて、「どうすれば上手く結べるのか」とたくさん練習してくれました。

すると、練習を重ねていくうちに、上手に結ぶことができるようになり、他の子のお父さんはできないことが、ととにはできるので、自慢のととになりました。

ととは、会社の帰りや、休みの日にかかの病院に行っているので、あまり休みが無く、いつも大変そうでした。でもかかだけでなく、私達の遊びにも本気で付き合ってくれるので、本当に優しい人だと、私は思います。

離れた場所にいるかかとは、交換日記をすることになり、直接会えない分、そこで伝えたいことを伝えます。

私は学校での出来事や、かかへの励ましの言葉を書いたり、絵も描いてあげました。かかは、私が書いたことへの返事や、可愛いキャラクターの絵なんかも描いてくれて、私は毎回読むのが楽しみでした。

それでもやっぱりかかは、私達に会えなくて寂しいので、夜に

「かかおやすみ～。元気になってね！」

と言って動画を撮り、それをかかの携帯に送ってあげていました。それを見たかかは、私達から元気をもらい、笑顔になっていると、ととから聞きました。

かかが笑顔になってくれるのなら、私はいくらでも励ましの動画を送ってあげたくなりました。

かかが白血病になり、二ケ月ほど経った十月に、久しぶりにかかに会えることになりました。私はそれが本当

に嬉しくて、ワクワクが止まりません。ですが会ってみると、二ケ月前のかかとは全然違って、とても疲れているように、私は見えました。

でも会えたことが嬉しくて、嬉しくてしょうがないので、今までのハグでは足りないから、いつもよりも長めにハグをしていました。ですが強く抱きしめると折れそうなほど、かかは痩せていました。

かかと会える時間は決まっていて、そう長くはありません。でもたくさん話したりして、久しぶりに家族四人がそろったので、前の日常に戻ったみたいで幸せでした。帰る時間になると名残惜しいですが、また会う約束をして、かかは自分の病室に戻って行きました。

それからかかは、今までよりも強い薬を使った抗がん剤治療になり、だんだんかかの髪の毛は抜けていきました。交換日記にも、その治療が辛いと時々書いてありました。

でもかかは、負けないで治療を続けていき、翌年の四月には、初めての外泊許可がおりました。それを聞いた私は嬉しくてしょうがなくなり、その日が待ちきれませんでした。

かかが家に帰って来る土曜日の朝早くに私達は、かかを迎えに病院に行きました。土曜日の病院は、中には誰もいないので、とても静かで変な感じです。休憩室でかかが帰るのを待っていると、泊まるための荷物を持ったかかがやって来ました。久しぶりに一緒に帰れるので、かかも喜んでいます。

家では、家族でゆったりとした時間を過ごすことができ、とても幸せです。でも、かかは食べられる物が限られていて、なかなか一緒の物を食べられません。でも病院のご飯よりも美味しいと喜んでいたので良かったです。

そしてお風呂では、久しぶりにかかの裸を見ました。すると、胸のあたりに管が数本つながれています。私は驚きのあまり

「えっ！痛くないの!?」

と大声で聞いてしまいました。でもかかは、

「今は痛くないよ」

と言っていたので、かかの治療の頑張りを知りました。

夜は久しぶりに、四人で川の字になって寝ました。私はかかと一緒に寝られることが嬉しくて、かかと話してばかりいました。

でもこの時間が案外一番楽しかったです。

次の日になると、今日で外泊は最後。この楽しい時間がいつまでも続けば良いのに…でもどんどん時間は過ぎていき、病院に戻る時間になりました。

まだ一緒にいたい気持ちは山々ですが、早く良くなるように応援の言葉をかけて、かかを病室まで見送りました。

「また一緒に暮らせますように…」

かかが入院して約一年という月日が経ちました。私の予想では、もう退院しているはずなのに、かかの病気はなかなか良くなりません。

でも骨髄移植と言って、健康な人から血を作る細胞を分けてもらう、ドナーの人が見つかりました。それは何と、妹であるおばちゃんだったのです。これでやっと移植ができる。

でも移植は、もっと大きな病院でなければできない治療で、お金もたくさん必要です。でもかかの白血病が治るのを信じて、大きな病院で移植することに決めました。

移る時には病院まで送り、私達の元気パワーを分けてあげました。かかは少し不安そうでしたが、白血病に負けないように、強い気持ちで病院の中に入って行きました。

私はこの移植手術が成功するように、毎日祈っていました。

今までは休みの日にお見舞いに来ていたととですが、これからはかかの白血病が治るまで会社に休みをもらい、毎日二時間かけて病院に通うようになりました。なのでかかは毎日ととに会えるようになったので、嬉しかったでしょう。

骨髄移植は治療がとても大変ですが、かかは頑張って耐えていました。そのおかげで、健康な血がかかの体の

中に入ってきて、落ちつかせることができました。
そこまでは順調に進んでいたのですが、移植の副作用で、かかの体はとても弱っています。なので他の病気が体中に侵入してきてしまいました。
普通の人ならすぐに治せるはずの風邪でも、かかにはそれを、自力で治すことはできなくなっていました。
その時の私は、それがどういう意味なのか理解していませんでした。ただただ治ってほしい、それだけを毎日願っています。
かかが白血病で入院し始めてから約二年。私は小学四年生になりました。
新学期が始まって数日経ったある朝、かかのいる病院からとに、電話がかかってきました。その電話の内容は、
「かかの具合が良くない」
とのことです。その電話を聞いてすぐに病院に行く準備をはじめました。
私はかかに何があったのかは詳しく聞かされていないので、よくは分かりませんでしたが、嫌な予感がして、ただ事ではないと感じました。
でも私と弟はいつもと変わらずに学校に登校して行きました。
お昼休みに友達と遊んでいると、担任の先生が私のところに来て、
「家族で誰か入院している人いる?」
と聞いてきたので、私が
「お母さんが入院してる…」
と言うと
「おじいちゃんがこれから迎えに来るから」
と先生が言うので、朝の嫌な予感は的中し、かかに何かあったのだと、すぐに分かりました。
私は急いで制服に着がえると、保健室で待つことになりました。先に来ていた弟は、何が起きているのか分かっておらず、ただただ静かに椅子に座っていました。
それから五分ぐらいすると、じじが私達を迎えに来ました。じじの顔は何かを悟ったような、暗い顔をしています。
学校を早退し、車で向かった場所は、じじの実家です。そこでは、じじのお母さんが待っていて、私達をソファーに座らせました。
するとじじがいきなり、真剣な顔をして、
「よく聞くんだよ。かかはね今すごく大変な状態でね、もう助からないかもしれないんだ」
と言ってくるので、どういう意味か分からず、弟と二人で
「でも助かるんでしょ?」
と聞いてしまいました。
それを聞いたじじは、今にも泣き出しそうな悲しい顔をして、
「でもね…無理なんだよ」
と言うので、「何で無理なの?」「どうして助からないの?」「キセキはないの?」と、聞きたいことはたくさんあったけど、じじは泣き出してしまいました。それでようやく理解しました。
それは、「かかが死ぬ」という答えです。でもあまり実感がわかないので、テレビドラマでよくある、「キセキ」が起こるのを信じていました。
「きっとかかは助かるよ」　きっと…
それからは、じじのお兄さんの車に乗り換えて、かかのいる病院に向かいました。車の中で私は、どうしていきなりかかが死んでしまうことになったのか、不思議と不安で頭がいっぱいになり、現実から逃げるように、私は眠ってしまいました。
二時間程経ち病院に着くと、いつもは入れてもらえない病室に案内されました。
病室の中には沢山の点滴や管に繋がれ、ベッドで横になっているかかと、その近くでかかを見守っている、ととがいました。
それからは、私と弟はかかの手を握り
「かか聞こえる~?聞こえたら手握って~」
と、たくさん呼びかけました。
でもずっと目を瞑ったままのかかは、私達の呼びかけ

には、ほとんど返事をしてくれません。
すると、ととが私と弟を呼び、私達の腕を優しく掴んで話し始めました。
「あのね二人とも、かかはもう長い間生きられません。生きられてもあと一日か二日です」
「でも助かるんでしょ？」
と私が聞くと、
「ううん。ごめんね…無理なんだよ…」
と言うので、最後の希望だった「きっと」が私の前から消えていきました。本当にかかは死んでしまうと知り、私と弟は泣き始めてしまいます。でもととが、私達を優しく包み込んでくれました。今までにないほど優しく…
少し泣くのが落ち着くと、
「最後は一緒にいてあげようね」
と、私達に言いかけます。
そうです。今の私にはかかの病気を治すことも、どうすることもできません。ですが、かかが寂しくならないように、そばにいることは、今の私達にできる残された最後のことなのです。
それから数時間すると、一旦家に帰ると言われました。でも私は、ずっとかかのそばにいたかったので、
「行きたくない」
と反論しました。でも、お風呂に入ってこなきゃダメだと言われたので、私も仕方なく帰ることにしました。
家に帰ってからは、すぐにお風呂に入り、寝ました。二時間くらい寝ると、おばちゃん達が来たので、その車に乗り、また病院に戻ることになりました。
でも弟は、次の日に学校でお花見があるからといって、そのままじじと家に残りました。
車の中ではすぐに爆睡して、病院に着くまで起きることはありませんでした。
病院に着くと真っ先にかかの病室に向かいました。病室では、少しでもかかが長生きしてほしいと、神様に祈っていました。
でも、午前二時になると事態は一変して、かかが寝ているベッドのわきにある心電図モニターからアラーム音が鳴り響きました。
モニターを見てみると、今まで波打っていた線が、だんだん動かなくなっていきます。
それを見たととは、急いでナースコールのボタンを押しました。
この音を聞いた瞬間に、かかがこれからどうなってしまうのか、私には分かり、覚悟を決めました。
それから一分くらいして看護師さんが来ると、かかにつながれている人工呼吸器を調節し始めました。でもいくら調節しても、心電図モニターのアラームが鳴り響いてきます。
そこでようやくお医者さんが到着すると、聴診器でかかの心臓の音を聞き始めました。私は「お願いだからかかの心臓動いて！」と心の中で叫び続けます。
そしてお医者さんが顔を上げると、
「そばにいてあげてください」
と言うので、私は涙が止まりませんでした。そばにいるみんなもかかの周りに集まり、泣きながらかかの「最期」を見ています。
そしてお医者さんが、
「声をかけてあげてください」
と言うので、ととは涙を流し、震えた手でかかの手を握り、
「ぁ…ありがとう…」
と繰り返し、最後の思いを伝えていました。
でも私は、声ではなく涙ばかりが出てきて、伝えたい思いを伝えることができませんでした。
「育ててくれて、ありがとう」
その言葉を伝えられれば良かったのに…
午前二時十分かかは亡くなりました。副作用の病気によって。
かかは寝ているかの様で、今にも起きてきそうです。でも目が半開きになり、ばばが何度も手で閉じてあげても、だんだん開いてきてしまいます。
そんなかかを見ていると、自分で目を閉じる力すら、死んでしまうと無くなってしまうので、悲しいです。

それからは、かかが使っていた病室の片付けをやり始めました。数時間前までは、お守りや写真が飾ってあったのに、片付けてしまうとかかの存在までもが、一緒に消えてしまっているようで、片付けるのがとても辛かったです。

病室の片付けが終わると、かかをストレッチャーに乗せて、地下室の「霊安室」まで運んで行きました。

私は初めて病院に「霊安室」という部屋があると知り、そこで何をするのか分からず不安でした。

そこで数分待つと、霊柩車が玄関に到着し、かかを乗せて私の家まで走って行きました。本当なら病気が治って退院してから、一緒に帰りたかったです。

私はととの車に乗り、まだ朝ご飯を食べていなかったので、コンビニで「ぽっぽ焼」を買い、車で帰りながら食べました。

車の中では、まだかかの死に実感がわかなかったので、「もしかしたら、かかもこの車に乗ってるんじゃないの?」と笑い話をしていました。でも、ととは声だけが笑っていて、顔は今にも泣きそうでした。

途中から寝ていた私は、気が付くと家に到着していました。家にはたくさんの車が停めてあり、家の中にはたくさんの親戚の人が集まっていました。

すると、その中の一人のおばあちゃんが私のところまで来て、ぎゅっと私を抱きしめました。私は一瞬驚きましたが、おばあちゃんの優しさがとても温かく、温もりを感じられました。

かかは座敷で寝ていて、その周りにはお参りに来た人がいつもいて、たくさんの人が泣いていました。

今までは、かかの死はあまり実感が湧きませんでしたが、時間が経つにつれ、温かかったかかの肌も氷のように冷たくなっていて、

「ああ…死んじゃったのか…」

といきなり悲しくなって、泣いていました。

お通夜やお葬式には、たくさんの人が来ていたので、かかはたくさんの人に愛されていたのだと知りました。

でも私は悲しかった…それだけが記憶に残っています。

そして…かかに会えるのが最後である火葬では、かかの頬を優しく撫でて、別れを告げました。

こんなにも綺麗なかかが、この世から消えてしまうなんて…悔しさと悲しさが心の底から込み上げてきました。

かかがこの世からいなくなる瞬間、私は今までにないほど大きな声で泣きました。

こんな感情は生まれて初めてです。

神様の意地悪…

一通りのことが終わって一段落がついた頃、私は不思議なことをととから聞きました。それは、かかが亡くなってから起きた、かか自身のことです。

一つ目は、隣の家の女の子がお参りに来た時です。その子が帰る時、道路を散歩して家に帰って行くかかの姿を見たというのです。きっとかかは外に出たかったんでしょうね。

二つ目は、おばちゃんの旦那さんがお風呂に入っていると、黒い影が動いていたというのです。

そして三つ目は、これを聞いた私は本当に驚いた内容です。かかの友達の知り合いで、東京に住んでいる女の人がいます。その人は霊が見えるらしく、かかの友達がその人を通じてかかとお話をしたというのです。かかは、

「心配しなくて大丈夫、今はすごく自由だよ、苦しさから解放されて、正直良かったと思ってる」

と言っていたそうです。

かかは自分のことよりも私達のことを心配していて、絶対に迷惑かからないようにしているみたい。

そしてまだ家にしばらくいて、私達のことを見ているそうです。

そして私が一番驚いたのが、「人の未来が全部見える」という事です。

かかは私と弟のことが一番気になっていたみたいで、私達の未来を見た時に、

「自分の死は決して無駄ではなかった」

というのがわかったらしいです。

この話を聞くと、今は体だけいないけど、優しいかかは変わらずに元気でいるようで、本当に良かったです。

かかが病気と戦った二年間。それは、もがき苦しみながらも一生懸命に生き、本気で命と向き合った大切な時間です。

今はもう会えないけれど、どこかで見守ってくれていると信じ、生きられなかったかかの分まで、私は生きていく。

また笑い合える日を楽しみに…

小学生の部

受賞作品

大賞

かずはずっといきる
川名 蒔子 埼玉県 尾間木小学校 一年

佳作

おばあちゃんの本当のお母さんを探す旅
本多 祐実香 北海道 追分小学校 三年

ひいおばあちゃんの戦争体けん
齋藤 宣人 東京都 暁星小学校 三年

選考委員特別賞

あさのあつこ賞　ぬっちまった
青木 龍之介 福岡県 小石小学校 五年

最相葉月賞　DER WÜRFEL
チャケ レオン ドイツ Jakob-Fugger-Gymnasium 六年

リリー・フランキー賞　「食べることは生きること」給食から学んだ食の大切さ
田村 萌梨 鳥取県 鹿野学園 六年

最終候補作品

やっがたけ日記
中馬 ひかり 東京都 五年

猫が教えてくれたこと
前田 海音 北海道 五年

ありがとう僕の蚕、シルシル
角田 光 神奈川県 三年

ぼくとペルテス
木村 守 神奈川県 六年

できる！やりたい!!世界のために
川口 颯 埼玉県 四年

佐藤開地へんしん物語
佐藤 開地 宮城県 三年

ハトとわたしの戦い
野入 桃子 福岡県 三年

トマトのかんさつきろく
志賀 優龍 愛知県 二年

はこねロープウェイ
立之 英人 神奈川県 二年

まぼろしのキノコ
坂本 美玲 福岡県 三年

学校団体賞

（五十音順）

北九州市立浅川小学校（福岡県）
東京学芸大学附属大泉小学校（東京都）
横浜市立長津田小学校（神奈川県）

中学生の部

受賞作品

大賞

命の襷を繋ぐ時
座間 耀永 東京都 青山学院中等部 三年

佳作

「平和のバトン」は「命のバトン」
井口 穂香 新潟県 上越教育大学附属中学校 二年

ウズラと暮らせば
石川 照葉 大阪府 三国丘中学校 三年

選考委員特別賞

あさのあつこ賞　あたりまえとは
國丸 祐司 福岡県 筑穂中学校 三年

最相葉月賞　転校を経験して
（ペンネーム）小山 公也 岩手県 一年

リリー・フランキー賞　かか
林 翠恋 新潟県 上越教育大学附属中学校 一年

最終候補作品

続・ILOVE歌舞伎～私の歌舞伎日記～
大石 寛子 福岡県 三年

「ドウシテ、コロナッタ」
小林 咲き 東京都 三年

「幼い子供」と「アレルギーの認識」について
淨慶 栞 滋賀県 三年

虹と向かう～君とのキセキ～
新池谷 悠 群馬県 三年

あのときの意味
三浦 かんな 北海道 一年

表現するということ（演劇との出会い）
田村 綾梨 鳥取県 三年

わたしの「おくのほそ道」紀行
平田 佳乃 東京都 三年

一期一会
小畑 春翔 大阪府 二年

12時間の寄り道
大村 宙 福岡県 二年

活動報告書
猿渡 恵 福岡県 二年

学校団体賞

（五十音順）

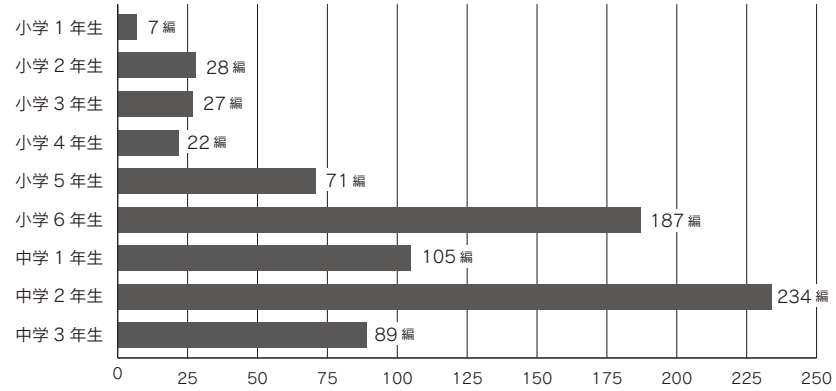
飯塚市立筑穂中学校（福岡県）
大阪府立富田林中学校（大阪府）
シンガポール日本人学校中等部（シンガポール）

2021年　子どもノンフィクション文学賞応募結果

◎応募受付数 770編

小学生342編（昨年260編）／中学生428編（昨年97編）

◎応募者学年別構成



◎応募者地域別構成

地　域	応募数			九州内訳（再掲）	応募数		
	小学生	中学生	合計		小学生	中学生	合計
北海道	3編	4編	7編	福岡県（北九州市除く）	15編	94編	109編
東　北	2編	18編	20編	市　内	52編	9編	61編
関　東	227編	81編	308編	佐賀県	1編	0編	1編
信　越	3編	26編	29編	長崎県	0編	0編	0編
北　陸	0編	0編	0編	熊本県	0編	13編	13編
東　海	2編	8編	10編	大分県	0編	0編	0編
近　畿	28編	41編	69編	宮崎県	0編	2編	2編
中　国	2編	1編	3編	鹿児島県	0編	0編	0編
四　国	1編	6編	7編	沖縄県	1編	0編	1編
九　州	69編	118編	187編				
海　外	5編	125編	130編				
合　計	342編	428編	770編	合　計	69編	118編	187編

事前選考委員

（五十音順）

相本 倫子　石橋 聡　伊藤 和人　上野 浩昭　久村 俊介　山中 孝一

第13回子どもノンフィクション文学賞
受賞作品集
二〇二二年三月一九日　発行

編集・発行　北九州市立文学館
〒八〇三―〇八一三　北九州市小倉北区城内四―一
電　話　〇九三―五七一―一五〇五
ＦＡＸ　〇九三―五七一―一五二五

印刷・製本　株式会社ゼンリンプリンテックス
登録番号　北九州市印刷登録番号　２１１０１０７Ａ号

※本書掲載の記事及び写真の無断転載・複製を禁じます。